

Title	【資料編 2】[第2編: 百年の出来事] 第5章: 戦時体制
Author(s)	京都大学百年史編集委員会
Citation	京都大学百年史 : 資料編 ; 2 (2000): 375-488
Issue Date	2000-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/152912
Right	
Type	Book
Textversion	publisher

第五章 戦時体制

解題

一 戦時下の制度・組織改革

滿洲事変勃発後、いわゆる滿蒙に対する国民の関心も高まっていくが、京都帝国大学においても滿蒙関連の組織がいくつか結成された。一九三二年一〇月には「滿洲国に対する科学的批判と認識をなす」ことを目的とする京大滿洲会が発会している〔一〕が、活動の具体的内容は不明である。一九三四年に発足した滿蒙調査会は全学的な組織であり、各分野ごとの本格的な調査研究を目的として〔二〕〔三〕、寄附金を募って活動を行った。

この他、一九三三年一〇月には研究発表、外国語講習などを行う組織として京大滿蒙研究会が発足しており〔四〕京帝国大学新聞〔一九三六年一一月五日〕、一九三九年二月には京都帝国大学東亜研究会と改称して活動が続いていた。一九三七年五月には京大在学中の「滿洲国」および中華民国からの学生の修学を指導し、親睦を深めることを目的に修文会が発足している〔五〕。なお、『京都帝国大学一覽』によれば、一九三七年八月現在、中華民国出身の学生生徒は合計八三名、「滿洲国」出身は四八名を数えていた。

一九三七年以降中国との戦争が本格化して、国内における戦時体制が強化されるようになると、大学内でも様々な組織作りや運動が開始された。同年九月には召集された職員およびその家族への援助を目的に応召者後援会が発足した〔五〕。また、政府主導の国民精神総動員運動が全国的に展開されると、京大でも、学生を会員に「八紘一字」の精神を普及することを目的とした報国会が発足した〔六〕ほか、時局に関する認識の普及、学生生徒の訓練、公私生活の刷新自粛などで多くの行事が催されたり〔七〕〔八〕、貯金の励行を目的に本部国民

貯蓄組合が結成される〔八〕など、これに呼応した体制が築かれていった。一九四〇年一月には、学内における国民精神総動員運動実践機構ならびに事務分掌につき文部省に報告している〔一二〕。

一九三九年五月、時局に応じた奉公を尽くすことを求めた「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が発せられたが、これに対応して七月にはこの趣旨に副うための具体案を作成している〔九〕。また、同年十二月には職員中の在郷軍人を会員とした在郷軍人会京都帝国大学分会を置くことが評議会で決定され〔一〇〕、「軍人トシテノ陶冶ヲ致」すことを定めた。

一九三九年二月、評議会において羽田亨総長より「本学独自ノ立場ニ於テ研究、教育、訓育ニ対シ如何ニセバ綜合大学タルノ実績ヲ挙げ得ベキカ」審議したい旨提案があった。この年の一〇月には、教育審議会における議論の動向を踏まえ、大学制度についての学内意見の集約を図るよう総長から提起があったばかりであり、戦時体制の進行するなか、大学全体として今後の方向性を確立する必要性に迫られていたといえよう。翌年一月から各評議員が四委員会に分かれて議論を開始し、研究に関しては理学研究所、生物学研究所、日本文化研究所の三研究所新設案が提示され（その後の検討を経て日本文化研究所は先送りとなり、他の二研究所は自然科学研究所にまとめられたが実現することはなかった）、教育、訓育に関しても各学部意向を集約し、それぞれ改善案が検討された〔二三〕〔二四〕。審議は七月に終了し、可能な事項から順次実施されることが確認された。

大学、高等学校の校友会については、一九四〇年九月頃から文部省より修練組織としての強化を図るよう指示があり、これを受けて京大の校友会でも組織改革に関する議論が開始された。同年一月には改組準備委員会が開かれ、校友会の学内における位置づけや、大学における体育の必要性、組織の改編などが検討された〔一五〕。その折には、名称の変更は必要なしとされていたが、文部省の意向により結局同学会と改められることが決議され〔二六〕、一九四一年四月から「同学会規則」〔一七〕が施行された。

一方、戦争の長期化、深刻化とともに、全職員を対象とする大学の防衛、戦力増強などのための組織も作られていった。一九四一年八月結成の防衛團〔一八〕、一九四四年六月結成の勤労報国隊がそれである〔二〇〕。さ

らに一九四五年七月には、後述の報国隊が廃止され、教官職員および学生生徒全員で編成された学徒隊が結成された(二一)。研究面においても、戦力増強のために緊要な研究を行う自然科学系の総合研究組織として緊急科学研究体制が発足した(一九)。これは敗戦まで継続し、敗戦後には研究内容を改め、部局横断的な研究組織である総合研究体制に引き継がれた。

以上のほかにも、学部あるいは有志を単位として戦局に即応した研究組織などが多数結成されており、京大が帝国大学の一つとして戦争と深い関わりを持っていたことを示しているが、これらの活動の実態については不明の部分が多いのが現状である。

二 荒木文相改革問題

一九三八年七月、かねてより病氣療養中だった浜田耕作総長は自らの友人でもある医学部教授の刑事事件に衝撃を受け、辞意を表明した。浜田の意を受け、後任総長候補者選挙の準備が始められたが、荒木貞夫文相が浜田慰留の意向を示したため、予定された選挙は延期された(二)。併せて荒木は、一九一九年以来行われてきた総長公選を不可とする意見を表明した(二)(後日、総長以外の職員の選挙による選出にも反対を表明した)。

したがって、浜田が七月二五日に現職のまま死去すると、後任の決定方法が京大にとって緊急の課題となることになった。京大では七月二六日、総長候補者決定方法が一旦決定される(三)が、その後他の帝国大学との協議に基づき右の決定は取り消され、他の帝大と協調して具体案を作成することに改めて決定された(四)。八月五日には特別委員会(のち大学制度調査委員会と改称)が開催され、具体的結論には達しなかったものの、従来の詮衡内規の精神を生かす方向が確認され新聞発表の原稿を各帝大に送付した(五)。これに対して、文部省側の意向は八月一三日付の「山川局長私案」(六)、二四日付の「文部省案」(七)のいずれにおいても、選挙による総長、学部長、教授の選考を不可とし、教授の意見は聞くが、具状権をもつ総長が学内の意向を主体的に取りまとめる役割をもつことを内容としていた。その後京大では大学制度調査委員会で議論を重ねる(八)一方、東大や他の帝大と協議を繰り返し(九)、解決策を模索した。その結果、一〇月二〇日に東大を除く五帝大案が文

部省と了解に達し、東大も遅れて二八日には五帝大案と同趣旨の内容で合意に達した。五帝大案に関しては二日に評議会で追認されたが、「選挙」のかわりに「答申」という言葉を使用し、その「答申」は「署名セル文書其他責任ヲ明カニスル方法ヲ以テ之ヲ為スモノトス」と規定されている(二〇)。しかし、実際の運用においては詮衡直後に答申書は焼却されたため、従来の投票による方法と実質的には変わらず、辛うじて大学のもつ人事権は維持されたといわれている。

三 戦時下の儀式・行事

戦時色が深まるにつれて、大学においてもこの時期特有の儀式・行事が数多く催されることになる。

一九三九年一〇月八日には、日中戦争で戦死した職員、大学院学生、学部学生一四名の合同慰霊祭が行われた(二一)。以後合同慰霊祭は一九四一年一〇月二九日(四名)、一九四三年二月四日(一四名)、および敗戦後の一九四六年一〇月二九日(二二名)にも行われた。

一九四〇年には紀元二千六百年記念行事が各地で開催されたが、京大でも各部局より記念事業案が提出され(二二)、検討の結果、講演会および展示等の学内開放を行うこととなり、十一月一六、一七の両日に実施された(四)。また、同じく記念事業の一つとして京大の歴史を編纂することが協議された(二三)。その結果編纂が開始されたが、完成は予定より遅れ一九四三年二月に『京都帝国大学史』として刊行された。

戦意高揚を目的とした行事としては、日中戦争時から南京や漢口陥落の祝賀式が時計台前で開催されていた。英米との戦争が始まると、一九四一年十二月には宣戦布告の詔書捧読式が挙行され(二五)、その翌年(二六)さらに翌々年の同じ時期にも宣戦を想起するための記念行事が開かれていた。

四 学徒動員

農村や工場における労働力不足を補うため、学生生徒の勤労動員が戦時体制下行われるようになった。学徒動員の法的整備の最初は、一九三八年四月の国家総動員法公布(資料編一、八五〇頁)であり、同年の夏期休暇から全国の高等学校、大学で集団勤労作業が始まったとされるが、京大における学徒動員の史料上の初見は、

翌一九三九年四月の農学部グラウンドの修理(一)と遅く、その参加者も少なかったと報じられている。その後、文部省の指示により一九四一年九月に学生生徒の修練組織として報国隊が発足する(二)と、動員は報国隊の出勤という形をとることになった。報国隊は一九四一、二年の間は、京都市内の防空演習に参加し(三)(四)、空襲に備えた体制の整備を進めた(五)が、一九四三年以後動員は本格化し、土木工事や農作業に学生たちは駆り出されるようになった(六)(七)(八)。制度面では、一九四四年一月の緊急学徒勤労動員方策要綱において継続的に同一学徒を四か月動員することが可能になり、以後の動員は長期化することになる。また同年四月には文部省に学徒動員本部が設けられたほか、八月には学徒勤労令(資料編一、八五三頁)が公布され「勤労即教育」の名のもとに一年継続の動員もできるよう定められた。さらに翌一九四五年三月になると「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、国民学校初等科を除く授業の一年停止、学徒隊の編成などが定められ、五月にはこれを受けて戦時教育令(資料編一、八五六頁)が公布されるに至った。また、法学部では同年六月、病気等のため召集されなかった学徒すべてを各地に動員することを決定しており(一一)、すでにこの段階においては、次項の学徒出陣と合わせて大学の教育体制は崩壊に瀕していたといえる。

五 学徒出陣

一九四三年一〇月二日、在学徴集延期臨時特例(資料編一、八三九頁)が公布され、理工系など一部の入営延期措置適用者を除き、徴兵年齢に達する学生生徒は検査の後入営・入団することが定められた。すでに在学徴集延期期間の短縮や在学年限そのものの短縮によって、高等教育機関在学者の徴集猶予という特権は失われつつあったが、ここに至り在校中の学生生徒も徴集されるようになった。

臨時徴兵検査は一〇月二五日より十一月五日まで、陸軍入営が二月一日、海軍入団が二月一〇日と定められ、京大においても入営・入団までの期間は授業を午前中に限り、講演会、座談会、映画鑑賞、行軍など出征する学徒を対象に様々な行事が催された(一二)(一三)(一四)。十一月二〇日には、農学部グラウンドで全学の出陣学徒壮行式が挙行されている(一五)(一六)。この壮行式の様子は文学部講師の経歴をもつ須田国太郎によって油絵

に描かれている〔八〕。

また、朝鮮・台湾出身の学徒に対しては志願による出征が働きかけられ、別に壮行式が催されている〔七〕。出征者の総数に関しては、法・文・経三学部で残留者が二割強との報道はある〔三〕が、学内に系統的な資料がなく、現在に至るも不明である。

六 戦時下の大学生生活

戦時下においては、学生に対する訓育指導の方策として教員と学生との接触の機会を多く持つようにするという意見がしばしば見られるが、京大では早くも一九三五年度より指導教官制が導入されることになったという〔一〕。しかし、その実態は不明であり、一九四〇年に前年来の医学部にならない法経両学部で開始された指導制度〔六〕との関係も分かっていない。

健康面では、当時学生の病氣としては結核性疾患が最も多く〔二〕、戦時体制が深まるにつれ、病氣の予防、体位向上が大学の大きな課題となってくることになった。

一九三六年には、文部省より教学刷新の見地から日本文化に関する講義を学生を対象に行うよう指示があり〔三〕、同年一〇月より各学部で開講された〔四〕。これは、一九三八年から学生課主催の月曜講義として学外にも開放されるようになり、『京都帝国大学新聞』の記事によると一九四四年の開催まで確認できる。

一九三七年一月には、学生課の手で全学学生の生活調査が行われた。その集計が『京都帝国大学新聞』に掲載されており、学生の経済生活、趣味娯楽、修養形態、持病など、当時の学生生活の側面を表わいて興味深い〔五〕。

思想運動面では、一九三〇年代後半になると左翼運動は衰退し、かわって文部省では右翼的学生運動に注意を払うようになってくる。文部省の基本的方針としては訓育の一元化をはかるといふ名目のもと、学校横断的組織への学生生徒の参加は認めない方向をとっていたが、京大でもそれを受けて一九四〇年九月、学外団体の実践運動に参加しないよう告示を出すことを決定している〔七〕。

一九四二年一〇月、国の貯蓄励行政策に呼応して学生生徒国民貯蓄組合が結成され、学生生徒は強制的に一定額の貯金を納めることとされた〔九〕。また、国策協力の究極的形態としては、戦局が深刻化した一九四五年四月に尊皇攘夷学徒蹶起大会が挙行され、「君国に報する」ため京都帝国大学学生に「最難の部署に就かしめよ」との決議があげられたことが注目される（一〇）。

戦時期の留学生関係では、一九四一年五月に親睦機関として「京大満洲国留学生クラブ」が創設されている〔八〕ほか、一九四五年になると中国や南方からの留学生で日本の大学で勉強することを希望する者は、京大で集中的に受け入れる政策がとられることになり、五月に入学式が挙行された〔一一〕が、まもなく敗戦となったこともあり、その正確な実態は不明である。

（西山 伸）

一 戦時下の制度・組織改革

一 京大満洲会発会式 大野主事曰く「右翼とみるは認識の不足だ」

一九三二（昭和七年）年一月五日

〔三三〕

京大満洲会発会式 大野主事曰く「右翼とみるは認識の不足だ」

約八十名の会員を擁し、学内における一有力団体たる存在

を確保しつつ、着々準備中であつた本学満洲会の発会式は去る卅一日午後七時より楽友会館にて盛会裏に挙行された、^{〔新選〕}新城総長をはじめ、事件発生以来渡滴せる諸教授約十名、学生課職員、学生等々六十名近くの出席者は日の丸と満洲国旗とをバックにせる会場に居列んで、雄雄しく第一歩を踏み出した同会に対して祝辞、批判、希望等々を述べれば、大野指導教授代理は同会の性質について「本会はその名前の故に猶興学会愛国学生聯盟等と同じく、右翼的傾向をもつた団体と見做されてゐるが、それは一つの認識不足で、本会の使命とするところは、右偏せず左偏せず、満洲国に

対する科学的批判と認識をなすにある」と述べた、尚同会
の具体的事業は未定であるが今後定期的に各学部教授を中
心に研究会座談会を催す予定になつてゐる

二 満蒙調査会規程

一九三四(昭和九)年三月八日
〔二六〕

京都帝国大学満蒙調査会規程

第一条 本学ニ満蒙調査会ヲ置く

第二条 満蒙調査会ハ京都帝国大学総長ノ監督ニ属シ満蒙

ニ関スル左ノ事項ヲ調査研究ス

一 法制ニ関スル事項

二 地理、歴史、言語及宗教等ニ関スル事項

三 財政経済ニ関スル事項

四 自然科学ニ関スル事項

五 医事、衛生ニ関スル事項

六 農業、林業、畜産業及農業土木等ニ関スル事項

七 工業、鉱業、交通、運輸、水利及動力等ニ関スル事

項

八 移植民ニ関スル事項

九 特産物ノ利用ニ関スル事項

十 其ノ他調査会ニ於テ必要ト認メタル事項

第三条 満蒙調査会ハ会長一人理事七人委員若干人ヲ以テ
之ヲ組織ス

前項ノ外必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置くコトヲ得

第四条 会長ハ京都帝国大学総長ヲ以テ之ニ充ツ

理事ハ京都帝国大学教授中ヨリ会長之ヲ依嘱ス但シ各学

部一人宛トス

委員ハ京都帝国大学教授又ハ助教教授中ヨリ会長之ヲ依嘱

ス

臨時委員ハ京都帝国大学教授、同助教教授若ハ満蒙ニ関ス

ル学識経験アル者ノ中ヨリ会長之ヲ依嘱ス

第五条 理事及委員ノ任期ハ一箇年トス但シ重任ヲ妨ケス

第六条 会長ハ会務ヲ総理ス

会長事故アルトキハ会長ノ指名シタル理事其ノ職務ヲ代

理ス

第七条 満蒙調査会ニ賛助員ヲ置き本会ノ事業ヲ翼賛シタ

ル者ノ中ヨリ会長之ヲ依嘱ス

第八条 満蒙調査会ニ幹事三人ヲ置く幹事ハ京都帝国大学

書記官並庶務課長及會計課長タル京都帝国大学事務官ヲ

以テ之ニ充ツ

幹事ハ会長ノ指揮ヲ承ケ会務ヲ掌理ス

第5章 戦時体制

第九条 満蒙調査会ニ書記若干人ヲ置キ会長之ヲ命ス
書記ハ会長及幹事ノ指揮ヲ承ケ会務ニ従事ス

三 満蒙調査会調査事項調

一九三四(昭和九)年七月五日 (二六)

京都帝国大学満蒙調査会調査事項調

調査事項	学部	教官氏名
一 満蒙ニ於ケル土地制度 一 満蒙ニ於ケル家族制度 ノ調査	法学部	教授 石田文次郎 牧 健二
一 満蒙ニ於ケル風俗習慣ト疾病トノ関係 一 満蒙ノ人種ト疾病トノ関係 一 満蒙ニ於ケル地理学的病理学 一 満蒙ニ於ケル古代人種ノ疾病 一 満洲移民ト其風土服合策ノ研究一般 一 満洲ニ於ケル慢性疾患調査	医学部	教授 清野謙次 舟岡省五

一 満洲ノ氣候ト住居ニ関スル研究	一 満蒙ニ於ケル高級耐火材料ノ研究	一 北満ニ於ケル含金層ノブラツク、サンドニ関スル研究	一 満和辞典ノ編纂	一 満洲国産淡水生物ノ研究	一 満洲産穀物ノ生化学的研究	一 東亜各地方(満洲国東南部)ニ於ケル重力偏差測定	一 満洲国ノ専売制度	一 満洲国ニ於ケル社会問題	一 満洲ノ果樹園芸特ニ梨及果ニ関スル調査研究	一 満洲ニ於ケル農作物育種ニ関スル研究	一 満洲材ノ利用ニ関スル研究	一 満蒙ノ土壤肥料ニ関スル研究
助教 大谷佐重郎	教授 吉岡 藤 作	教授 倉内 吟二 郎	文学部 教授 羽 田 亨	理学部 教授 川村多實二 小 松 茂	教授 松 山 基 範	教授 汐 見 三 郎 石 川 興 二	教授 菊 池 秋 雄	教授 竹 崎 嘉 德	教授 市 河 三 祿	教授 大 杉 繁		

一 満洲移民ノ食物ニ関スル研究	農学部	近藤金助
一 満蒙ニ於ケル家畜ノ合理的飼養ニ関スル研究	"	
一 満蒙ニ於ケル畜産物ノ利用ニ関スル研究	"	
一 満洲国産木材ヲ原料トスル人絹用並ニ製紙用バルブ製造ニ関スル研究	"	志方益三
一 満洲国ノ纖維作物ノ利用加工ニ関スル研究	"	橋本傳左衛門
一 満洲ニ於ケル農業経営及移民ニ関スル研究	"	

四 修文会会則

一九三七(昭和一二)年五月八日 (二三)

京都帝国大学修文会会則

第一章 総則

第一条 本会ハ京都帝国大学修文会ト称ス

第二条 本会ハ京都帝国大学ニ在学中ノ満洲国及中華民國

学生ノ修学ヲ指導シ若ハ便宜ヲ与ヘ日滿華各国学生ノ親睦ヲ計ルヲ以テ目的トス

第三条 本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

一、学寮ノ経営

二、学修施設ノ助成

三、見学、旅行、講習会、講演会、談話会、音楽会、運動会

四、其ノ他必要ナル事業

第二章 役員及役員会

第四条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長 一名

理事 四名以上六名以内(内一名ヲ理事長トス)

監事 二名

評議員 若干名

第五条 会長ハ京都帝国大学総長ヲ推戴ス

第六条 理事長ハ京都帝国大学書記官ニ其ノ他ノ理事並ニ

監事ハ京都帝国大学学生主事及京都帝国大学本部事務官

ノ中ヨリ会長之ヲ囑託ス

理事長ハ会務ヲ統理ス理事ハ会務ヲ分掌ス

監事ハ本会ノ会計ヲ監査ス

監事ハ本会ノ会計ヲ監査ス

理事ハ理事会ヲ組織シ本会ノ要務ヲ議ス

理事会ハ理事長之ヲ召集シ議長ハ理事長之ニ当ル

第七条 評議員ハ外務省、文部省関係高等官及京都帝国大学教官中ヨリ会長之ヲ囑託ス

評議員ハ評議員会ヲ組織シ本会ノ重要ナル事項ヲ審議ス
評議員会ハ会長之ヲ召集シ議長ハ会長之ニ当ル

評議員会ノ議事ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス

理事及監事ハ評議員会ニ出席ス

第八条 評議員ノ任期ハ三年トス但シ重任ヲ妨ケス

補欠トシテ選任セラレタル評議員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第九条 会長ハ事業遂行ノ為必要ニ応シ委員ヲ依囑スルコトヲ得

第十条 会長ハ本会事業ニ関シ学識経験アル者ヲ顧問ニ其ノ趣旨ヲ賛助スルモノヲ賛助員ニ推薦ス

第十一条 本会ニ主事以下事務員ヲ置ク

事務員ハ理事長之ヲ囑託又ハ命免ス

事務員ハ上司ノ命ヲ承ケ本会ノ事務ニ従事ス

第三章 会 計

第十二条 本会ノ經費ハ政府ノ交附金、寄附金、隨時徴収

スル会費其ノ他ノ収入ヲ以テ之ヲ支弁ス

第十三条 本会ノ資産ハ会長之ヲ管理ス

第十四条 本会ノ収支決算ハ監事ノ監査ヲ經、評議員会ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

第十五条 本会ノ會計事務ハ會計法規ニ準拠シ取扱フモノトス

附 則

第十六条 本会則ヲ変更セムトスルトキハ評議員会ニ於テ
総員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

五 応召者後援会

一九三七(昭和一二)年九月一六日 (二六)

京都帝国大学応召者後援会

一、本学関係職員ニシテ日支事変ニ際シ召集セラレタル
トキハソノ行ヲ壮ニシシ本人並ニ其ノ家族ニ対シ必要
アル場合臨機援助ヲナスヲ目的トス

二、応召者ニ対シ餞別トシテ金ニ拾円ヲ贈呈ス

三、応召者並ニ其ノ家族ニ対シ特ニ慰藉救助ヲ必要ト認
ムル場合ハ委員ノ協議ニヨリ金品ヲ贈与スル事ヲ得
四、応召者並ニ其ノ家族ニ於テ緊急ノ場合ハ必要費用ノ

融通ヲナスコトヲ得

五、融通ノ条件、債務免除等ニ付テハ委員ノ決定ニヨル

六、本会事業費ニ充ツルタメ有志高等官ヨリ俸給額百分

ノ一ノ寄附ヲ受ク(講師等ニシテ毎月給与ヲ受クルモノモ含ム)

七、判任官以下ノ有志アルトキ八月俸二百分ノ一ノ寄附

ヲ受ク

八、第一回寄附ハ九月ニ徴集ス爾後必要ニ応ジテ予メ通

知ノ上徴集ス

九、本会々々長ハ総長ニ委嘱ス

一〇、本事業ノ重要事項ヲ協議決定スルタメ委員ヲ置ク委

員ハ書記官各学部部長医院長化学研究所長ヲ以テ之ニ

充ツ

一一、書記官ヲ幹事トシ事務ヲ担任ス

一二、事務処理ノタメ庶務會計課及ヒ各部局書記ヲ囑託ス

兵籍関係者応召者数調

部局別	応召者数	兵籍者数
庶務課	二	六
會計課	五	一三

計	化学研究所	演習林	農場	農学部	経済学部	理学部	文学部	工学部	医学院	医学部	法学部	学生課	図書館	管理課	営繕課
一一八	二	四		六	一	一	五	一一	六二	一四	一	一	一	一	一
	三五	一三	八	六四	一九	取調中	三三二	六六	取調中	四四	一〇	六	七	一五	一六

六 京大報功会

一九三七(昭和一二)年一〇月一四日
〔二六〕

京大報功会

綱領

皇国未曾有ノ非常時ニ際会シ吾人ハ彌々肇国ノ理想タルハ
〔越カ〕
□一字ノ大精神ニ透徹シ皇道宣布ノ聖業ヲ翼賛シ奉ラン事
ヲ期ス

目的

一、国民精神総動員ノ一翼トシテ学徒ノ立場ヨリコレガ思
想的文化的の中核タランコトヲ期ス

二、出征将士ノ労苦ニ報ヒ征戦勇士ヲシテ後顧ノ憂ナカラ
シメンガ為統後ノ後援ニ万遺漏ナキヲ期ス

会則

一、総則

第一条 本会ハ京都帝国大学報功会ト称ス

第二条 本会ハ綱領ノ精神ヲ学内其他ニ普及徹底セシメ

ン事ヲ期ス

二、事業

第三条 綱領ノ精神達成ノため左ノ事業ヲ遂行ス

1 講演会及ヒ研究座談会

2 其他必要ナル事業

三、会員

第四条 本会ノ会員ハ京都帝国大学学生ヲ以テス

四、役員及任期解任

第五条 本会ニ名誉会長一名、会長一名、副会長二名、

顧問若干名委員若干名ヲ置ク

第六条 名誉会長ニハ京都帝国大学総長ヲ推戴ス

第七条 会長、副会長、顧問ハ本学教職員ニ之ヲ委嘱ス

第八条 委員ハ本学学生ヲ以テ之ニ充ツ

第九条 委員ノ任期ハ一ケ年トシ九月改任期ヨリ起算ス

第十条 委員ノ改任ハ前任委員会ノ議ヲ経テ之ヲ決ス

五、会務

第十一条 会長ハ本会ヲ統括代表ス

第十二条 副会長ハ会長ヲ補佐シ会長事故アルトキ之ヲ

代理ス

第十三条 顧問ハ本会事業ヲ援助シソノ諮問及ヒ指導ニ

応ズ

第十四条 委員ハ委員会ヲ組織シ会務ヲ分担処理ス

七 国民精神総動員実施ニ関スル件

〔七〇〕

一九三三(昭和一二)年六月三日

(一) 時局ニ関スル認識ノ普及徹底ノ件	事 項	内 容	
祝祭日並本学年中行事ニ依ル挙式ニ関スル件	式次第、挙式ノ方法等ハ時局ニ鑑ミ専ラ嚴肅ヲ旨トシ特ニ四大節ニ於ケル拜賀式ハ全学生ヲ一堂ニ会シ一斉ニ拝賀セシムルノ式ニ復シ、国民精神ノ高揚、時局ノ認識徹底ヲ計ルニ力メ、総長、学部長等ノ告辞訓辞ニ於テ特ニ之ヲ強調セリ	中部防衛司令部参謀	昭和十二年十二月六、七、八日 医学部
特殊講義開設	一、防空概論 一、毒瓦斯ニ関スル科学講演	海軍軍医大佐 福井 信立 陸軍軍医大佐 三浦 正義	十一月廿四日 昭和十三年一月十七日ヨリ七日間 授業時数三十時間 医学部
講演会及映画会開催	一、瓦斯防護、衛生要務 一、時局ニ対スル心構 一、映画、大毎ニュース 一、時局ニ対スル国民ノ覚悟	東朝社論説委員 前田 多門 農学部教授 橋本傳左衛門 海軍少将 關根 郡平 配属将校歩兵大佐 河村 秀男	十一月四日 十月六日 十月十日 十月十三日 工学部 工学部 工学部 工学部
一、国家総動員ニ就テ	近代科学工業ノ發展	工学部教授 喜多 源逸	十月十二日 学生 報功会主催 於堀川高女
一、時局ニ就テ	農学部教授 石川 興二 農学部教授 黒正 巖		

一、最近ノ上海	名誉教授	新城 新藏	十月十三日	本学一般
一、上海従軍談	上海自然科学研究所長	新城 新藏		
一、事変ノ渦中ニ処シテ	大毎記者	藤田 信勝	十一月十日	〃
一、北支ノ現状、特ニ大学ニ就テ	医学部教授	新城 新藏	十一月廿二日	〃
一、冬期ノ満洲ニ就テ	同	正路倫之助	昭和十三年 二月廿五日	医学部
一、支那ノ治安工作ヲ囿リテ	大毎記者	清野 謙次	同日	〃
一、支那ノ認識	工学部教授	西村 眞琴	〃	〃
一、蘇聯ノ近状	歩兵大尉	近藤 泰夫	五月 五日	工学部
一、日支事変卜列国ノ動向	歩兵中佐	甲谷 悦雄	昭和十二年 七月一日	配属将校主催
一、支那事変卜国際状勢	海軍少将	林 群喜	〃	〃
一、支那事変卜陸海協同作戰	同	關根 郡平	十月二十八日	〃
一、艦船兵器ノ進歩	同	同 上	十一月一日	〃
一、世界文明ノ転換期ニ於ケル皇国臣民ノ責務	陸軍中将	同 上	十一月二日	〃
		中岡 彌高	十一月四日	〃
			昭和十三年 五月 六日	〃

一、海上権力史	海軍少将	關根 郡平	五月廿四日 廿六日 廿七日	〃
一、時局ニ関スル講演会	一徳会々々長	柴田寅二郎	昭和十二年 十一月廿二日	附属医院
一、上海従軍談	大毎記者	藤田 信勝	十一月十七日	〃
大朝事変ニユース映画			十一月十八日	〃
一、図書閲覧特殊施設	国体、国策、満支事情ニ関スル図書ヲ蒐集、特別ノ書架ニ展示シ、学生等ニ対シ之ガ貸出手続ヲ簡易ニシテ播読ヲ奨励ス		昭和十二年 十一月一日以降	図書館
(二) 時局ニ対スル学生生徒ノ訓練ノ件	一、南京陥落ニ際シ職員学生本部玄関前広場ニ集合 京都市内 学生生徒ノ愛国行進ニ参加、本学参加学生数 壱千貳百名 靖国神社臨時大祭 支那事变戦没者慰霊祭参加 学生代表者参列 医学部学生修学旅行中出雲大社ニ祈願参拝		十二月十三日 昭和十三年 二月十一日 四月廿六日 四月十三日 五月 六日	
(三) 公私生活ニ於ケル刷新自肅ノ件	学内行政一般ニ関スル件 学内行政事務ニ関シテハ特ニ其ノ刷新自肅ニ留意シ、執務全般ニ亘リテ改善ノ跡看ルヘキモノ多シ、特ニ 一、各課長委任事項ノ整理改廃 二、判任官以下停年制ノ確立ヲ実施シタルノ外 三、事務改善ニ関スル打合会ヲ毎月開催シテ所期ノ目的達成ニ力ム		昭和十三年 四月 一日 四月廿一日 昭和十二年 十月以降	

第5章 戦時体制

運動週間強調ノ件 ラヂオ体操実施	秋季ニ於ケル本学運動週間ニ当リ通牒ヲ発シテ特ニ之ヲ強調シ、各部局ニ於テハ夫々身心鍛練ヲ兼ね神社仏閣ニ参拝セリ 工学部ニ於テハ毎朝午前十時之ヲ実施	昭和十二年十月十八日ヨリ二十三日迄	工学部
(四) 校内外ニ於ケル銃後援ノ強化持続ノ件	本学職員応召者ニ対スル饒別贈呈、戦死傷者弔慰問、遺家族救恤ヲ目的トス	昭和十二年八月十日	
応召職員後援会設置	応召職員遺家族診療規定	八月十日	
応召家族診療規定	学外一般ノ応召遺家族ニ対シ診療料金三割引トシ特殊ノ便宜ヲ提供ス	昭和十三年二月四日	
学位記交付ニ関スル件	応召者ノ学位論文審査及学位記交付ニ当リ特殊ノ便宜ヲ計ル	九月二十日以降	
応召家族ノ学生授業料免除、並分納規定ノ件	応召者ノ子弟学生ニ対シ調査ノ上授業料ヲ免除シ、又一時納入困難ナル者ニ対シ分納規程ヲ設ケテ其ノ取扱ヲナス	昭和十二年度第二、三学期昭和十三年度ヨリ実施	
傷病兵慰問ノ件	一、学生課員引率満洲国留学生、京都陸軍病院ニ慰問	昭和十二年十一月十四日	
	一、学徒至誠会京都支部長、本学橋本教授其他 慰問	同日	
	一、医学部学生、旅行中、松江陸軍病院同赤十字病院支部ニ慰問	昭和十三年五月七日	
慰問品発送	一、京大慰問文庫ヲ設ケ、学内ヨリ雑誌約五〇〇部ヲ蒐集偕行杜ラ通シ北、中南支皇軍ニ送付ス	昭和十二年十一月九日	学生課
	一、学生寄宿舎生ノ節約ニ依リ献金ヲ集メ慰問品ヲ第一線皇軍ニ送付ス	十一月卅日	
(五) 非常時財政経済ヘノ協力ノ件			

一、愛国公債購入 職員規約貯金 昭和十三年度教官 欧米出張中止	一、本省通牒ニ基キ学内職員ニ愛国公債購入ニ関シ通牒ヲ発シ 爾後其ノ勸奨ニ努ム 農学部付属演習林ニ於テハ職員規約貯金ノ制度ヲ設ケ勤儉貯蓄 ノ励行ニ努ム 昭和十三年度教官外国派遣並ニ外国出張ハ時局ニ依リ之カ予算 ヲ節減又ハ内国旅費ヘ繰替セラレタルニ付其ノ趣旨ニ鑑ミ欧米 各国ヘノ出張ハ中止シ満支兩國學術視察ノミ行フコトトセリ	昭和十二年 十二月以降	現在購入総額四、七七七円 演習林 本学一般
(六) 資源愛護ノ件 一、輸入物資ノ生産自給ヲ期ス 一、消耗品節約 一、国産薬品ノ使用	キナ、チーク、デリス等ノ輸入物資ノ生産自給ヲ期シテ其ノ増 殖ヲ図リ又ハ木炭ヲ以テガソリンニ或ハ杉皮ヲ以テ鉄板ニ代用 スル等欠乏物資ノ節約ニ努力ス 消耗品費ノ予算減額ヲ行ヒ又石炭、木炭、アルコールノ使用ニ 関シテハ極力節約ヲ為セリ 従来使用セル外国薬品ノ内四十五種ヲ国産品ヲ以テ充当スルコ トトセリ		演習林 本学一般 医 院

八 本部国民貯蓄組合同規約

一九三八(昭和一二)年七月

京都帝国大学本部国民貯蓄組合同規約

第一条 本組合ハ国民精神総動員ノ趣旨ヲ体シ非常時財政
 経済政策ニ協力シ貯金報國ノ実ヲ挙グル為貯金ヲ励行ス
 ルヲ以テ目的トス

第二条 本組合ハ前条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

- 一、公私生活ノ刷新合理化ニ関シ左記ヲ励行スルコト
- 1 衣食住ノ簡易化
 - 2 物資ノ節約、廃品ノ活用
 - 3 冠婚葬祭費ノ節減贈答其他虚礼ノ廃止
- 二、別記標準ニ拠リ毎月一定額ノ貯金ヲ励行スルコト
- 三、其他適當ナル事項

第三条 本組合ハ京都帝国大学本部国民貯蓄組合ト称ス

第四条 京都帝国大学本部ニ在勤スル者ハ本組合ノ組合員タルモノトス、但傭人以下ノ加入ハ之ヲ任意トス

第五条 本組合ノ事務所ハ之ヲ京都帝国大学庶務課内ニ置ク

第六条 本組合ニ組合長及幹事ヲ置ク

第七条 組合長ハ書記官ヲ以テ之ニ充ツ

組合長ハ組合ノ事務ヲ統理ス

第八条 幹事ハ各課長(図書館ニ在リテハ司書官)ヲ以テ之ニ充ツ

ニ充ツ

幹事ハ各課ニ属スル組合ノ事務ヲ管理ス

第九条 本組合ノ事務ヲ処理スル為各課ニ代表者一名ヲ置ク

各課代表者ハ左ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

庶務課 庶務掛主任 会計課 出納掛主任

学生課 庶務掛主任 営繕課 司計掛主任

管理課 総務掛主任 図書館 主任 書記

第十条 組合ハ俸給、給料又ハ賞与ノ支給日ニ於テ別記ノ標準ニ拠ル組合員ノ貯金額ヲ支給額ヨリ差引キ組合員ノ

名ニ於テ郵便局ニ預ケ入ルルモノトス

前項ノ規定ニ依ル郵便貯金通帳ハ各課ニ於テ保管スルモノトス

第十一条 組合員ハ何時ニテモ前条ノ通帳ヲ閲覧スルコトヲ得

第十二条 組合員不慮ノ災害、其ノ他特別ノ事由ニ依リ各課幹事ノ承認ヲ得タルトキハ其ノ貯金ヲ一時中止シ又ハ其ノ額ヲ減スルコトヲ得

第十三条 本組合規約ニ依ル貯金ハ左ノ場合ノ外払戻ササルモノトス

一、組合員退官、退職、転勤又ハ死亡ニヨリ組合ヲ脱退シタルトキ

二、特別ノ事由ニ依リ各課幹事ノ承認ヲ得タルトキ

第十四条 貯金払戻及組合脱退ノ承認ニ関スル証明ハ各課幹事ノ印ヲ以テ之ヲ為スモノトス

第十五条 本規約ノ変更ハ組合員ノ過半数ノ同意ヲ以テ之ヲ決ス

附 則

(別記) 貯金標準額

一、俸給、給料

毎月一口金五拾銭トシ、高等官ハ四口以上、判任官及嘱託ハ二口以上、雇員及傭人ハ一口以上トス

一、賞与ニ付テハ其ノ都度貯金標準額ヲ定ム

本規約ハ昭和十三年七月ヨリ之ヲ実施ス

一、俸給、給料

毎月一口金五拾銭トシ、高等官ハ四口以上、判任官及嘱託ハ二口以上、雇員及傭人ハ一口以上トス

一、賞与ニ付テハ其ノ都度貯金標準額ヲ定ム

一、賞与ニ付テハ其ノ都度貯金標準額ヲ定ム

一、賞与ニ付テハ其ノ都度貯金標準額ヲ定ム

京都帝国大学本部国民貯蓄組合規約細則

- 一、各課ニ別記様式ニ依ル組合員貯金原簿ヲ備付クルコト
- 二、取扱郵便局ハ附属医院内郵便局トシ貯金日当日取扱員出張ノ際、右原簿ニ受領印ヲ押捺スルモノトス
- 三、毎月末、各課組合人員及預金額ヲ庶務課ニ通知スルコト

九 青少年学徒ニ賜ハリタル勅語ノ聖旨奉戴ニ関スル具体

案

〔一二〕
一九三九(昭和十四)年七月四日

青少年学徒ニ賜ハリタル

勅語ノ聖旨奉戴ニ関スル具体案 京都帝国大学

教育ヲ刷新シ皇国人タルノ資質ヲ練成シ、以テ青少年学徒ニ賜ハリタル勅語ノ聖旨ニ副ヒ奉ルベキ方途ヲ審議スルニ当リ、従来本学ニ於テ実施セル万般ノ事項ヲ検討シ、其ノ存スベキハ存シ、改ムベキハ改メテ、直チニ実施スルコト、シ、其ノ具体案ヲ樹ツルコト左ノ如シ。

一、教育ノ刷新

大学教育ノ本義ハ教官自ラ研鑽ト授業トニ専念シ以テ

学生ヲ教導スルヲ以テ第一義トナスト雖学生ハ多数ノ専門ニ分レ、且甚シク個性的發展ヲ遂ゲタル段階ニアルガ故ニ単ニ一般的講義ニ於テ集団トシテ之ニ接スルノミニテハ十分ナル効果ヲ期シ難シ。ヨツテ従来実施シ来レル人文諸科学ニ於ケル演習、自然諸科学ニ於ケル実験実習ヲ一層強化シ師弟ノ接触、薫化ノ実ヲ挙グルニ更ニ努力スルコト。

演習ハ学生ヲ或ハ専門ニヨリ、或ハ各自ノ選択ニ基キ教授ノ指導薫化ヲ徹底スルニ適當ナル小數宛ノ組ニ分カチ、課スルニ学徒ノ須知スベキ斯学ノ權威アル古典、或ハ近代最高ノ發展水準ヲ示スニ足ル書ヲ以テシ、或ハ之ヲ輪講セシメ或ハ之ヲ論題トシテ討議セシメ、随時間ヲ発シテ其ノ咀嚼ノ度ヲ驗シ、判断ヲ整ヘ誤レルヲ正ダシ、又問題ヲ現代ニ採リ或ハ実生活ニ撰ビ各自ノ才能、個性ニ応ジテ學術ノ蘊奧ト學術講究ノ方法トヲ体得セシメ以テ學問ヲ愛好シ真理ニ忠実ナル人格ヲ養成シ学生ノ智能ト判断ト人格トヲ練磨陶冶スルヲ目的トナサントス。

而シテ演習ハ学部ニヨリ或ハ之ヲ必修トナシ、或ハ選択科目トナセルモ其ノ教育的效果ノ顯著ナルニ鑑ミ、之ヲ設備及經費ノ許ス限り凡テ必修トナサントノ意向

ヲ有ス。

自然科学諸科ニ於ケル実験実習ハ個人的接触ヲ容易ナラシムル点ニ於テ略ボ人文科学ニ於ケル演習ニ似タリト雖相互的協力及ビ講師助手等先輩ノ援助指導ヲ要スルコト多ク、極メテ家族的ナル雰囲気ノ中ニ好學ノ情ヲ涵養スルニ最適ノ方法ナリトス。故ニ今後実験実習ニ際シテハ特ニ相互ノ人格の接触ヲ計リ風尚ヲ高ムルニ意ヲ用ヒルコト。

授業内容ヲ益々整備充実シ、時間割ノ如キモ細心ノ注意ヲ以テ編成シ聴講ニ便シ好學ノ情ヲ弛緩セシメザルヤウ努ムルコト。

近ク改築ニ着手スベキ新図書館建物ノ中ニハ陳列室ヲ設ケ、各学部ノ協力ニヨリ各種標本資料等ヲ常時転換陳列シ本學ニ於テ行ハレツ、アル研究ノ概貌ト最近學術ノ發達ノ有様トヲ知ラシムルニ資セントス。

大学生活ニ於ケル共通施設ノ重要ナルモノトシテ図書館及学部図書室ノ設備ヲ出来得ル限り整備充実シ、學術ノ研鑽ト人格ノ修養完成トニ努メシムルコト。

従来行ハレ来レル学部及教室附属ノ研究会、讀書會又ハ雑誌会等ヲ益々盛ニシ指導教官ハ必ズ出席スルノミナラズ其ノ他ノ教官モ出来得ル限り之ニ出席シテ奨励

批判誘導シ向學心ヲ旺盛ナラシムルコト。

右ニ述ベ来リシガ如キ教官ト學生トノ接觸ヲ緊密ニスルコトハ法学部、経済学部ノ如ク多数ノ學生ヲ擁シシカモ此等學生ガ自然科学科ノ如ク教室ニ分属セザルモノニアリテハ施設現予算ニ於テハ或ル程度以上至難ナリト雖今直ニ收容學生數ヲ減ズルコトハ事情ノ許サザルモノアルガ故ニ能フ限り最善ノ考慮ヲ須ヒントス。尚之等学部ノ入學者ノ收容ニハ試験ヲ課シテ無制限收容ヲ廃シ、學生ヲシテ試験ヲ經テ入学セリトノ自尊心ヲ有タシムルト共ニ卒業ノ學年ニアル學生ニ対スル採用ノ申込ノ早キモノハ之ヲ或ル期間保留シテ學生ヲシテ學習ノ完キヲ期セシムルコト。

二、風尚ヲ高メ礼節ヲ重ゼシム

學生ノ風尚ヲ高メシムルコトハ現時教育界ニ於ケル喫緊事ナリ、而シテ大學學生ガ最感激性ニ富ミ且動搖シ易キ青年期ニアルコトニ留意シテ一面ニ於テハ修養ヲ怠ラザラシムルト共ニ他面趣味ヲ養ハシムルコトヲ忽ニスベカラズ。

此ノ見地ヨリ実施スヘキ事項左ノ如シ。

(イ) 図書館ニ於テ教養及ビ趣味ノ涵養ニ資スベキ良書ヲ豊富ニ備ヘ殊ニ新館竣成ノ上ハ此ノ種ノ圖書ヲ借出

手続ニヨラズシテ容易ニ閲覧シ得ル様設備スルコト。
(ロ)予ネテヨリ実施セル日本文化講義(月曜講義)特別講演(金曜講演)等ノ一般講義ヲ更ニ充実スルコト

一般講義ハ学生ノ生活内容ヲ豊富ニシ環境ニ対スル理解力ト判断力トヲ養フヲ目的トセルガ故ニ、深ク専門ニ趨ラザル程度ニ於テ自然人文ノ諸現象ニ亘リ、講義ヲ学内外ノ教官ニ依嘱シテ放課後夜間等ヲ利用シ来レルトコロ実績頗ル見ル可キモノアリ。将来益々之ヲ充実活用セントス。

(ハ)本学学友会ノ諸機関ヲ活用スルコト

即チ講演部ニ於テハ弁論ノ外ニ名士ヲ招聘シテ講演ヲ聞キ、且ツ音楽部、美術部、学芸部等ヲ通ジテ趣味ノ向上ニ資スルコト。

(ニ)学友会及ビ各学部会等ニテ催ス諸種ノ会合ニ教官及学生主事ハ力メテ加ハルコトトシテ惡風ヲ未然ニ防止シ良風ヲ誘導ヲ計ルコト。

(ホ)教官及ビ学生主事ハ学ノ内外ヲ問ハズ、力メテ個々ノ学生ニ接スル機会ヲ作ルコト。

而シテ学生ガ個々ノ教室ニ分属セザル医学部ニアリテハ学生ヲ十名内外ノ組ニ分カチ、各組ニ指導教官ヲ配シテ毎週一回宛学生ニ接スル事トセリ、

又教室アル他ノ学部ニテハ教室員中一名ノ幹事ヲ定メテ個々ノ学生ニ接シムルモノアリ。

或ハ教官中ニハ面会日ヲ定メテ一々面接シ学生個人ノ相談對手トナリ師弟ノ情ヲ細カニシツツ他面風儀ヲ保チ礼節ヲ重ンズルノ風ヲ養ヒツツアリ。今後益々此ノ風ヲ拡大強化シ訓育ヲ徹底スルコト。

三、体育ヲ重ンシ尚武ノ氣象ヲ養フコト

従来ヨリ学生ト教授職員間ニ遠足会及ビ学部對抗試合等行ハレシガ今後益々之ヲ盛ナラシムルコト。

ラヂオ体操ハ益々之ヲ奨励シ、日々ノ行事トシテ寒暑ヲ問ハズ施行スルコト。

学生ニ対シテハ学友会ノ弓道部、馬術部、柔道部、剣道部等ヲ通ジテ尚武ノ氣風ヲ旺盛ナラシムルコト。教練トノ關係ヲ益々緊密ニシテ学生ノ規律アル動作ト心身ノ鍛鍊ニ資セシムルコト。

四、皇国人タルノ資質ヲ練成スルコト

愛國愛郷愛校ノ念ハ一貫セル基礎ノ上ニ立ツモノナルガ故ニ左ノ諸事項ヲ実施スルコト。

(イ)校旗校歌ヲ制定シテ愛校ノ念ヲ振作スルコト。

(ロ)史実ニ富メル近畿諸地ニ屢々臨地講演ヲ行ヒ我國固有ノ文化ニ親シミ愛郷ノ念ヲ喚起セシムルト共ニ古

人ヲ敬スルノ念ヲ振起セシム。

イ 本学ニハ明治維新庶政草創ノ際既ニ京都ニ大学ヲ設クベキ事ヲ唱導シタル吉田松陰其他維新ノ志士ヲ祀レル尊攘堂アリ年々尊攘堂ノ祭典ヲ行ヒ先賢ヲ追慕シ好學尚志ノ風ヲ養ヒ来レリ。今後ソノ祭祀ヲ益々森嚴ニ且ツ盛大ナラシメ以テ学生ヲシテ必ズ之ニ参列セシメ教養訓練ニ資セシメントス。又機会アル毎ニ大学トシテ職員学生ヲ市内護国神社其ノ他ノ神社ニ参拝セシメ殉難ノ士ヲ追慕シ敬神ノ念ヲ強カラシム。

ロ 心的的の勤勞ヲ實施シテ^(マツ)犧牲的精神ヲ鼓舞スルト共ニ兼テ心身ヲ練磨セシム。

ハ 諸種ノ式典又ハ会合ヲ利用シ講話訓話其ノ他ノ方法ニヨリ事変下ニ於ケル覚悟ヲ強固ナラシム。

ニ 四大節及ヒ国家的の記念ノ式ヲ益々嚴肅ニ行ヒ国家的意識ヲ強化スルコト。

ホ 五月二十二日教練御親閱ノ日ヲ記念シ、毎年同日青少年学徒ニ賜ハリタル 勅語ノ捧読式及ビ全學学生ノ分列式ヲ舉行スルコト。

五、実生活ヲ通ジテ嚴格ナル訓練ヲ行ハシムルコト

規律制裁アル切磋商団体ノ道場トシテ現在百二十人ヲ収

容シ得ル寄宿舎アリ。入舎ニ当リテハ義務ノ嚴格ナル実践ト廉恥心ノ涵養トヲ誓ハシメ、学生ハ日常生活ヲ通ジテヒタスラ校風ノ中心タラント努力シ居レリ。ソノ実績ニ徴シ之ガ拡張ノ必要ヲ認メ明年度予算中ニ増設經費ヲ計上シ、速ニ之ガ実現ヲ期シ居レリ。

一〇 本学内ニ帝国在郷軍人会分会設立ノ件〔抄〕 〔一五〕

一九三九(昭和十四)年二月七日

一、本学内ニ帝国在郷軍人会分会設立ノ件

(菊田)

総長ヨリ本學職員中ノ在郷軍人ヲ會員トセル在郷軍人会本學分会設立ノ發起セラレシ經過、事情ヲ述ベ且同分会ガ本學ヲ單位トシテ組織セラルルコト、本學名ヲ冠セル会名ヲ使用スルコト、設立ノ上ハ差支ナキ限り本學ノ施設利用ノ便宜ヲ希望セルコト等ノ事情ヲ考慮シテ評議會ニ諮リシ理由ヲ説明シタル後総長ノ意見トシテ本學ハ會員ノ心身練成ヲ援助スベキモ分会トシテ本學ノ機構又ハ教育方針等ニ関与スルガ如キハ嚴ニ禁ゼザルベカラザルヲ述ベテ協議ノ結果分会設置ニ異議ナキコトニ決ス

京都帝国大学分会設立申請書

団体名	設立年月日	正会員数	団体所属	役員ノ役種及官等級	団体事務所所在地	区域	事由
京都帝国大学分会	昭和 年 月 日	三六三名	左京区聯合分会	分会長 副 長 副 長 副 長	京都市左京区吉田町 京都帝国大学		
体育向上ニ努メシメ良兵良民主義ノ思想ヲ涵養シ軍人トシテノ陶冶ヲ致シ以テ帝国在郷軍人会令第一条ノ目的ヲ達成センコトヲ期センガ為京都帝国大学分会ヲ設立セントスルモノナリ	寄附金及会費ニヨリ行フ九個班	財産 其他 班 数	行事 予定	四月 総 会(出征軍人武運長久祈願)	四月 本学在籍ノ有資格者ニ限ル	〃 区域	事 由
				五月 行軍演習(海軍記念日)	本学職員ニシテ軍籍ニ在ル者其ノ数(将校五三、下士官七〇、兵二一、一補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				六月 武 術	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				七月 点呼予習	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				八月 点 呼	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				九月 武 術	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				十月 行 軍	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				十一月 總 会	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				十二月 入営者武運長久祈願祭	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
				一月 耐寒行軍	補一七一、二補三三、海軍將校五、下士一)參百六拾參名ノ多キニ達シ漸次増加ノ傾向ニアリ之等ノ在郷軍人ハ夫々各所属ノ分会ニ於テ軍事教育ヲ受ケ居ル事ト思料セラルルモ本学ニハ現役將校、国防研究会、在郷將校会等有之是等ト相協力シテ鞏固ナル精神的団結及軍事ノ研究演練並ニ		
					模範會員上申 聯会分会長表彰上申		

二月 武 術 壮丁者予備検診

三月 行軍演習(陸軍記念日)

其ノ他 四方拝、紀元節、天長節、明治節

(以下略)

一 諸行事表

一九三九(昭和十四)年二月一〇日 [七〇]

諸行事表 (昭和十四年十二月十日現在) 学生課

一、学外招魂祭並ニ諸式典

(一) 陸軍記念日当日招魂社ニ学生随時参拝

(二) 靖国神社臨時大祭(四月廿五日)代表学生七名招魂社参拝

(三) 護国神社還座並ニ合祀祭(五月一日)代表学生三十五名参拝

(四) 御親聞ニ参列(五月廿二日)代表学生七十名(東京宮城前広場)

(五) 第十六師団主催慰靈祭(九月二日)ニ代表学生十四名参拝

(六) 支那事変二週年記念式及分列式(七月七日)代表学生二百名参列

(七) 支那事変戦没者慰靈祭(十月廿四日)代表学生十四名参拝

二、皇軍慰問

(一) 皇軍慰問ハガキヲ本学関係者ヨリ一千六十枚發送

(二) 慰問品ヲ学友会ニ於テ戦地ニアル学生及職員ニ發送 (卅一個)

(三) 報功会ニ於テ慰問品蒐集

(四) 京大慰問文庫約五百冊ヲ蒐集發送

三、青少年学徒ニ賜ハリタル勅語捧読式及分列式舉行

五月三十一日農大グラウンドニ於テ

四、学生集団生活

イ 学内関係

(一) 農大グラウンド修理作業六日間延二百九名

(二) 全右補修工事作業三日間延一百五三名

(三) 庭球コート新設作業四日間延一百廿三名

(四) 芦生演習林道路工事作業七日間延十二名

(五) 白浜サンマーハウス武道水泳講習十日間十五名

(六) 敦賀夏期修練道場十日間三十名

ロ 学外関係

(一) 海軍々事夏期講習(舞鶴)四日間十八名

(二) 北支蒙疆及滿洲勤勞報国隊百三名

五、授業料関係

- (一) 出征軍人ノ子弟ニ対スル授業料免除昭和十二年九月ヨリ現在迄免除件数延二十九名
- (二) 一時納入困難ナル学生ニ対シ授業料分納規定制定昭和十三年四月ヨリ現在迄取扱件数延百五十三名

六、物資消費節約

- (一) 本省通牒ヲ要約シ学内一般揭示ト共ニ各学部長及学友会各部々長委員ニ通牒
- (二) 学友会共済部ニ於テ洋服、帽子ノ交換取扱
- (三) 学内揭示用紙ノ縮少

七、一般学生ノ体位向上施設

- (一) 学友会運動諸設備ノ一般化^(マ)
- (二) 総務会内ニ体育委員会施設(事業ハ学生課ト共同主催ニテ鞍馬、比叡、大原等ニ徒歩遠足)
- (三) 体力章検定会実施(十一月三日)受験人員六十二名合格者四十八名

八、講演及講義

- (一) 日本精神発揚週間特別講演及映画会(二月十日) 日本文化発展ノ三段階

映画五人ノ斥候兵

助教授 高山岩男

(二) 支那語講習会

第一、二学期連統三十五日間

教授 倉石武四郎
講師 傅芸子

(三) 臨地講演

史蹟名勝ヲ巡歴シ我国古代文化ニ対スル敬愛ノ念ヲ喚起セシムルト共ニ併セテ高雅ナル情操ノ涵養ニ努メシム、本年度実施箇所ハ(一)宇治、日野方面(二)奈良(三)万葉集巡リ(四)高尾及御室

(四) 日本文化講義(月曜講義)

歴史の現実 六日 教授 田邊元
万葉講座

(イ) 万葉佳調讃歎 三日

教授 澤瀉久孝

(ロ) 旅人憶良ト其周囲 一日

アララギ主幹 土屋文明

(ハ) 人磨ノ歌ニ就テ 一日

和高商校長 花田大五郎

(ニ) 英訳万葉集ニ就テ 一日

外務省囑託 小幡薫良

(ホ) 万葉集ノ文化史的位置 二日

(五) 比較音楽学ヨリ見たル日本音楽 東北大教授 阿部 二郎^(次)
 三日
 金曜講演 東北大講師 加藤 成之
 人類ノ遺伝 三日 教授 駒井 卓
 動植物ノ遺伝 三日

世界経済ノ動向 一日 全 木原 均

(六) 戦争ト犯罪 一日 助教 佐伯 千仞
 其他講演及座談会
 京都御所及二条離宮ニ就テ

宮内省囑託 猪熊 淺磨
 劍道ニ関スル講演居合術講習^(マセ) 教士 澤 友彦

(七) 外交問題ニ就イテ 外務省情報部次長 原田 健
 学友会関係主催講演及座談会
 新入生歓迎講演及映画会(学友会)

如何ニ学ブカ 教授 駒井 卓
 映画 路傍ノ石

思想ノ变化ニ伴フ労働政策ノ新傾向(講演部)
 大商大 河田 嗣郎
 長期建設ト経済統制(講演部) 小川 郷太郎
 世界ノ動乱ト日本ノ進路() 原 勝
 吉田 賢吉
 新明 正道

君臣一体縦ノ世界(学芸部)

名誉教授 西田 幾多郎

学生ト教養 ()

助教 木村 素衛

欧洲動乱ヲ語ル座談会()

教授 石川 興二

黒田 覺

柴田 敬

助教 田畑 茂二郎

日本的なるものについて()

東北大学教授 阿部 二郎^(次)

日本原始文化ノ構造 三森 定雄

九、雜件

報功会主催講演及旅行

欧洲大戰ト日本ノ地位

伊勢参宮旅行

海軍大將 末次 信正

学生ヨリ有志ヲ募集ス

学友会学芸部主催 御所及二条離宮拝観

京大報国隊ノ榎原神宮作業奉仕

一二 国民精神総動員実践機関設置ニ関スル件 [七〇]

一九四〇(昭和一九)年一月一九日

国民精神総動員実践機関設置ニ関スル件

年月日

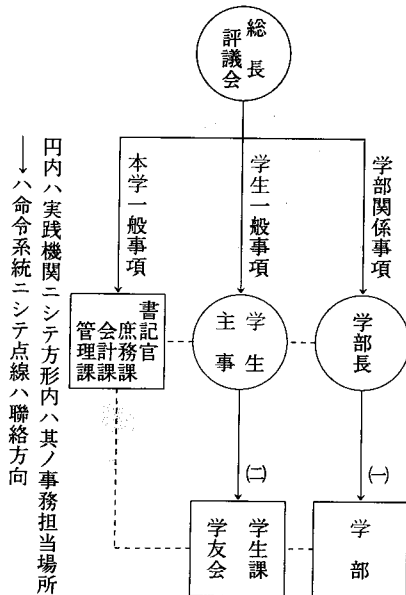
総長名

文部次官宛

標記ノ件ニ関シ客年十一月一日発社三三九号ヲ以テ御通牒ノ処本学ニ於テハ予テヨリ本学ノ諸機関及附属団体ヲ以テ之ヲ実施致居リ特別ナル機関ノ設置ハ将来必要ニヨリ考慮スルコトトシ目下ノトコロハ現在ノ方法ヲ益々強化致度キ所存ニ有之候従テ文部省実行委員会トノ聯絡ハ凡テ総長宛ニ願上候
尚現在ノ実践機構ハ左記ノ如ニ有之且特別ナル規定ハ無之ニ付御参考トシテ其ノ事務分掌ヲ掲置候
右及報告候也

一、国民精神総動員実践機構

記



本学戦歿職員学生卒業生慰靈祭執行
諸戦勝祝典執行

其他

(ロ)事業

学旗学歌制定

慰問金救恤金忠靈塔建設資金等募集事務

国民貯蓄組合事務

本学職員応召者後援会事務

支那事变公債貯蓄債券等購入事務

其他

(二)会計課分掌事項

(ハ)資源愛護

物資節約

廃品蒐集

電力瓦斯等節約

代用品使用奨励等

(ニ)海外払節約

外国雜誌全学共同購入事務等

(三)学生課及学友会分掌事項

(ホ)行事

青少年学徒ニ賜ハリタル勅語捧読式執行(全学生分列

式)

学外諸式祭典、学外ノ慰靈祭、護国神社祭典等ニ学
生代表引率参列

其他

(ヘ)時局認識徹底

諸時局關係講演会(本学及学友会)

京都帝国大学興亜会

支那語講習会開催

慰問並救恤

応召者子弟授業料分納又ハ免除事務

其他

(ト)資源愛護

制帽制服及諸学用品交換

其他

(チ)心身訓練

興亜勤勞報国隊学生隊派遣

諸種ノ精神的及身体的勤勞奉仕

諸種集団生活及集団訓練

諸種ノ座談会及参禪指導等

其他

(リ)体位向上

ラヂオ体操(毎日正午)

諸種運動(学友会)指導

庭球部 弓道部

端艇部

剣道部

柔道部 馬術部

野球部

水泳部

射撃部 陸上競技部

ラ式蹴球部

蹴球部

籠球部 ホッケー部

卓球部

排球部

遠足部 旅行部

スキー部

スケート部

全国高専大会事務(学友会)

体力検定会事務

其他

四)学内諸団体

帝国在郷軍人会京都帝国大学分会結成(昭和十四年十

二月二十三日発会式举行)

右ハ教官職員ニシテ在郷軍人タル者ヲ以テ組織ス

京都帝国大学将校会

学部ニアリテハ各実情ヲ異ニシ且事業又ハ行事ヲ行フコト

少キガ故ニ実施事項ヲ列記シ難シト雖或ハ授業ヲ通シ或ハ

教官ト学生トノ接触ニ於テ効果ヲ挙グル様不斷ノ努力ヲナ

セリ

一三 本学制度ニ関スル件(抄)

一九四〇(昭和一五)年一月二五日

一、本学制度ニ関スル件

予テ^(羽田亨)総長ヨリノ要求ニヨリ各学部教授会ノ意見ヲ取纏タ

ル結果ヲ学部評議員ヨリ別紙ノ如ク報告アリ

而シテ夫レ等諸意見ヲ

第一、研究ニ関スル部門

第二、教育ニ関スル部門

第三、訓育ニ関スル部門

第四、其ノ他ノ制度ニ関スル部門

ニ大別シテ検討スルコトトシ、其ノ為ニ第一ヨリ第三ノ

部門ハ本会内ニ各委員会ヲ置キ評議員其ノ委員ヲ分担シ

第四ノ部門ハ全評議員ノ共通問題トシテ之ニ当ルコトト

ス

前記三部門ノ委員ヲ各学部評議員ノ間ニ於テ定ムルコト

左ノ如シ

第一、研究ニ関スル部門ノ委員

法渡邊^(宗太郎) 関松本^(信二) 喜多^(兼逸) 文西田^(直郎)

堀堀場^(信吉) 三郎^(三郎) 並河^(初)

第二、教育ニ関スル部門ノ委員

法牧^(重二) 関前田^(重) 岡本^(長) 文落合^(太郎)

第三、訓育ニ関スル部門ノ委員
 (文)荒勝 綏八木 (農)近藤

(文)大田 (新)之助 (利)木 (文)天野
 (法)石田 (因)盛 (西)原 (農)村上
 (電)三郎 (吉)彦 (農)村上

而シテ右三委員会ハ定例評議會外ノ週ニ於テ之ヲ開キ、
 各回檢討ノ結果ヲ其ノ次ノ評議會ニ報告ノコトトス

本学制度ニ関スル件
 法学部
 一、評議會審議事項ニ関スル件
 一、大学院ノ制度ニ関スル件
 一、教授學術懇談会ニ関スル件
 一、月曜、金曜講演拡充ニ関スル件
 一、寄宿舎増設ニ関スル件

医学部

一、研究

大学院 現行制度ニテ可

綜合研究施設 中央研究所ト研究専門所員ノ設置

二、教育

修業年限 現行通ニテ可、在学年数ノ制限

科外講義 拡充

三、訓育

指導組織制度ノ強化

四、制度

評議會 審議議題ノ撰択(重要問題附議)

講座 専任補充

工学部

一、研究

全学ノ教授、助教授ノ接触ノ機会ヲ多クスル方法
 效果的ニ學術上ヂスカツションノ機会ヲ作ル方法
 研究設備及場所ヲ最有効ニ利用スル方法
 研究所、中央実験所充実擴張方法

一、教育

教官並ニ学生ニ綜合的知識ヲ注入スル方法トシテ一
 般的講演ノ擴張強化ノ方法

一、制度

大学院ノ制度ノ強化方策

評議員会ノ審議事項及方法ニ対スル檢討

一、訓育

教官ト学生ノ接触スル機会ヲ多クスル方法

理学部

理学部

理学部

理学部

理学部

1 研究ニ関シテ

- 一、自然科学綜合研究所ノ設立
- 二、教授、助教授間ノ懇談会
- 三、食堂ノ改善

2 教育ニ関シテ

- 一、一般講義ノ拡張
- 二、学部主催ノ他学部ノ特別講義
- 三、ユニバシチープレスヲ持ツコト

3 訓育ニ就テ

- 一、寄宿舎ノ拡張
- 二、軍事教練

4 制度ニ就テ

- 一、大学院ノ制度

經濟学部

一、研究ニ関スル事項

- 1、綜合學術館ノ創設
- 2、綜合學術研究会ノ開設
- 3、各学部ノ研究会又ハ報告会ノ綜合的利用
- 4、新着図書ノ綜合的報告
- 5、學報及大學新聞ノ研究的綜合的利用

二、教授ニ関スル事項

- 1、月曜講演、金曜講演ノ整理補充

- 2、日本文化講義ノ綜合的利用

- 3、特別講義ノ綜合的補充

- 4、授業担当制度ノ補充

- 5、学科目ノ綜合的編成

- 6、学生ノ他学部講義聴講制度ノ徹底

- 7、演習制度ノ設備充実

三、訓育ニ関スル事項

- 1、学生主事ノ学部分属制

- 2、図書館ニ於ケル教養図書ノ閲覧設備

- 3、教官ト学生トノ会合施設ノ補充(会合、会食)

- 4、思想善導費ノ利用

- 5、教官面接日ノ利用

- 6、全学の集団行動ノ拡充

四、制度ソノ他ニ関スル事項

- 1、大学院制度ノ綜合性(研究会、指導教授)

- 2、評議會ノ綜合的機能拡充

- 3、教官食堂ノ利用方法

- 4、全学教官会合機會ノ増加

- 5、大學新聞及學報ノ綜合的利用

農学部

教育

一、学年始メ、学期制、時間割、試験期日等ノ統一

研究

一、少壮研究者ノ養成

一、夫々専門ニ関スル基礎的研究ヲモ重視助成スルコト

一、海外学術研究ノ事情ヲ知悉スル機会ヲ増スコト

訓育

一、総長ト学生ノ接触ノ機会ヲ多クスルコト

一、学生課ノ機構ヲ再検討スルコト

一、寄宿舎ノ整備及其運用ノ改善

一、学級受持制度ノ活用

一、学生ノ訓育ニ関スル各学部間ノ連絡ヲハカルコト

制度

一、評議會並ニ諸委員会ノ機構検討

全般ニ渉ル希望条件

一、他学部教授トノ懇談ノ機会ヲ作ルコト

一、総長、書記官等ト各学部教官トノ懇談ノ機会ヲ作ル

コト

項 総合的実績ヲ挙グル為本学制度改善ニ関スル申出事

第一 研究ニ関スル部門

(一)建物其ノ他設備上ノ予算ヲ要スル事項

(1)〔経〕 総合学術館ノ設置

本学研究ノ成果ヲ具体的ニ示ス。但図書館新館内ニ

設クルモ可ナリ。

(2)〔医〕 中央研究所ノ設置

官制ニヨリ設置シ所員ヲ置ク。医学部ノミニテモ可。

他ノ自然科学ニ拡張スルモ可

(3)〔理〕 自然科学綜合研究所ノ設置

化学研究所ニ於ケル応用ノ化学ノ外ニ物理、生物、

工学等ニ於テモ必要ナラン。且大学院学生ノ研究、

優秀研究者ノ養成、各分科ノ中間ヲ行カントスル者、

目前ノ利用価値以外ノ諸学ノ研究等ニ資ス。

(4)〔文〕 特別研究生及綜合資料室ノ設置

関係密接ナル学部又ハ研究室間ノ綜合資料室。同種

又ハ近似資料ノ相互利用及ビ啓発

(5)〔工〕 研究所、中央実験所等ノ充実拡張

(二)研究会並ニ補助の会合

(6)〔経〕 綜合学術研究会ノ開催

運動週間ナドヲ含メタル時期ニ一学部ニテ又ハ諸学

部聯合ニテ開催

(7)「工」 学術上ノデイスカツションノ機会ヲ作ルコト

(8)「経」 研究会報告会等ヲ他学部ヘモ周知利用セシムル
コト

(9)「法」 教授懇談会ノ開催

外国出張等ノ際ニモ報告ヲ聞ク

「理」 教授助教ノ懇談会ノ開催

往時ノ水曜会ノ如ク若キ教官トモ意志ノ疏通ヲ計ル

「文」 各学部教授綜合談話会ノ開催

「工」 全学教授助教ノ接触ノ機会ヲ多クス

「理」 食堂ノ改善

他部門ノ教官トノ接触ノ機会ヲ多クス

(三)印刷物

(10)「経」 学報、大学新聞等ニ於テ研究会学会等ノ報告ヲ
ナスコト

「文」 全学講義題目ノ綜合印刷

出来得レバ教官面接日、学会予定日ヲモ加フルコト

(11)「経」 図書館ニ於テ新着図書ノ綜合的報告

(四)綜合的以外ノ諸方針

(12)「農」 基礎的研究ヲ重視助成スルコト

(13)「農」 少壮研究者ノ養成

待遇改善、大学院研究ノ經費及設備ヲ設クルコト

他学研究室トノ連絡ノ便ヲ開クコト

(14)「農」 在外研究員ノ復活

(15)「文」 各教授ニ一定ノ自由研究期間ヲ与フルコト

米國ニテ七年ニ一年ノ自由期間ヲ与フルカ如ク、何
年カニ一度研究ノ取纏メ、又ハ新研究開拓ノ工風等
ノ為ノ自由期間ヲ与フ

(16)「農」 海外学術研究ノ事情ヲ知悉スル機会ヲ増スコト

雜誌購入ニ不便ナルカ上ニ視察モ出来ズ。我国學術
ノ将来ヲ恐ル

(17)「工」 現在ノ設備場所等ニシテ利用ノ不十分ナル箇所ア
リトセバ其ノ利用方法ヲ講究スルコト

第二 教育ニ関スル部門

(一) 大学院 (イ) 綜合的教育ニ関スル事項

(18)「理」 他学部研究室トモ連絡ノ便ヲ開クコト

大学令第三条ノ綜合ノ実ヲ挙グルニハ予算ヲ請
求スルヲ要ス

「経」 各学部大学院学生相互間ノ研究会ヲ開クコト

他学部教官ニモ指導教官ヲ依頼スルコト

(二) 大学院 (ロ) 大学院制度又ハ運用ニ関スル事項

(19)「法」 入学資格寬嚴ノ検討

指導制度ヲ嚴ニスルコト

論文ヲ課スベキヤ否ヤ

在学年限ヲ設クベキヤ否ヤ

〔文〕 課程ヲ設ケ厳ニス

(三) 大学院 其ノ他ノ事項

(20) 〔農〕 経費及設備ヲ設クルコト

(21) 〔医〕〔工〕 大体現行ニテ可ナリ。但研究ノ余地ハアラ

ン

(四) 授業関係ノ事項

(22) 〔農〕 授業期間、学期、試験期日等ノ統一及ヒ時間割

ノ連絡

他学部聴講ノ便ヲ安定セシム

(23) 〔医〕 科外科目ノ聴講制度ヲ設クルコト

学生ノ将来ニモ有益ナラン

〔経〕 他学部聴講制度ノ徹底

学生間ニ尚徹底セザル憾アリ

〔総〕 他学部聴講制度ニ或ル標準ヲ設クルコト

(24) 〔経〕 他学部ノ為ノ特別講義設置

〔理〕 他学部ノ為ノ特別講義ヲ学部主催ニテ開ク

〔理〕 一般講義ノ拡張

學術分野ノ中間ヲ行カントスル者ニ資シ、場

合ニヨリ之ヲ卒業ノ資格トス

(25) 〔経〕 授業担当制度ノ拡充

(五) 印刷ニヨル事項

(26) 〔理〕 ユニバーシティープレス発行

一般講義、特別講義及ヒ水曜金曜講演等ノ内

容

(六) 学部内ノ事項

(27) 〔経〕 学科目ノ綜合的編成

(28) 〔経〕 授業担当制度ノ拡充

(29) 〔経〕 演習制度ノ設備充実

(30) 〔医〕 修業年現等現行ニテ可ナリ

第三 訓育ニ関スル部門

(一) 学生トノ接触

(31) 〔農〕 総長ト学生トノ接触ノ機会ヲ多クスルコト

(32) 〔工〕 教官学生ノ接触ノ機会ヲ多クスルコト

〔経〕 会合会食等ノ機会ヲ多クスルコト

思想善導費ヲ学部ニモ配当スルコト

〔医〕 訓育費ヲ医学部ノ指導制度ノ為ニモ考慮スルコ

ト

(33) 〔経〕 教官面接日ノ利用

(二) 指導又ハ学級担当制度

(34) 〔医〕 現行指導制度ノ拡充

(35)〔農〕 学級担当制度ノ活用

(36)〔総〕 法経文等諸学部ニ於テ学生ヲ組ニ分カチ訓育上

ノ担当制度ヲ設クル道ナキヤ

(三) 学生課機構及ビ学部間連絡

(37)〔農〕 学生主事補ノ学部分属

〔経〕 同

学生課長ハ本部ニアリテ統轄

(38)〔農〕 訓育ニ関シ学部間ノ連絡

学部間ニ寛厳ノ差アルハ不可、其ノ他連絡ノ

要アラン

(四) 講演

(39)〔工〕 一般講演ノ拡張強化

教官及ビ学生ノ為

(40)〔法〕 水曜金曜講演ノ拡充

自然科学ヲモ加ヘテ

〔経〕〔文〕 同 整理拡充

公開ト非公開ト分ツカ又ハ自然ト人文ト二分

ツカ等

〔経〕 日本文化講義ノ綜合的利用

(五) 集団行動

(41)〔経〕 全学的集団行動ノ拡充

神社参拝等、綜合訓育上効果アラン

〔理〕 教練ノ件

(六) 寄宿舎

(42)〔農〕 整備拡充

〔理〕 拡張

学風ハ団体生活ヨリ来ル

〔法〕 拡充

学修生活ト個人生活トヲ密接ナラシメ理想的

ナル学生生活ヲ建設セシム

(43)〔文〕 大寮ノ外ニ小寮モ考慮ノ要アラン

(七) 図書其ノ他

(44)〔理〕 ユニバーシティプレスノ発行(26参照)

(45)〔経〕 図書館ニ教養図書ノ設備

(八) 福利及運動施設

(46)〔文〕 健康相談所ノ拡充

(47)〔文〕 運動場ノ拡張及ビ有効ナル利用

第四 其ノ他ノ制度ニ関スル部門

(一) 評議會ノ審議事項及ビ其ノ整理

(48)〔法〕 予算決算ヲ審議事項ニ加フルコト

〔医〕 法学部提案ノ如ク現在以上ニ取上グベキ重要事

項アラン

〔工〕 審議事項ニ関シ講究ノ余地アラン

〔49〕経 消極的方面ニ於テハ現行審議事項中ニ総長ニ一

任スベキ事項アラン。其ノ為ニハ内規ヲ作ルモ

可ナリ

積極的方面ニ於テハ現行以上ニ取上グベキモノ

アラン

〔二〕評議會ノ機構及ビ審議方法

〔50〕工 審議方法ニ講究ノ余地アラン

〔51〕農 評議會ハ学部ヲ代表セルモノナルガ故ニ諸事成

ベク評議會ニテ審議スルコト

〔経〕 評議會外ノ委員会ニテ審議事項中評議會ノ審議

事項ニ移スベキモノアラン

〔三〕大学ト研究所

〔52〕工 研究所ヲ大学ノ機構中ニ加フルコト

〔四〕大学是

〔53〕文 委員会ヲ作り平素ヨリ大学是ヲ樹立シ置クコト

場合ニヨリ高等学校専門学校等トモ連絡ヲ取

ルコト

〔五〕講座

〔54〕医 定員減員等ノコトナキ様安定セシムルコト

〔六〕会合

〔55〕経 全学教官会合機會ノ増加

〔農〕 他学部教授トノ懇談ノ機會ヲ作ルコト

相互理解ノ為

〔経〕 教官食堂ノ利用方法

成ヘク全学教官ノ参加セラルル様拡張スルコ

ト(少モ一週一回位)和食ヲ加フルコト

〔農〕 総長書記官等ト教官トノ懇談ノ機會ヲ作ルコト

相互ノ理解及諸事円滑ナル進行ノ為

〔以下略〕

一四 本学制度ニ関スル件

一九四〇(昭和一五)年二月八日

〔7〕本学制度ニ関スル件

三委員会ノ報告左ノ如シ

〔イ〕第一委員会ニアリテハ一月三十一日建物並ニ予算ヲ件

フ事項ヲ検討ノ結果、綜合的研究機構ヲ完成スヘキ段

階的方法トシテ日本文化研究所、理学研究所、及ビ生

物学研究所ノ三案ヲ得タル旨喜多委員長ヨリ別紙ノ通

報告アリ。其ノ内日本文化研究所所案ニ対シテハ、総長ヨ

リ現在ノ人文科学研究所ノ研究ハ東亞ニ関スル事項ノ

ミニ限定サルヘキニアラズ将来日本文化ノ研究ヲモ包含シ得ベキ建前ニアリトノ説明アリ

(ロ)第二委員会ニアリテハ二月一日大学院ニ関スル事項ノ検討ヲ了リ其ノ結果ヲ前田委員長ヨリ別紙ノ通報告アリ

(イ)第三委員会ニアリテハ二月一日審議ヲ終了シ其ノ結果

ヲ石田委員長ヨリ別紙ノ通報告アリ

依テ第一及ヒ第二委員会ニテ更ニ検討ヲ続行ノ上次回評議会ニ報告ノコトトス

昭和十五年一月三十一日

第一委員会議事録(研究ニ関スル申出事項ノ検討)

出席者

(一)喜多

(信二)松本

(宗太郎)法渡邊

(重二郎)岡西田

(信三)堀場

(三郎)細沙見

(三郎)磯並河

各学部申出事項中(二)ノ研究会並ニ補助の会合等ハ実現ノ比較的可能ナル事項多シト雖(一)ノ建物其ノ他設備上ノ予算ヲ伴フ事項ハ其ノ実現ニ準備ヲ要シ且最重要ナル事項ナルガ故ニ先ツ(一)ノ問題ヨリ検討ニ着手ス

(1)ヨリ(5)ニ至ル五ツノ申出事項ニ対スル意見左ノ如シ

一、人文、自然両学科ヲ含ム綜合研究所ノ実現ハ困難ナ

ルモ人文学科ニ関スルモノト自然科学学科ニ関スルモノトノ二大綜合研究所ノ計画ハ如何。

一、然ラバ既設研究所及ビ実験所等ノ拡張ニヨリテ其ノ目的ヲ達スベキカ、又ハ新綜合研究所ヲ新設スベキカノ問題ニ遭遇スルモ、自然科学ノ方面ニ於テハ現在ノ化学研究所モ中央実験所モ共ニ弱体ナルガ故ニ、夫レ等ヲ合一スルモ形ノミ膨脹シテ愈々弱体トナル虞アリ。

一、医学方面ニ於テハ臨床ト基礎両医学ノ連絡綜合ノ為ニ中央研究所ノ要アリ。農学方面ニアリテハ綜合農学研究所ノ如キモノノ必要アリ。又人文学科ニアリテモ現在ノ人文科学研究所ハ其ノ目的ヲ東亜ニ関スル人文科学ノ綜合研究ニ限ラレ居ルガ故ニ別ニ広ク人文諸科学ノ綜合研究ヲナス研究所設置ノ必要アリ。サレド人文關係ノ諸学科及医、工ノ両学科ニテハ兎

二角或ル程度ノ綜合的研究所ナルモノヲ有セルモ、理、農ノ両学科ハ之ヲ有セズ。且現在ノ物理学ノ如キハ在来ノ講座ヲ以テシテハ最早研究ヲ進メ得ザル状態ニアリ。此ノ方面ニ於テ考ヘ得ベキハ物理学数学ヲ中心トスル理学研究所トモ称スベキモノ及ビ理学医学農学ニ關係ヲ有スル生物学研究所ヲ設立スル

必要アリ。

一、斯ノ如キ研究所ニ於テ大学院学生ヲモ研究セシムル

コトトセバ少壮学徒ノ養成ニモ効果大ナルベシ。

一、若シ生物学研究所ガ実現スルトセバ綜合農学研究ノ

如キハ或ル程度農学部内ノ連絡ニヨリテ実現シ得ベ

キガ故ニ綜合農学研究所ノ考ハ撤回シテ可ナリ。

一、医学中央研究所ノ考モ医学部内ノ綜合研究所ナルガ

故ニ此ノ場合撤回シテ可ナリ。

一、人文学科ニアリテハ既設ノ此ノ種研究所ガ支那ニ関

スル研究ヲ主トセルニ対シ、日本ニ関スル研究ヲ主

トスル日本文化研究所トモ称スベキ綜合研究所ガ必

要ナリ。而シテ自然科学ノ参加モ必要ナルベシ。

一、経済学部提案ノ綜合學術館ハ寧ロ本学ノ綜合博物館

ニシテ図書館研究所等ノ完成ト共ニ実現シ得ルモノ

ト考ラル。

以上ノ如ク検討ノ結果一応左ノ如ク考ヲ纏メタリ。

(一) 人文自然兩学科ノ一大綜合研究所ハ実現至難ナルニヨ

リ先ヅ左ノ三綜合研究所ヲ置クコト

(イ) 物理学ヲ基礎トスル理学研究所

(ロ) 生物学研究所

(ハ) 日本文化研究所

(二) 夫レ等ノ諸研究所ノ構成ニ就テハ大学院学生ノ研究ヲ
モ考慮ニ入レルコト

(三) 将来夫レ等諸研究所ヲ纏メタル一大綜合研究所組織ニ
進ムコト

以上

昭和十五年二月一日

第二委員会議事録(教育ニ関スル申出事項ノ検討)

出席者

(関)前田

(法)牧

(岡)本

(文)落合

(文)荒勝

(八)木

(農)近藤

大学院ニ関スル申出事項ヲ検討スルニ先タチ各学部ニ於ケ

ル大学院学生ノ取扱其ノ他ノ状況ニ関シ各委員ノ陳述ヲ綜

合スルニ、入学資格ニ付テハ本学以外ノ帝国大学官立大学

出身者ニ対シテハ学力検定ノ上入学ヲ許可シ私立大学立身

者ニ対シテハ許可セズ。指導教官ハ二人以上ノ場合モアリ

テ中ニハ他学部教官ニ個人的ニ指導ヲ請ヒ又ハ進ンテ指導

教官ヲ依頼スル等ノ方法ニヨリ或ル程度綜合研究指導ノ行

ハレ居ルヲ見ル。業績ニ付テハ機関雑誌又ハ学会等ニテ発

表ノ方法ヲ取レルモアリ。研究料免除ニ付テハ成績ヲ標準

トセルモノ然ラザルモノ等学部ニヨリテ区々ナリ。研究事

項ノ選択、指導及ヒ研究ノ状況ニ至リテモ自ラ一様ナラス。大略右ノ如キ実状ヲ考慮シ且大学院ノ目的ハ学者ヲ養成シ研究ノ実ヲ挙ゲシムルニアリトノ見地ヨリ大学院ノ改善方法ヲ審議セシ結果左ノ如シ

(一) 研究ノ実績ヲ挙グル為ニハ

(イ) 学力優レ研究ノ実ヲ挙ゲ得ベキ者ヲ銓衡シテ入学セシムルコト

(ロ) 研究ノ実ナキ者ヲ排スル為ニ在年限ヲ制限スルコト

ハ困難ナルニヨリ通則第五十二条ヲ活用スルコト

備考 通則第五十二条 大学院学生ニシテ研究ノ

実ナシト認ムヘキ者ハ評議會ノ議ヲ経テ總

長之ヲ除籍ス

(ハ) 給費制度 少壮学徒養成ノ為優秀ナル学生ニ対シ特

選給費制度ヲ拡充スルカ又ハ他ノ給費制ヲ設ケテ專

心研究ニ従事セシムルコト

(ニ) 研究費 現在ノ如ク教室支弁又ハ個人負担等ニヨラ

ズ研究費ヲ設クルコト

(ホ) 設備 現在ニテハ研究ノ場所及設備ヲ有セズ然ルニ

現在ノ教室ハ皆飽和状態ニアルガ故ニ特ニ大学院ノ

為ニ設備及場所ヲ設クルコト

次ニ綜合研究ノ実績ヲ挙グル方法ニ関シ審議セシトコロ左

ノ如シ

(二) 綜合的研究ノ実績ヲ挙グルニハ指導教官ノ数ヲ増シ又

ハ之ヲ他学部教官ニモ依頼スルノミナラズ進ンデ通則

第五十条ヲ活用スルコト

備考 通則第五十条 大学院学生ハ各学部教官又ハ

講師ノ承認ヲ経テ其ノ講義又ハ実験ニ出席ス

ルコトヲ得

尚ホ意見トシテ、大学院ハ大学直屬ナルニ拘ラズ学

部ニ屬セルガ如キ実状ニアルガ故ニ其ノ綜合ノ実ヲ

強化セントセバ大学直屬ノ一機關ヲ設ケ主長及ヒ事

務担当者ヲ置キテ之ヲ統轄シ改善施策ニ当ラシムル

モ一方法ナルベシトノ主張モアリタリ

而シテ右ノ内經費設備等ヲ要スル事項ニ付テハ本部ニ於テ講究セラレンコトヲ望ム

昭和十五年二月一日

第三委員會議事録(訓育ニ關スル事項ノ檢討)

出席者

(法) 石田

(文) 新之助

(因) 盛

(電) 三郎

(利) 大

(西) 原

(代) 見

(天) 野

(村) 上

(代) 見

訓育ノ改善ニ關シ各学部申出事項ヲ檢討ノ結果左ノ如ク意

見ヲ纏メタリ

(一) 訓育費ノ一部配当

学生ノ研究会ノ為又ハ学級担当制度ヲ実施セル医学部等ニ於テハ訓育費ガ必要ナルベキニ付其ノ使途ヲ限定シテ一部ヲ各学部ニモ配当スルコト

(二) 教官ト学生トノ接触

各教官ハ成ルベク面会日ヲ定メテ之ヲ公示スルコト

(三) 学級担当制度

医学部ノ学級担当制度ノ如キモノハ学生少キ文学部ニアリテハ其ノ要ナカランモ法経両学部ニアリテハ学生数多ク必要ナラン。但各教官ノ受持学生モ自然多数トナルガ故ニ教授会ニ計リテ其ノ具体化ヲ企図シタシ

(四) 学生課機構

学生主事補ノ学部配属ハ之ヲ制度化セバ命令ニ系統トナル恐アリ。但現在ノ機構ニ於テ学部関係ノ事務ヲ分担セシムルモ一方法ナリトノ意見モアリ。尚ホ考究ノコトトス

(五) 講演

月曜講演金曜講演ヲ拡張シ一ヲ人文学科他ヲ自然科学科トスルコト

而シテ現在夫レ等諸講演ハ人文学科ヲ主トシ経費モ日

本文化講義ノ経費ヨリ支弁セラレ、之ヲ自然科学科ノ講演ニ充ツルコトハ困難ナルガ故ニ、自然科学科ノ講演ニ対スル経費ハ本部ニ於テ考慮セラレタシ

尚ホ一般的知識又ハ常識ヲ養フヲ目的トシ、一回二回ノ短時間ノ講演ノ外ニ相当期間継続スル講座組織ノモノヲモ設クルコト

講師ハ老大家名誉教授等ヲモ聘シ、時間ハ夜間トシ公開トスルコト

(六) 集団行動(綜合大学意識強調ノ一助トナスタメ)

如何ナル形ニ於テ実施スベキカハ尚ホ研究ノコト

(七) 寄宿舎

其ノ拡張ハ最重要ニシテ、殊ニ学生ガ出身高等学校別ニ傾ク傾向アルヲ排シ寄宿舎ニヨリテ一単位トシテノ意識ノ下ニ訓育スルノ要アルベシ。出来得レバ最初ノ一学年ヲ全部入舎セシムルコトトセバ尚ホ可ナリ。但多額ノ経費ヲ要スル問題ナルガ故ニ総長ノ善処ヲ望ム

(八) ユニバーシティープレス

大学ガ発行スルヨリモ書店ニ発行セシムル方得策ナルベシ。従ツテ其ノ実行ハ困難ナルベシ

(九) 教養図書

図書館内ニ其ノ施設ノ拡充ヲ望ム

(十)福祉施設拡充

健康相談所ニ病室ヲ置キ寢床数個ヲ設ケテ簡單ニ入室
シ得ル様ニスルコト。医師モ現在ノ如ク兼任者ノミニ
テハ不便故ニ三名ノ専任医師ヲ置クコト

(十一)運動施設

手近ナル場所ニ少時間単独ニテモナシ得ルローラース
ケート場ノ如キヲ設クルコト

(十二)教練ニ関シテハ尚ホ考究スルコト

(終了)

一五 第一回学友会改組準備委員会

一九四〇(昭和一九)年二月四日

〔七二〕

第一回学友会改組準備委員会

出席者

昭和十五年十一月四日午后三時於本部階上会議室
羽田会長、宮本(法)教授、笹川(医)教授、天野(文)

教授、澤井(工)教授、並川(農)教授、福原(會計課)

長、長崎学生課長、日高学生主事、光田(作)学生主事

事務嘱託、山本(後)学生主事、妹尾(義)主事補、井上(義)主事

補

学生 柴田(敏夫)、河野(陽二)、志戸本(慶太郎)、井上(正吉)、岸畑(龍太郎)、渡部(敬)、日高、

(元)津村

以上計二十一名

會長 学生課ヨリ説明セヨ

長崎 大学トシテハ本省ヨリノ意向ヲ、高校主事會議ヤ十

月廿八日ノ総長會議ヲ通ジテキイテキル

学友会トシテハ九月中旬代議員総務委員等意見ノ交

換ヲ行フ

九月下旬総務、代議員庶務會計委員

有志者集ル

十月代議員ハ総務理事ト懇談會ヲ行ヒ、十七名ノ提

案者ヲ得ル

十月十日他ノ代議員ヲ集メ建議案ニツキ説明シ協力

ヲ求メ、并二十五名ノ賛成者ヲ得

十月十一日昼幹事會ヲ開キ夜臨時役員會ヲ開イタ

ソレニヨツテ学友會ノ改組ノ必要ナルコトトソノ具

体案ニツキテハ會長ニ一任スルコトヲ決議ス

十月下旬會長カラノ御話デ総務理事ガ学生カラノ意

見ヲ聴取シテ、作製シタノガ御渡シタ案デアル

十月廿四日評議會ノ席デコノ案ニツキテ説明

十月廿八日総長會議デ總長カラ提示セラレタ

日高

(案ノ内容ニツキ詳細説明アリ)

天野 中央委員ヲ五名トセル理由如何、学部トノ関係ハイカ

日高 総務会ガ五名デ從來事足りタ、從來ノ総務委員ハ学部ヨリ選出シタガ今度ハ各部ノ委員中ヨリ選出シタイ

笹川 会費收入ハ現在トドウイフ関係ニナルカ

日高 本年一六七〇〇円 来年一四三〇〇円 二四〇〇円

減収 再来年二一四〇〇円 三年目二八六〇〇円

ソノ他一〇〇〇〇円近ク学校ヨリ補助アリ

笹川 ソノ様ニ增收ガアレバ会ガ樂觀出来ヨウ、部ノ廃合

ハ考ヘナクテモヨクナリハセヌカ

日高 物価ノ高騰ガアツタリ、又配当部費ハ極端ニ窮乏デアルカラ□□デキヌ

アルカラ□□デキヌ

笹川 会費ノ増徴トイフコトニナルト根本ノ問題ニフレル

コトガ出来ル

学生会ヲ補助機関デナシニ教育ノ延長ト考ヘタラドウカ

会長 補助機関トシテデヨイデハナイカ、第四項ニ学生ハ

全部ドコカノ部ニ属セシムトイフコトニナツデキル、

体育ノ一助ニシタイ、凡テヲ体育ニ参加セシメ責任

ヲオフコトニナルト大変ナコトニナル、学生ガス、

ンデ利用ニスル様ニシタイ、文部省デモ、大学ト高校トハ同一ニハ行カヌ、大学ハ学問ヲ中心ニスベキデ、高校ノ人物健康ノ練成機関トハ異ル、ガソレニ近イモノヲ作レ、ドウセヨトハイハヌ、トノ意向デアル

笹川 今迄ノモノデナク学生ノ練成ヲ学校ノ手デヤルベキ

デ

会長 ヒドク変ヘル氣持ハナイ、指導シテ行ク立場ニ立ツ

トイフ位ノ考ヘ

笹川 少シハ参加者ガ増スガラウガ、学生ハ必ズ一ツヤル

様ニシタイ

会長 施設ノ完備ガ非常ニ困難ニナル、五千ノ学生ニハ全

部行ハシメルト学問ニ支障ナシトシナイ、大学生ニ

対シテモ強制シナクテハナラヌカドウカ、人格ノ陶

治ノ方向ニ向フ方ガヨイト思フ

天野 大学ト中学高校トデハ練成ノ指導ノ仕方ニツキ差異

ガアルト思フ、大学ハ学問ガ第一デ体育ハ第二義的

デアルト思フ、文部省ノ意向モソノ様デアル

笹川 「使命達成ノタメ」トスル方ガドノ様ニデモ解釈出来

ヨウ

並河 運動施設ノ費用ヲ本省デ出サナイ、外国ノ施設ヲモ

見テ来テナイ、体育ガ必要デアルトスルト本省ニモ責任ガアルガ、大学教授ニモ責任ガアル

学友会ハ体育ノミテナク文化的ノ部門モアル、改革ハ伝統ヲ生カシ惡イトコロヲ除クノデヨイノテナイカ、今迄ノヤリ方デヨイト思フシ補助機関デモヨイデハナイカ

澤井 補助機関ヲ進メテ「使命達成ノ一機関」トシタラモツトヨイ、学友会ノ名ガウルケレバ改メテモヨイト思フ

天野 名前ハ学友会デヨイデハナイカ、伝統モアルシ
会長 本省デモ名前モ問題ニナツタガ大体ノ意ノアルトロガアレバ自分ハ学友会デヨイト思フ

宮本 地位カラ云ヘバ補助機関デアロウ、大学自体デハナイ

会長 補助機関トイフ文字ヲ「一助トシテ」トシタラト今思ツテキル、方針ニツイテモツト強張^(マヤ)スベキ点ヲオキ、シタイ

笹川 学生ヲ選手制度ニ関与スル様ニシタラヨイ
会長 選手制度ヲ存置シ希望スル施設ヲ利用出来ル様ニシタイ、経費ノ許スカギリ

笹川 希望ニマカセルノデナク毎月健康相談ヲ受ケ、ソレ

ニヨリ体育ニ関心ヲモタセル、ヤレトス、メルノデナクテハイケナイト思フ

会長 中学高校デヤツテ来タ学生デアルカラヨイト思フ

笹川 大学デスルンデハ困ル

会長 体育バカリテナク、思想方面デモアマリ取締リノ方向テナク進ミタイ

日高 ソノ實際方面ニツイテハ笹川先生ノ御考ヲ借りニ上リタイ

並河 今ノ設備デハ困難ダ、地面ガナイ、文部省デモ考ヘネバナラヌ

会長 本省デドコマデソウ考ヘテキルカ分ラナイ
天野 強制徴集トスルト払ハナイ時ニハドウスルカ

日高 学部長又ハ主事が説イテヨク話シ、ソレデモ分ラヌ時ハ処罰スルモヨイト思フガ、成可クソウシタクナイ

並河 処罰マデ進マヌ様ニシタイ
長崎 今年ハ八割入会シタ、ソレハ学生ガヤツタ、先生ノ方デコウスレバモツト増スト思フ

天野 推挙ハ二倍デヨイカ

澤井 会費ヲ徴集セスニ出来ヌカ、文部省ヘカケアツテ出来ヌカ

会長

将来ドウナルカ分ラヌガ現状デハ見込ナイ訓育費ノ如キモノデモ増額ヲ主張シテモ当局モツトメルトイフガ今日ハソウ行カナイトイフ方針ハ変ラヌガ今重点ガ他ニアルノデ各大学ノ訓育費モ増セヌトイフ、学友会ノ方モ希望トシテハ同感デアルガ今ハ実現困難ト思フ

総長会議デハ学友会ハ問題ニナラナカッタガ本学ガ一番進デキタ、改組ノ事ハ同感デアッタ、指導的ノ方針ノ下ニ進デホシイトノコトデアッタ

日高

会費ノコトデアルガ、東大トハ条件ガチガフ、東大ハ野球デ三万円バカリ入ル

志戸本

廃止スル部ガ倶楽部ニ入レテモ名前ヲ従来通り用ヒタイトイフモノモアラウガ

日高

ソレハ後デ考ヘル

日高

委員ノ任命制、学生ノ推挙方法イカン
選挙ト同様ノ方針、党派のノ争ノ生ズルオソレアル時ハソレヲ正ス、得票数デキメナイデ会長カラ任命、各部ノ委員ハ選挙デハイケヌ、部長ガ指名スルノガヨカラウ、協議参議中央ノ委員ハ学生ノ信望アル者ヲ推薦、任命サレル様ニシタイ、細イ点ハ後デ相談シタイ

柴田

連絡委員会ハ学友会内部ノモノカラカ外ノモノヲ入レルカ

日高

今ノ所ハ混合ノツモリ

柴田

外郎団体ト学友会トノ関聯イカン、中央部ト聯絡スルカ監査会トカ協議会トカ

日高

直接ニハ中央部、間接ニハ学生課ガ指導監督スル、人間デ中央部ト学生課ト関聯サス

柴田

人的構成ノ数字ハカヘラレルカ、今ハ総務理事四名デアルガソレガ中央部ニ入ルトスルト他二名ハドコカラ入レルカ

日高

学生課カラ直接関係アル者ヲ一名他ハ教官側デ助ケル者ガアレバ入ツテイタク、又ハ共済部関係ノ者デ学生課員ヲ入レルユトリヲオイタ

柴田

総部自体ノ組織イカン

日高

アマリ形式的ニナリスギルカラ必要ノ時ハ相談ヲスル様ニスル

笹川

機関ガ多スギル
体育委員会ハスポーツノ普及トイフコトデアッタガ実績ハドウカ

宮本

アマリ上ツテナイ、当時ハ対立的ノ意識ガアッタノデソノ辺ニ意義ガアッタワケ、体力章検定、運動会、

等熱心ニヤツタガアマリ成績ハ上ラナイ

宮本 一般ガツイテコナカツタノデスネ、遊び半分ニヤツ
タラドウカ

笹川 体質ニモヨルガ指導ノ仕方ガムツカシイ

宮本 スポーツノ大衆化ハ健康ノ保持ニ役立タヌノカ

笹川 上手ニヤツタラヨイ、進メラル根拠ハアル

日高 体育ノ専門家が要ルト思フ、唯普及スル事ハムツカ

シイ、指導者ガナイ、主事會議デモ問題ニナツタガ

ソノマ、デアル

宮本 衛生設備ガ不足ノ様ダ

長崎 体育委員会ガ出来テ一般ノ学生ガ体育ノ事ヲ考ヘル

様ニナツタ、笹川先生ニ指導ニ当ツテ頂クトウマク

行クト思フ

会長 根本的ニ異論ナケレバ今日ハ此程度デ閉会スル

制定委員ヲ出サネバナラヌガソレハ私ノ方デ考ヘテ

タノムコトトスルカラ承認サレタイ

一六 通則改正案訂正ニ関スル件 〔二五〕

一九四一(昭和一六)年三月一六日

一、通則改正案訂正ニ関スル件

右ニ関シ総長ヨリ去ル一月二十三日評議會ニ於テ可決セ

ラレシ通則第十二条中「学友会」ノ名称ハ長キ歴史ヲ有

シ今回ノ同会改組ニ当リテモ之ヲ變更スルノ意ハナカリ

シモ文部省ニ於テ諸学校校友会及ヒ他ノ帝国大学学友会

等ガ会名ヲ變更セル際單ニ懇親ヲ目的トセルガ如クニ見

ユル名称ハ避ケラレタシトノ希望アリ依テ学生課ヨリ諸

方面ノ意見ヲ聞キシ結果「同学会」ノ名ヲ選ビシトコロ

文部省モ之ニ同意セシコト、及ビ文部省トノ交渉ノ為ニ

本学ニ於テ広く協議スルノ機会ナカリシ事情ヲ述ベテ審

議ノ結果可決

一七 同学会規則

一九四一(昭和一六)年四月一日 〔八〕

京都帝国大学同学会規則

第一 名 称

第一条 本会ハ京都帝国大学同学会ト称ス

第二 目 的

第二条 本会ハ大学ノ使命達成ノ補助機關トシテ會員ノ心

身ノ修練相互ノ親睦並ニ生活ノ便益ヲ図リ以テ国家的協

同精神ヲ涵養スルヲ目的トス

第三 会 員

第三条 会員ヲ分テ左ノ五種トス

正 会 員

名 譽 会 員

特 別 会 員

会 友

準 会 員

第四条 正会員ハ京都帝国大学通則第十二条ノ規定ニ依リ

会員タル京都帝国大学ノ学生及選科生トス

第五条 名譽会員ハ本会ニ功勞アル者ノ中ヨリ会長之ヲ推

薦ス

第六条 特別会員ハ京都帝国大学総長、教授、助教授、書

記官、学生主事、学生主事補、事務官、司書官、薬局長、

技師及講師トス

第七条 会友ハ京都帝国大学ノ卒業生ニシテ入会ヲ申出タ

ル者トス

第八条 準会員ハ京都帝国大学助手、副手、書記、専修科

生及委託生等ニシテ本会ニ加入ヲ申出タル者トス

第四 事 業

第九条 本会ハ第二条ノ目的ヲ達スル為左ノ総部及部ヲ設

ケ事業ヲ行フ

一、修文総部

文化部、音楽部、美術部、映画部、新聞部

二、鍛鍊総部

柔道部、剣道部、弓道部、水泳部、端艇部、陸上

競技部、野球部、庭球部、籠球部、ラ式蹴球部、

ア式蹴球部、旅行部

三、国防訓練総部

射撃部、馬術部、航空部

四、生活総部

共済部、保健部

第十条 本会ハ前条ニ掲クル事業ノ外臨時又ハ繼續シテ第

二条ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業ヲ行フ

第十一条 本会ハ事業ノ延長トシテ学内ニ於ケル他ノ事業

団体ニ対シ一定ノ補助金又ハ臨時奨励金ヲ交附スルコト

ヲ得

第十二条 事業ニ関スル細則ヲ定ムル要アルトキハ前二条

ノ場合ニハ別ニ之ヲ定メ部ニ関スルモノハ各部之ヲ定ム

但シ部ノ細則ニ付テハ会長ノ認可ヲ経ルコトヲ要ス

第十三条 正会員ハ第九条ニ掲クル一以上ノ部ニ加入スル

コトヲ要ス

第五 統理及一般事務ノ組織

第十四条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会 長 一 名

顧問 七 名

第十五条 会長ハ京都帝国大学総長之ニ当ル

会長ハ本会ヲ統理ス

顧問ハ京都帝国大学各学部長トス

顧問ハ会長ノ諮詢ニ応ス

第十六条 本会ニ一般会務ノ処理機関トシテ中央部ヲ置ク

中央部ハ会長ニ隸シ本会ノ企画統制及指導ノ中枢機関ト

シテ年度並ニ臨時事業ノ方針ヲ定メ予算案ヲ編成シ並ニ

事業全般ノ運営及經理ニ付必要ナル指揮監督ヲ為シ又部

ニ属セサル事業ヲ行フ

第十七条 中央部ニ左ノ役員ヲ置ク

理 事 長 一 名

理 事 五 名

中央委員 五 名

第十八条 理事長及理事ハ特別会員中ヨリ会長之ヲ委嘱又

ハ指名ス但シ協議員ト相兼ヌルコトヲ得ス

理事長及理事ノ任期ハ三年トス

中央委員ハ第四十四条ノ規定ニ依リ推挙セラレタル中央

委員候補者中ヨリ会長之ヲ命ス但シ協議委員又ハ部常務

委員ト相兼ヌルコトヲ得ス

中央委員ノ任期ハ一年トス

中央部ニ囑託若干名ヲ置クコトヲ得

前項ノ囑託ハ京都帝国大学職員又ハ正会員中ヨリ理事長

之ヲ委嘱シ又ハ命ス

第十九条 理事長ハ中央部ノ事務ヲ統括ス

理事ハ理事長ヲ輔ケ部務ヲ掌理ス

中央委員ハ理事長ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ掌ル

囑託ハ理事長ノ指揮ヲ受ケ部務ニ従事ス

第二十条 本会ノ事業ヲ執行スル為第九条ニ掲クル各総部

及部ニ左ノ役員ヲ置ク

一、総部

総 部 長 一 名

総部顧問 一 名

総部顧問ハ国防訓練総部ニ限り之ヲ置ク

二、部

部 長 一 名

部 委 員 五 名以内

部委員ハ内二名ヲ常務トシ其ノ一名ヲ庶務委員他ノ一

名ヲ会計委員トス

第二十一条 総部長ハ当該総部所屬部長中ヨリ会長之ヲ指

名シ任期ヲ二年トス

総部顧問ハ京都帝国大学ノ配属将校中ヨリ会長之ヲ委嘱シ任期ヲ二年トス

部長ハ京都帝国大学教授又ハ助教授中ヨリ会長之ヲ委嘱ス但シ事宜ニ依リ学生主事ヲ之ニ指名スルコトヲ得部長ノ任期ハ三年トス

部委員ハ正会員中ヨリ部長之ヲ指名シ任期ヲ一年トス部ニハ事宜ニ依リ部理事ヲ置クコトヲ得

部理事ハ当該部長ノ推薦ニ依リ特別会員中ヨリ会長之ヲ委嘱又ハ指名シ任期ヲ三年トス

第二十二條 総部長ハ中央部ニ隸シ所屬各部ノ指導監督並ニ各部門ノ連絡調整ニ任ス

総部顧問ハ総部長ノ諮問ニ応ス

部長ハ部ノ指導監督ニ任ス

部委員ハ部長ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ掌ル

部理事ハ部長ヲ輔ケ部務ニ參画ス

第二十三條 部常務委員ハ部務ヲ処理スル外常時各部ト中央部並ニ各部門ノ理解融和協力ニ留意シ且其ノ全体ノ連絡ヲ全スル為率ネ毎月一回会合シ意見ノ交換ヲ為ス

中央部ハ前項ノ会合ヲ主宰ス

第二十四條 本会ト学内各学部会(有信会、芝蘭会、甲寅会、

文学部学友会、同明会、同好会、四明会)トノ連絡ノ衝ニ当ラシムル為中央部ニ連絡委員ヲ附置ス

連絡委員ハ各学部会長ノ推薦ニ依リ当該学部所屬ノ正会員中ヨリ若干名宛会長之ヲ命ス

連絡委員ハ本会ト学内各学部会トノ事業上ノ連絡ニ留意シ必要ナル斡旋ヲ為ス

第六 協議 会

第二十五條 本会ニ中央部ニ対スル協力機關トシテ協議会ヲ置ク

協議会ハ会長ニ隸シ公正ナル立場ニ於テ左ノ事項ニ付協議ス

一、予算

二、決算

三、本規則ノ改廃

四、千円以上ノ額ノ基本金ノ支出

五、其ノ他会長ニ於テ協議ニ附スルヲ適當ト認メタル事項

第二十六條 協議会ハ議長一名、協議員二十名及協議委員若干名ヲ以テ之ヲ組織ス

議長ハ会長之ニ当ル

協議員ハ左ニ掲クル者ヲ以テ之ニ充ツ

一、京都帝国大学々部長 七名

二、京都帝国大学書記官、事務官、学生主事又ハ学生

主事補タル職員 三名

三、総部長 四名

四、部長（総部長タル者ヲ除ク） 六名

前項第二号及第四号協議員ハ会長之ヲ指名ス

協議員ノ同一資格ニ基ク任期ハ三年トス

協議委員ハ第四十五条ノ規定ニ依リ協議委員候補者トシ

テ推挙セラレタル正会員中ヨリ会長之ヲ命ス

協議委員ノ任期ハ一年トス

第二十七条 議長協議員及協議委員ハ協議会ニ出席シ協議

ヲ行フ

議長ハ協議会ノ事務ヲ指揮ス

第二十八条 中央部囑託ハ兼ネテ協議会ノ議事録ノ作成其

ノ他ノ事務ニ従事ス

第二十九条 協議会ハ会長之ヲ召集ス

定期協議会ハ毎年一月中旬之ヲ召集ス

会長必要アリト認ムルトキハ臨時協議会ヲ召集スルコト

ヲ得

第三十条 中央部役員、部長、部理事、部常務委員及監査

部役員ハ協議会ニ出席シ發言スルコトヲ得

第三十一条 協議会ノ召集開会会期等ニ関スル細則ハ別ニ

之ヲ定ム

第三十二条 協議会ニ中央部トノ連絡ヲ緊密ニシ会務ノ運

営ヲ敏活ナラシムル為参事会ヲ置ク

参事会ハ会長ニ隸シ左ノ事項ニ付協議ス

一、協議会ヨリ委任セラレタル事項

二、千円ニ滿タサル額ノ基本金ノ支出

三、三百円以上ノ額ノ予備費ノ支出

四、其ノ他中央部ニ於テ協議ニ附スルヲ適當ト認メタ

ル事項

第三十三条 参事会ハ議長一名参事員四名及参事委員五名

ヲ以テ之ヲ組織ス

議長及参事員ハ第二十六条第三項ノ規定ニ依リ協議員タ

ル者ノ中ヨリ会長之ヲ指名シ任期ヲ一年トス

参事委員ハ第四十六条ノ規定ニ依リ参事委員候補者トシ

テ互推セラレタル協議委員中ヨリ会長之ヲ命ス

参事委員ノ任期ハ一年トス

第三十四条 議長、参事員及参事委員ハ参事会ニ出席シ協

議ヲ行フ

議長ハ参事会ノ事務ヲ指揮ス

第三十五条 中央部囑託ニ関スル第二十八条ノ規定ハ参事

会ノ事務ニ付之ヲ準用ス

第三十六条 参事会ハ率ネ毎月一回理事長ノ請求ニ依リ会議ヲ開ク

第七 監 査

第三十七条 本会ニ綱紀維持並ニ会計検査ノ機関トシテ監査部ヲ置ク

監査部ハ会長ニ隸シ左ニ掲クル監査ノ事ヲ行フ

一、本会ノ目的ニ背馳シ黙止スヘカラサル事態ノ調査並ニ之ニ対スル処置ノ攻究

二、会計検査

第三十八条 監査部ニ左ノ役員ヲ置ク

監査部長 一名

監査員 二名

監査部長及監査員ハ特別会員中ヨリ会長之ヲ委嘱又ハ指名ス但シ他ノ役員ト相兼ヌルコトヲ得ス

監査部長及監査員ノ任期ハ二年トス

第三十九条 監査部ニ監査委員ヲ置クコトヲ得

監査委員ハ監査部長ノ推薦ニ依リ京都帝国大学職員又ハ正会員中ヨリ会長之ヲ委嘱シ又ハ命ス

第四十条 監査部長ハ監査部ヲ統括ス

監査部長第三十七条第二項第一号ノ事項ニ付調査攻究ノ

結果ヲ得タルトキハ会長ニ報告スヘシ

監査部長会計検査ヲ終リタルトキハ其ノ結果ヲ中央部ニ報告スヘシ必要アル場合ニ於テハ会長ニ報告スルコトヲ得

監査部長ハ協議会ニ於テ会計検査ノ結果ヲ報告スヘシ

監査員ハ監査部長ヲ輔ケ部務ヲ掌理ス

監査委員ハ監査部長及ヒ監査員ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ掌ル

第八 議 事

第四十一条 本会ノ各種機関ニ於ケル議事ハ衆議統裁ノ方針ニ基キ各員ヲシテ成ル可ク十分ニ論議ヲ尽サシメタル

上會議指導者ノ決スル所ニ依ル

第九 役員ノ選任及推挙

第四十二条 役員ハ任期満了ノ場合ニ於テ重ネテ之ヲ選任スルコトヲ得

第四十三条 欠員ノ補充トシテ選任セラレタル役員ノ任期

ハ前役員ノ残期間トス

第四十四条 中央委員候補者ノ数ハ十名トシ各部常務委員

ヲ以テ組織スル推挙会ニ於テ各部委員中ヨリ之ヲ推挙ス理事長ハ前項ノ推挙会ヲ主宰ス

第四十五条 正会員中ヨリ命セラルル協議委員ノ数ハ各学

部正会員五百名迄ニ付三名トシ以上三百名ヲ増ス毎二一

名ヲ加フ

協議委員候補者ノ数ハ前項ノ規定ニ依リ各学部正会員ニ付定メタル協議委員ノ数ノ二倍トシ当該学部正会員中ヨリ之ヲ互推ス

第四十六條 参事委員候補者ノ数ハ八名トシ協議委員タル正会員中ヨリ之ヲ互推ス

第四十七條 前三條ノ推挙ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

第十 會 計

第四十八條 本會ノ經費ハ入會金、會費、寄附金、補助金其ノ他ヲ以テ之ニ充ツ

第四十九條 正会員ハ入會金五円會費年額五円ヲ納付スヘシ但シ特別ノ事情アル者ニハ詮議ノ上會費ヲ免除スルコトアルヘシ

入會金ハ入學料ト同時ニ會費ハ各學年ノ始授業料ト同時ニ納付スヘシ

特別会員ハ慣行ニ依リ応分ノ寄附ヲ為ス

會友タラントスル者ハ入會ノ際入會金參円ヲ納付スヘシ準會員ハ入會金ヲ要セス會費ハ年額壹円トス

第五十條 部ハ部細則ノ定ムル所ニ依リ部費ヲ徴收スルコトヲ得

部ノ會計經理規則ハ別ニ之ヲ定ム

第五十一條 會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第五十二條 部ハ毎年度ノ經費ニ付予定經費要求書ヲ作成シ前年度十一月十五日迄ニ部長ヲ經テ中央部ニ提出スヘシ

中央部ハ前年度十二月中ニ前項ノ要求書ニ基キ各部ノ予定經費ニ付当該各部役員ト協議ノ上予算案ヲ作成スヘシ
第五十三條 予算ハ協議會ノ議ニ附シタル後會長之ヲ決ス
第五十四條 必要避クヘカラサル予算外ノ支出ニ充當スル為予備費ヲ設クルコトヲ得

第五十五條 前年度剩餘金ハ本會基本金ニ之ヲ組入ルルコトヲ要ス

附 則

第五十六條 本規則ハ昭和十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
第五十七條 本規則施行前ニ入學シ旧規則ニ依リ會費ヲ完納シタル正會員ハ爾後第四十九條ノ會費ヲ納付スルコトヲ要セス

前項ノ者ヲ除ク外本規則施行前ニ入學シタル正會員ハ第四十九條ノ規定ノ適用ニ関シ本規則施行ノ際入學シタル者ト看做ス但シ旧規則ニ依リ入會金ヲ納付シタル者ハ入會金ノミ之ヲ納付スルコトヲ要セス

第五十八條 昭和十六年度ノ予算ノ決定、役員候補者ノ推

挙其ノ他本規則ノ実施ニ必要ナル準備ニ関スル事項ニシ
テ本規則施行前別段ノ処置ヲ講セサルモノニ付テハ各本
条ノ規定ニ拘ラス會長ニ於テ適宜之ヲ処理ス

第五十九條 京都帝国大学臨時附属医学専門部生徒ノ取扱

ニ付テハ別ニ之ヲ定ム

一八 防衛団規則

〔六〕
達示第一〇号

一九四一(昭和一六)年八月一八日

京都帝国大学防衛団規則

第一 名称

第一條 本団ハ京都帝国大学防衛団ト称ス

第二 目的

第二條 本団ハ京都帝国大学ノ防衛ニ任スルヲ以テ目的
ス

第三 団員

第三條 本団ハ京都帝国大学ノ全職員ヲ以テ団員トス

第四 組織

第四條 本団ハ本部防衛団及部局防衛団ヲ以テ組織ス

部局防衛団ハ各学部、図書館、医院、農場、演習林及各
研究所ニ之ヲ置ク

第五條 本部防衛団ニ左ノ班ヲ置ク

情報班 連絡班 防火防毒班

警備班 救護班 整備班

配給班 庶務班

第六條 部局防衛団ノ班ニ付テハ別ニ之ヲ定ム

第七條 班ニ若干ノ係ヲ置ク

第五 役員

第八條 本団ニ左ノ役員ヲ置ク

総長 団長 班長 係長

第九條 本団総長ハ京都帝国大学総長之ニ当ル

総長ハ各防衛団ヲ統理ス

総長事故アルトキハ先任学部長之ヲ代理ス

第十條 団長ハ本部防衛団ニ在リテハ書記官、部局防衛団

ニ在リテハ各部局長ヲ以テ之ニ充テ総長之ヲ委嘱シ又ハ
命ス

団長ハ総長ノ命ヲ承ケ団務ヲ統括ス

第十一條 班長ハ団員中ヨリ総長之ヲ委嘱シ又ハ命ス

班長ハ団長ノ命ヲ承ケ班務ヲ掌理ス

第十二條 係長ハ団員中ヨリ団長之ヲ委嘱シ又ハ命ス

係長ハ班長ノ命ヲ承ケ係ノ事務ヲ掌ル

第六 任 務

第十三条 本部防衛団ハ主トシテ京都帝国大学本部ノ防衛

ニ当リ且ツ京都帝国大学防衛団ノ一般事務ヲ掌理ス

第十四条 部局防衛団ハ主トシテ京都帝国大学各部局ノ防

衛ニ任ス

第十五条 団長ハ必要ニヨリ京都帝国大学報国隊ノ配属ヲ

受ケ団務遂行ニ関シ之ヲ区処ス

附 則

本規則ハ昭和十六年八月十八日ヨリ之ヲ施行ス

一九 緊急科学研究体制

〔二六〕

一九四三(昭和一八)年九月二日

京都帝国大学緊急科学研究体制

緊逼セル現下ノ情勢ハ我ガ科学研究者ヲ動員シテ急速ニ研究ノ成果ヲ挙ゲ戦力ノ増強ヲ計ルニ於テ寸時モ忽ニス可ザルヲ痛感セシムコレ本学ニ於テ新タニ此ノ体制ヲ整ヘ特ニ緊急ヲ要シテ然モ尚ホ解決ヲ見ルニ至ラザル幾多重要問題ノ究明ニ奮進セムトスル所以ナリ

凡ソ此ノ種研究ノ進捗ヲ計ラムトスレバ設備完整セル研究

所ノ設立ヲ要スルコト言ヲ須キズト雖目前急逼ノ事情ニ対

シテ悠然トシテカ、ル常態ノ施設ヲ待ツベキニ非ズ茲ニ於

テカ此ノ体制ニ関与スル諸員ハ邦家興廢ノ岐路ニ立チ敢然

學術陣頭ニ挺身奮闘スル氣概^(マツ)ノ下ニ各自ソノ研究室ヲ本拠

トシ研究事項ニ従ヒテ互ニ連繫シ互ニ相扶ケ衆知ヲ尽シテ

綜合研究ノ成果ヲ挙グルコトヲ期セザル可ラズ其ノ經費ノ

如キモ之ヲ政府ノ給付ニ俟ツベキコト論ナシト雖国家制規

ノ存スルトコロ又立トコロニソノ實現ヲ見ルコト難カル可

ケレバ暫ク各研究室配當ノ經費其他奨學資金等ノ支出ニ依

リ之ヲ弁シ直ニ此ノ体制ノ活動ニ入ルベシ

今ソノ要領ヲ開列スレバ次ノ如シ

一、本体制ハ総務部及ビ研究部ノ兩部ヨリ成リ京都帝国大

学総長之ヲ統括ス

二、総務部ハ医・工・理・農各学部長及ビ化学研究所長・

工学研究所長ヲ以テ之ヲ組織ス

三、総務部ハ総長ノ命ヲ受ケ研究ノ企画連絡及ビ外部諸機

関トノ交渉等ヲ掌ル

四、総務部ニ幹事若干名ヲ置キ一般庶務ニ従事セシム幹事

ハ本学事務高等官中ヨリ総長之ヲ命ズ

五、研究部ハ現下戦力ノ増強ニ於テ最モ緊急ヲ要スル事項ノ研究ニ従事シ速ニ其ノ成果ヲ挙グルヲ以テ目的トス

六、研究部ハ研究事項ニ從ヒテ各々部門ヲ設ケ各部ノ研究主任者ヲ以テ部長トス

七、部長ハ広ク学内ノ教官職員中ヨリソノ研究ノ実施ニ適スルモノ若干名ヲ選出シテ総長ニ推薦シ総長ハ之ニ研究員ヲ命ズ

八、研究上ノ必要ニ応ジ総長ハ学外ニ於テモ研究員ヲ依嘱スルコトアルベシ

二〇 勤労報国隊規則

一九四四(昭和一九)年六月二八日
〔二六〕

京都帝国大学勤労報国隊規則

第一条 本隊ハ京都帝国大学勤労報国隊ト称ス

第二条 本隊ハ隊員ノ勤勞奉公精神ノ昂揚ヲ図リ戦力増強

ニ寄与スルヲ以テ目的トス

第三条 本隊ハ京都帝国大学職員(傭人ヲ含ム以下之ニ同ジ)ヲ以テ隊員トス 但シ特別ノ事情アル者ハ之ヲ除クコトアルベシ

京都帝国大学職員ニシテ勤勞報国協力令第三条第一項ニ該当セザル者又ハ同令第十一条二号ノ規定ニ依リ指定セラレタル者ハ志願ニ依リ隊員タルモノトス

第四条 本隊ハ総務部及部隊ヲ以テ組織ス

総務部ハ本隊運営ノ企画及連絡ニ任ズ

部隊ハ本部、各学部、図書館、医院、農場、演習林及各研究所ニ之ヲ置キ別ニ定ムル隊組織ヲ以テ活動ヲ行フ

第五条 本隊ニ左ノ役員ヲ置ク

一、総 長

二、総務部長、総務部員

三、部 隊長

第六条 本隊総長ハ京都帝国大学総長之ニ當ル

第七条 総務部長、総務部員及部隊長ハ隊員中ヨリ総長之ヲ命ス

第八条 役員ノ任務左ノ如シ

総長ハ本隊ヲ統理ス

総務部長ハ総長ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理ス

総務部員ハ部長ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌ル

部隊長ハ総長ノ命ヲ承ケ隊務ヲ統括ス

第九条 総務部ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

附 則

本規則ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

二 生徒隊規則

一九四五(昭和二〇)年七月一二日

京都帝国大学生徒隊規則

第一 名 称

第一条 本隊ハ京都帝国大学生徒隊ト称ス

第二 目 的

第二条 本隊ハ戦時教育令ニ依ル生徒隊ノ使命ヲ達成スルヲ以テ目的トス

第三 隊 員

第三条 本隊ハ京都帝国大学教官職員及学生生徒ノ全員ヲ以テ編成ス

第四 任 務

第四条 本隊ハ第二条ノ目的ヲ達成スル為、食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究等戦時ニ緊切ナル要務ニ挺身シ、併セテ非常事態ニ対処セムガ為、智能ノ錬磨、心身ノ鍛鍊ニ努ムルヲ以テ其ノ任務トス

第五 編 制

第五条 本隊総長ハ京都帝国大学総長之ニ当ル

総長ハ本隊ヲ統率ス

総長事故アル時ハ年長ノ学部長之ヲ代理ス

第六条 本隊ハ本部、各学部ニ編成スル学部隊及其他ノ各

部局ニ編成スル部局隊ヨリ成ル

附属医学専門部ニ医学専門部隊ヲ編成シ其ノ運営ハ学部隊ニ準ズ

部隊ニ準ズ

学部隊及部局隊ニ夫々隊本部ヲ置ク

学部隊及部局隊ハ其ノ隊員ノ数ニ応ジ若干ノ大(中)隊ヲ編成ス ソノ編成ノ基準ハ別ニ之ヲ定ム

第七条 学部隊ハ学部本隊ト学部枝隊ヨリ成ル

学部本隊ハ当該学部ニ属スル教授、助教授、講師、教務職員及其ノ所属大学院学生、学生生徒ヲ以テ編成ス 学部枝隊ハ学部本隊ニ所属セザル当該学部職員ヲ以テ編成ス

第八条 総長ハ時宜ニ依リ学部隊及部局隊ニ特技隊ヲ編成ス

特技隊ハ戦時ニ必要ナル特技ヲ有スル教官、職員及学生生徒ヲ以テ編成ス ソノ編成ハ別ニ之ヲ定ム

第六 職 員

第九条 本部ニ左ノ職員ヲ置ク

幕僚 若干名 部附 若干名

幕僚ハ各部局長、書記官、主任軍事教官、学生主事、事務官トシ総長之ヲ委嘱シ又ハ命ズ

幕僚ハ総長ニ隸シ其ノ命ヲ承ケテ本隊ノ企画統制ノ任

ニ当ル

部附ハ学生主事補、教練教官、書記、囑託等ノ中ヨリ
総長之ヲ命ズ

部附ハ幕僚ヲ輔ケテ部務ヲ掌ル

第十条 学部隊長ハ当該学部長之ニ当リ総長ノ命ヲ承ケテ
学部隊ヲ統率ス

学部隊本部ニ左ノ職員ヲ置ク

部員 若干名 部附 若干名

部員ハ当該学部教官中ヨリ学部隊長之ヲ命ジ学部隊長
ニ隸シ其ノ命ヲ承ケテ学部隊ノ企画統制ノ任ニ当ル 時
宜ニ依リ学部隊ノ指揮ニ任ズ

部附ハ当該学部職員中ヨリ学部隊長之ヲ命ジ部員ヲ輔
ケテ部務ヲ掌ル

第十一条 学部本隊ニ左ノ職員ヲ置ク

学部本隊長 一名 隊附 若干名

学部本隊長ハ当該学部教官中ヨリ学部隊長之ヲ命ジ学
部隊長ニ隸シテ当該学部本隊ノ指揮ニ任ズ

隊附ハ当該学部教官中ヨリ学部隊長之ヲ命ジ学部本隊
長ヲ輔ケテ隊務ヲ掌ル

第十二条 学部枝隊ニ左ノ職員ヲ置ク

学部枝隊長 一名 隊附 若干名

学部枝隊長ハ当該学部教官又ハ職員中ヨリ学部隊長之

ヲ命ジ、学部隊長ニ隸シ当該学部枝隊ノ指揮ニ任ズ

隊附ハ当該学部教官及職員中ヨリ学部隊長之ヲ命ジ、
学部枝隊長ヲ輔ケテ隊務ヲ掌ル

第十三条 部局隊長ハ当該部局長之ニ当リ総長ノ命ヲ承ケ
テ部局隊ヲ統率ス

部局隊本部ニ左ノ職員ヲ置ク

部員 若干名 部附 若干名

部員ハ当該部局教官及職員中ヨリ部局長之ヲ命ズ
部附ノ任命及部附ノ任務ニ付テハ学部隊本部ノ職員ニ
準ズ

第十四条 各特技隊ニ左ノ職員ヲ置ク

隊長 一名 隊附 若干名

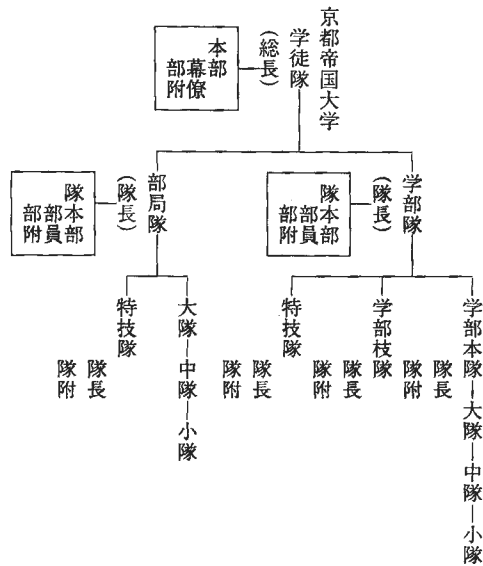
隊長及隊附ノ任命及任務ニ付テハ学部枝隊ノ職員ニ準
ズ

附 則

第十五条 本規則ハ昭和二十年六月二十五日ヨリ之ヲ施行
ス

第十六条 京都帝国大学報国隊規則ハ之ヲ廃止ス

京都帝国大学学徒隊組織表



二 荒本文相改革問題

一 総長候補者選挙延期*

一九三八(昭和一三)年七月一〇日 (二五)

(平野正雄)
議長ヨリ各学部長ヨリ御話アツタコトト思フカ昨日山川局
(荒本貞夫)
長入洛セラレ文部大臣ヨリノ話ナリトテ浜田総長ニ京大ノ
(藤作)

爾学ヲ完成シテ貫ヒ度イカラ此ノ際辞表ヲ提出サレテモ認
メラレヌ、之ヲ御聴ニナラナケレバ直接逢ツテ話シタキト
ノ意向ナル故ソレ迄選挙ヲ延期セラレタキ旨ノ申入デアツ
タコノ件ニツキ御協議願ヒタキ旨ノ提案ヲナシ各評議員ヨ
リ種々意見交換アリタル結果左ノ如ク決定セリ

記

七月十一日執行ノ総長候補者選挙ハ当日之ヲ行ハス期日ハ
追テ之ヲ定ム

尚左記三項ヲ決定セリ

(一) 総長候補者選挙手続第七条ニ依ル選挙期日ノ通知ハ成
行ニマカセ各学部長ニ諮ツテ決定ノコト

(二) 明日午前八時半第一次投票用紙ヲ本部大会議室ニ持寄
リ処分ノコト

(三) 明日ノ選挙延期ニツキ新聞記者ニ左記ノ通り昨日学部
長会議ニテ作レル草案ヲ発表スルコト

浜田総長ノ辞任ニ関シテハ文部省ハ極力慰留シタキ意向ア
ルニヨリ大学ハ之ニ鑑ミ大学トシテ今日ノ選挙手続ヲ延期
スルコトトシタリ

二 長与日記 一九三八年七月一三日条〔抄〕 [五九]

事件の発端

大学

◎山川専門局長来京大総長後任問題に關し、総長候補公選

〔過去〕

に就て荒木文相に異見あるを報ず、京大に於て十一日後任
選挙が延期となりしはそのためなり

〔現二部〕

始め文相は上京中の中村書記官に対し、選挙内容を厳秘に
すること、候補となりて直に抱負を記者団に語るを避くる

〔延吉〕

ことを語りし由なるが、八日に至り〔教審会議中に突如伊東
次官を呼寄せ〕公選の絶体非なるを述べ、濱田は総長として

〔精作〕

適任、且爾学途上に在るを以て留任すべし、若し飽くまで
辞任せんとするならば大臣と直接会見の上にすべし、との

〔謙次〕

意見なり山川氏は同日京都に急行、先づ濱田面会せるに、
辞意固く公私の生活に於て特別深い関係のあつた清野にし

〔謙次〕

て彼の行動ありしを見て自分は全然自信を失へり、自己は
飽くまで止める、事務代理を置いてもよし、自分は評議會

〔ママ〕

にも学部長會議にも出席せず静養中なれば、早く後任を定
めて貰ひたしといふ〔山川氏は濱田氏には大臣の真意を伝へ

〔ママ〕

ず只留任を希望し居ること、公選は六ヶ敷き旨を抽象的
に述たる由〕

中村書記官の提案に各学部長同意の結果

九日山川は各学部長と面会の上大臣の総長留任熱望の旨を
伝ふ〔前述の理由〕

その後山川一個人の觀察として公選の困難なることを述べ

〔政太郎〕

○前例、〔澤柳〕京大総長が多数の教授を誡首せる時、公選に
依らず荒木氏の任命を見たることあり、東大にては山川総

〔延吉〕

長以来〔大正四五年?〕公選を実行し居れり、
世間に於ける公選反対の理由

〔謙次〕

(a)法令に根拠なし〔議員、地方自治団体の役人の選挙とは
異なる〕(b)大学総長の選挙はデモクラシー思想なり、候補者

〔ママ〕

といふも一人を出し、事實はそれに決す
山川氏は大学の意見を反影せずして総長を任命すると帝大

〔ママ〕

は大世帯であり、学術を研究する学者の集団なれば一般行
政官の任命とは大に異なる旨を述べたるにも拘らず大臣は選

〔ママ〕

挙を不可といふ〔命令的〕、故に適當なる代案なき限り当分
選挙はせぬということとなり帰京せしといふ、

〔ママ〕

之は極めて重大なる問題なり余は東大の選挙法は殆ど理想
に近きものなるも各帝大夫々異なる、先づ各帝大に総長候

〔ママ〕

補選定内規を文部省に取り寄せ、再考する、而して内地各
帝大総長が文相に面会して懇談を遂ぐるが可ならんと述べ

〔ママ〕

山川氏も此考を有ち居たる由〔次官以下にては駄目〕

〔以下略〕

〔注〕欄外に「西田幾太郎博士の選挙観（京大はあまり窮屈、人材を広く求むべし）、六十才、学内、現役、等々。」との書き込みあり。

三 後任総長詮衡に関する決定事項*

〔二六〕

一九三八（昭和一三）年七月二六日

〔浜田辨作〕

〔荒木貞夫〕

〔祐島〕

総長ノ辞意表明ニ対シ文部大臣ヨリ翻意ノ勧告アリ、小島、前田両評議員ハ総長ヲ訪問シ留任ヲ懇請シ総長代理トシテ宮本、小島両評議員東上シ文部大臣其ノ他ト面会シタル経過ニ付テハ昨日ノ懇談会ニ於ケル報告ヲ承認セリ

一、後任総長推薦ニ関シ左記ノ通決定

一、浜田総長辞意表明ニ伴ヒ開始セル総長候補者選挙ハ之ヲ停止スルコト

二、総長詮衡ニ就テノ方法ハ評議員ヲ委員トスル特別委員会ニ一任ノコト

三、現在ノ選挙手続ハ将来改正スル条件付ニテ之ヲ其ノ儘トシ今度ノ新総長選出方法ヲ右特別委員会ニテ決定スルコト

備考

後任総長推薦ニ関シテハ非常ニ急ヲ要スルニ付此ノ次ノ総長選挙ニ限り評議員ヲ特別委員トスル委員会ニ於テ詮衡方針ヲ決スルコトヲ一任サレタキ旨各学部教授会ニ諮リ承認ヲ得タルモノナリ

（七月二十六日午前中各学部教授会開催）

評議会終了後直ニ委員会ニ移リ左記事項ヲ決定セリ

一、総長候補者詮衡ノ為詮衡委員会ヲ設クルコト委員ハ各学部三名宛トシ其ノ選定方法ハ各学部ニ一任ス
二、総長候補者トシテノ資格ハ現行手続ノ通本学教授ニ限ル

三、詮衡委員決定ノ上ハ可成早ク総長候補者ヲ決定ス

四、委員ハ候補者ヲ一名乃至三名ヲ推薦ス

五、右推薦サレタル候補者名簿ヲ作りソノ中ヨリ單記無記名ニテ一名ヲ投票ス

過半数ヲ得タル者ヲ以テ第一候補者トス

過半数ヲ得タル者ナキトキハ現行規定通り決選投票ニヨリ第一候補者ヲ決定ス

六、同手続ヲ二回繰返シ第二、第三ノ候補者ヲ決定ス

七、開票立会人ハ総長代理ノ外年長委員二名トシ総長代

理ハ委員長トス
八、投票ノ結果ハ教授会ニ発表セサルコト

四 後任総長詮衡に関する七月二十六日付決定取消* [二五]

一九三八(昭和一三)年七月三〇日

^{〔正雄〕}
平野総長事務取扱ヨリ二十八日^{〔荒木貞夫〕}文部大臣トノ面談並ニ同日午後催サレタル帝大総長協議会ノ報告アリ、各評議員ヨリソレソレ質問アリタル後左記事項ヲ議決セリ

一、総長選出方法ニ就テハ今回限りノモノトセス各帝大ト協調シテ具体案ヲ作成スルコト

一、之方為去ル二十六日ノ評議會ニ於ケル左記決定ヲ取消スルコト

(一) 総長詮衡ニ就テノ方法ハ評議員ヲ委員トスル特別委員会ニ一任ノコト

(二) 現在ノ選挙手続ハ将来改正スル条件付ニテ之ヲ其ノ儘トシ今回ノ新総長選出方法ヲ右特別委員会ニテ決定スルコト

一、右方針ニ基キ各学部ヨリ三名宛特別委員ヲ新ニ選出スルコト

右委員ハ評議員ニ限ラヌコトニ決定

一、右委員会ハ総長問題ニ限ラス今回問題トナレル学部長ノ問題教授、助教授ノ進退ニ関スル問題ヲモ併セ議スルコトトシ先ニ総長問題ヲ議スルコト

一、第一回委員会ハ八月五日(金)午後一時ヨリ開催ノコト

同席上ニ於テ平野総長事務取扱ヨリ左記ノ通り通告セリ

七月五日濱田^{〔耕作〕}総長ヨリ総長選挙開始ニ関スル通告ハ之ヲ取消ス

五 総長、学部長等ノ詮衡推薦ニ関スル件 [六八]

一九三八(昭和一三)年八月六日

総長、学部長、教授、助教授ノ詮衡推薦ニ関シ從來本学ノ採リ来ツタ内規ハ決シテ不法ナモノデハナイ、従ツテソノ内規ノ精神ハドコ迄モ生カシテユクベキデアルト思フガ此ノ際文相ノ要望ニ鑑ミソノ運用方法ニツイテ考慮ノ余地ガアルナラバ調査研究ヲ遂ゲタイト思フ、此ノ方針ニ基イテ具体的ノ問題ニ付審議シタガ未ダ結論ニ到達シテハキナイ尚此ノ問題ハ継続シテ審議ヲ重ネルコトニナツタ

六 山川局長私案

一九三八(昭和一二)年八月一三日 〔六八〕(建)
山川局長私案

教授ノ詮衡方法ハ

主任教授又ハ関係教授カ適當ナ候補者ヲ学部長了解ノ下ニ提出スル。学部長ノ指名スル必要数ノ詮衡委員ガ候補者ニツキ年齢、人物、識見研究能力等ヲ調べテ教授会ニ報告ス。教授ハ夫々ノ意見ヲ開陳シタル後投票ニヨラズ詮衡スル。然ル可キ期間ニ反対アラバ学部長ニ申出デサセ、部長ハ全体ノ意向ヲ見透シ、反対多く、且ツ独自ノ見解モソレニ一致スルトキハ再詮衡ヲ防^(マツ)ケンイ。

従来ト異ルハ数デ定メズ、学部長ノ考ガ加ハル点デ、教授ハ輔佐ノ意味デ意見ヲ述ベルコトニナル。

学部長ノ詮衡方法ハ

学部長ハ教授カラ意見ノ申出ヲ受ケ之ヲ参考トシ自己ノ意見ヲ加ヘテ総長ニ申出デ、総長ハ之等ヲ参酌シ更ニ独自ノ意見ヲ加ヘ大臣ニ具状ス

総長ノ推薦方法ハ

大臣ハ現総長ニ聞ク、総長ハ学部長ノ意見ヲ聞キ、学部長ハ教授ノ意見ヲ徴シテモヨイ。

教授ノ意見ヲ纏メ学部長ノ意見ヲ加ヘ学部長カラ総長ニ出

ス。カクテ大学ノ総意ハ参酌サレ、学部長、総長ノ考モ出ルカラ筋道カ立ツ。

(八月十三日)

七 文部省案

一九三八(昭和一二)年八月二四日 〔六八〕

文部省案

現行制度ニ於テ選挙(投票ヲ含ム)ハ何故不可ナルカ

一、数ニ依ツテ結果ヲ得ルトイフコトハ投票制度ノ重要ナル要素デアツテ官吏ノ人事ヲ此ノ如ク数ニ依ツテ決定スルトイフ事ハヨクナイ

二、大学教授ハ選挙、投票トイフコトヲ学部長ナリ総長

ヲ輔佐シテ誤ナカラシメルモノデアルト考ヘテ居ラル、ダラウガ、世間デハ選挙、投票ヲ權利ト思ツテ中ル。即チ各教授ガ選挙権、投票権トイフ權利ヲ以テ総長候補者ヲ選ビ出スト、下ノ教授ハ上ノ総長ヲ決定スル様ニ世間ハ思フ。

下カラ上ヲ決メテユク様ニ考ヘラレルコトハ甚ダ困ルノデ、上カラ下ヘ意見ヲ聴イテ定メル制度ニ改メタイト思フ。

然ラバ如何ニ改ムベキカ

一、大学ノ人事ニ関シテハ大学ノ使命遂行上大学ノ意志ハ十分酌ミ取ル

二、大学教授ハ人事ニ関シテ総長ヲ輔佐スル意味ニテソノ責任ヲ明ニスル為署名シタル文書ヲ以テ意見ヲ述ブル様ニシテ貰ヒ度イ。

投票ニハ記名ト無記名トアツテ從來無記名投票ハ多ク行ハレテキルノデアルガ、大学ノ人事ハ投票ニヨリ数デ決メルノデハナク、総長、学部長ガ教授ノ意見ヲ聴ギ、教授ハ意見ヲ上申スル様ニ願ヒタイ。

学部長ハ教授ノ意見ヲ聴ク場合ニ或ハ挙手起立ニヨリ意向ヲ纏メテモヨイガ又投票ノ様ナ形式デ意見ヲ求メタ場合ニ反対者ガ署名シテ居レバ学部長ナリ総長ガソノ人カラ反対ノ意見ヲ聴イテ参考ニスルコトガ出来ル。

勿論多数ガ賛成デ学部長モ同意デアレバ少数ノ反対者ガアツテモ其儘決定シテ推薦スルトイフ事デヨイガ、タトヘ反对者ノ方ガ少シ少ナイ位デアツテモノノ意見ニヨリ学部長ガ多数ノ方ニ賛成シナケレバ更ニヤリ直ス様ニスル。

反対意見ハ教授会トカ委員会ノ席上デ発表シナクテ

モ後デ総長ナリ学部長ノトコロヘ申出シテ貰ヘバヨロシイ。

反対意見ハ悉ク採用スルトイフノデナク、必要ニ応シテ参酌スルノデソノ場合署名カ無イト誰ガ反対カ分ラナイ

三、人事ノ内容ニ就イテハ絶対秘密ヲ保持スル

要スルニ大学ノ人事ニ関シテノ選挙、投票ハ之ヲ廃止シテモライ度イ

数ニ拘束セラレナイデ総長ハ人事ノ具状権ヲ持ツテキルノデアルカラ、之ヲ輔佐スル意味ニテ上カラ下ヘ意見ヲ聴クトイフ様ニシテモライ度イ

以上ノ根本方針ニ基イテソノ具体案ハ大学デ研究シテモライ度イ。

法令又ハ大学令ニ触レナイモノデアレバ大学デ勝手ニ定メテモラツテモヨイ。

任期ニ関シテハ之ハ天皇ノ大権ニ及ブモノデアルカラ任期何年ト内規ニ定メテ公然之ヲ知ルノハヨクナイ。

然シ学部長デモ総長デモ何時迄モ長ク勤メルトイフ事ハ困ルト思フカラ、学部長ノ在職期間ノ大体ノ標準(二年カ三年)ハ総長ガ肚デ心得テキル。

総長ノ在職期間ノ大体ノ標準(四年カ五年)ハ文部大臣ハ

肚デ心得テ居ル様ニシタイ。然シ総長モ大臣モ時ニ代ルノデアルカラ「メモ」的ニ何カニ記シテ置ク事ハ差支ナイ。ツマリ部長ノ上司タル総長。総長ノ上司タル大臣ハ大体ノ標準ヲ決メテ肚ニ持ツテ居ルトイフコトニスレバ差支ナイ。

(八月二十四日)

八 大学制度調査委員会決定事項

一九三八(昭和一二)年八月

大学制度調査委員会決定事項

総長ノ詮衡

- 一、総長候補者詮衡ノ為ニ詮衡委員会ヲ設クルコト
- 二、詮衡委員ハ総長之ヲ評議會ニ諮ル。評議員ヲ委員トスルカ特別委員ヲ設ケルカハ今少シ状勢ノ推移ヲ見テ決定ノコト
- 三、特別委員ヲ設ケル場合ハ各学部三名トスルコト
- 四、詮衡委員ノ選出スヘキ候補者ハ各人一名乃至三名トスルコト
- 五、候補者資格ハ名誉教授或ハ大学関係者ヲ加ヘルトイフ意見モ相当強カリシモ不取敢現在通本学現任教授ニ限ルコト

六、候補者名簿ヨリ一度ノ投票デ決定シナイコト

一度デ三名ヲ選ビ更ニ一名ヲ選ブコトトスルモ詳細ハ更メテ研究ノコト、ソノ三名ニシテ委員タル者ハ投票ニ加ハラズ

七、開票立会人ハ総長又ハ総長代理、書記官、庶務課長ノ三人トスルコト

八、当选シタル人ニハ就職ノ意思ヲ確メルコト

学部ノ承諾ヲ更メテ得ナクトモヨキ様予メ教授会デ承諾ヲ得ルコト

九、候補者名簿ハ庶務課長投票場ニテ印刷ノコト

一〇、得票数ハ絶対秘密ニシ詮衡委員ニモ知ラセヌコト

(以上第二回)

教授、助教授ノ詮衡

教授、助教授ノ詮衡ニ関シテハ関係教授ヨリ候補者ヲ学部長ニ申出ツ

学部長ハ教授会ニ諮リ右候補者ヲ決定ス

(以上第三回)

学部長ノ推薦

学部長ノ候補者推薦ニ関シテハ学部長ハ教授会ニ諮リ候補者ヲ決定シ之ヲ総長ニ推薦ス

(以上第四回)

九 長与日記 一九三八年九月三日条

〔三七〕

十時懷徳館

京都帝大幹部との会合、

京都、

平野^{〔正徳〕}総長事務取扱、宮本^{〔英徳〕}法学部長、小島^{〔祐也〕}文学部長、

高田^{〔保也〕}経済学部長、野満^{〔隆治〕}理学部長、中村^{〔重三郎〕}書記官、

東大、

寺沢^{〔寛二〕}氏を除く各学部長、江口^{〔重三郎〕}氏

余、先づ遠来の勞を謝し、京都帝大が其後取りたる態度及昨日文部大臣^{〔宮本武久〕}以下との会見内容を聴く。

平野、高田、宮本氏主として語る。

京大は大学制度調査会(各学部三名)を設け、此会に於て同大学の取る方針を凝議し来り(毎週一回参集)しが、文部事務当局之言時に変更あり、直接大臣と会談の必要を感じ昨日の会合となりしこと。京大は大体東大と同じく現行制度は変更の要なきのみならず、大学使命遂行その存置は必要なること、運用に於ては考慮することの大方針定まり、昨日も可なり痛烈なる質問を連発せし如し。殊に宮本氏は数によりて決することは合議制に於て必要欠く可らざるること、枢密院の如きも多数に依りて決すとなり居ることなど述べたる如し。文部省側は次官^{〔伊東延吉〕}以下は無言、大臣独り答弁せるも論理不明確、只「筋を立てる」「^{〔大石〕}堅」の統制を主張せしよし。

結局双方考慮するといふことにて決れたるが、京大側は京都出發前種々考へ来りし応酬の案は文部省の態度が余りに著しく変化し居たるに驚きしとの如し。

余及各学部長より東大のとり来りし態度、両度の懇談会の経緯より、起草委員を依嘱して原案作製に取掛ることを述べ、各帝大が連絡を取り、少くとも総長候補推薦に關しては略同一様式とすることが望ましきこと(丹羽^{〔重光〕}氏)等を述べ懇談数刻、午餐を共にし一時半散会す。文部省は東西兩大学が殆んど同一の強硬態度なるため意氣消沈、今は只面目を立てることに腐心し、会議の前夜山川^{〔進〕}氏は宮本氏と懇談昨夜は省内会議を開きたる由。去月十二日の東大との懇談会に於ける大臣の訓辞は痛く東大を刺戟し、ますく「硬化の原因となりしに鑑みたるものと見へ、昨日は訓辞はなく、直に質問に入りし由なり。夜江口氏、山川氏と会談の内容を報ず。大臣は頗る焦燥し居る様子なり。

〔注〕『東京大学史紀要』第九号、一九九一年九月に収録。

一〇 総長、学部長、教授助教候補者推薦に関する件*

〔二五〕

一九三八(昭和十三)年一〇月二日

(荒木貞夫)

一、本年七月二十八日文科大臣ノ要望ニ対シ左記要綱ヲ本学回答トシテ追認セリ

記

総長候補者推薦ニ関スル件

一 総長ハ全教授ノ意見ヲ徴シテ後任候補者ヲ銓衡シ之ヲ文部大臣ニ推薦スルモノトス

総長死亡シタルトキ又ハ後任候補者ヲ推薦セスシテ退職シタルトキハ総長代理者之ヲ行フ

一 教授ノ答申ハ署名セル文書其他責任ヲ明カニスル方法ヲ以テ之ヲ為スモノトス

一 総長更迭ノ時期ハ別ニ之ヲ定ム

学部長候補者推薦ニ関スル件

一 総長ハ学部長ノ推薦ニ基キ後任学部長候補者ヲ文科大臣ニ推薦ス

一 学部長後任候補者ヲ推薦スルニ当リテハ之ヲ教授会ニ諮ルモノトス

一 教授ノ答申ハ署名セル文書其他責任ヲ明カニスル方法ヲ以テ之ヲ為スモノトス

一 学部長更迭ノ時期ハ別ニ之ヲ定ム

教授助教候補者推薦ニ関スル件

一 総長ハ学部長ノ推薦ニ基キ教授助教候補者ヲ文科大臣ニ推薦ス

一 学部長教授助教候補者ヲ推薦スルニ当リテハ之ヲ教授会ニ諮ルモノトス

一 教授ノ答申ハ署名セル文書其他責任ヲ明カニスル方法ヲ以テ之ヲ為スモノトス

二 戦時下の儀式・行事

一 戦歿者合同慰霊祭案内状*

一九三九(昭和十四)年一〇月二日

〔七二〕

謹啓 時下初秋の候益々御清適奉大賀候

陳は来る十月八日午前十時より本学大ホールに於て本学職員学生並に卒業生にして今次事变に依り戦歿したる者の合同慰霊祭執行可致候間何卒御繰合せ御参列の栄を賜り度此段御案内申上候

敬具

昭和十四年十月二日

京都帝国大学総長 羽田 亨

第5章 戦時体制

謹啓 時下初秋の候益々御清適奉大賀候

陳は 殿には本学 中今次の事変に際し勇

躍征途に就かせられ新東亜建設の聖業遂行の為御奮戦中の
処名譽の戦死を遂げられ候趣感激に勝へざる次第に御座候
就ては来る十月八日午前十時より本学に於て神式を以て合
同慰霊祭を執行可致候間御多用中とは存候へ共何卒御繰合
せ御参列被下度此段御案内申上候 敬具

昭和十四年十月二日

京都帝国大学総長 羽田 亨

追て御出席の際は本状受付にお示し被下度尚乍御手
数御出席の有無別紙葉書により十月五日迄に御回報
相煩し度申添候

●次 第 (十月八日午前十時
於本部大ホール)

第一鈴 学生々徒入場

第二鈴 職員入場

第三鈴 遺族来賓入場

祭員入場

一、修 祓

一同磬折

一、降 神 此間管搔警蹕 一同磬折

一、献 饌 此間奏楽

一、斎主諄辞 一同磬折

一、祭主祭詞

一、斎主玉串奉奠

一、祭主玉串奉奠

一、遺族玉串奉奠

一、職員総代玉串奉奠

一、学生生徒総代玉串奉奠

一、来賓総代玉串奉奠

一、撤 饌 此間奏楽

一、昇 神 此間管搔警蹕 一同磬折

一、祭主挨拶

祭員退場

来賓遺族退場

職員退場

学生生徒退場

●戦歿者名簿

職 員

保坂一郎 (医 院)

小林 祥助	(同)	菅 末男	(工学部)	山本 春一	(同)	吉田 爲夫	(化学研)	長尾 輝夫	(学友会)	栗津 正太郎	(同)	大学院学生	只木 文夫	(法学部)	木村 徳治	(工学部)	海老瀬 浩	(理学部)	田中 知忠	(法学部)	一柳 太郎	(経済学部)	山口 鼎	(農学部)	以上
-------	-----	------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	-------	--------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------	-------	----

二 紀元二千六百年記念事業(案)

一九四〇(昭和一五)年九月一二日

紀元二千六百年記念事業(案) 申出

(一)行事

一、紀元節祝賀式後

学旗掲揚及学歌始唱式(本部) 二月十一日実行ノ予定

一、本学記念日ニ学内開放(本部) 学部ノ事情ニヨリ実施シタシ

一、尊攘堂大祭盛行(図書館) 実施ノ予定

一、記念講演会(法学部) 希望ノ学部又ハ全学ニテ挙行スルモ可ナリ、各学部ニテ協議シオカレタシ

一、記念当日榎原神宮へ徒歩参拝(工学部) 困難

一、祭典挙行(文学部) 実行ノ予定ナリ

一、本学建設功労者表彰(理学部) 適當三人選シ得レバ可ナルモ人選困難ナルヘシ

(二)事業

(イ)建設

一、印刷所及製本所設置(図書館) 困難

一、医学資料陳列設置ノ拡充(医学部) 図書館竣成後考慮セラレタシ

一、満蒙ニコロニー設置(工学部) 学外ト提携アモシテ出来レハ考ヘタシ

一、東亜経済研究所建設(経済学部) 寄附モ考慮ノ要アリ希望トシタシ

一、北部、本部及医学部構内ニ博物

物館設置(理学部)

一、総合的科学博物館ノ設置(寄附)(工学部)

一、学生鍛錬場ノ建設(学生課)

一、学生大集会室ノ設置(学生課)

一、記念学術研究奨励金募集(工学部) 問題トシテ取上ケテ然ルベキナラン

一、植林(農学部) 本部ニテハ和歌山県大島開拓ノ計画アリ、又農学部演習林ニモ計画アリ計サル程度ニ於テ実現シタシ

一、構内植樹(本部) 北部、本部、医学部構内ニ適當ナル樹木ヲ選ビ記念植樹ヲシ石碑ヲ建ツルモ可ナルヘシ

一、植林(学友会基本金一部支弁)(本部) 前々項参照

(ロ) 編集 一、貴重書解題目録編集刊行(図書館) 現在着手セル

目録、編集ノ事業アリ、故ニ他日ニ譲リタシ

一、京都帝國大学史資料ノ蒐集並ニ編集(リ) 京都帝國大学史ト併セ考慮ノコト

一、記念論文集刊行(文学部) 或ハ次項ノ方ガ適當ナラザルカ

一、本学ニ於ケル研究業績摘要ヲ取纏メ邦文ニテ出版(理学部) アニユアルレポートヲ考慮シタシ

一、京大四十年史編集(本部) 具体案講究ノ予定ナリ 本学附属団体ニ於ケル事業計画

一、本学部論叢記念号刊行(法学部)

一、経済論叢紀元二千六百年記念号ヲ十一月ニ発行(経済学部)

三 本学歴史編集ニ関スル件

一九四〇(昭和一五)年九月一二日

一、本学歴史編集ニ関スル件

(羽田カ) 総長ヨリ過般文部省ニ於テ大学ノ學術上ノ業績ヲ周知セシムベキ方法ナキヤトノ談アリシニ対シ紀元二千六百年記念事業ノ一トシテ計画中ノ本学史ノ編集ニ当リ本学ニ於ケル學術発達ノ有様ヲ明ラカナラシムルヤウ

考慮すべき旨答へ置ケルコト、及ビ本件ニ関シ七月二十日ノ学部長會議ノ席上協議セラレシ左記事項ニ付キ説明アリ

- (一) 本学學術ノ發達ヲ主トセルモノヲ編纂スルコト
 - (二) 記述ハ學生ノ理解シ得ル程度ノモノトスルコト
 - (三) 出来ル限り早く完成スルコト
 - (四) 編纂ハ各教室各講座ニテ分担スルコト
- 依テ協議ノ結果其ノ具体的方法ニ付テハ次回ニ協議ノコトトス

四 国民的感激をこめて寿ぐ祝典の日近し 講演・学内開放の催決まる〔抄〕

一九四〇(昭和一九)年一〇月二〇日 〔三三〕

国民的感激をこめて寿ぐ祝典の日近し 講演・学内開放の催決まる

光輝満つる紀元二千六百年記念については日本国民こぞつて心から慶祝の誠を尽くすべく各方面にわたつて盛大な催しが続々執り行はれつゝあるが、本学ではこの重大時局下における記憶すべき歳を如何に記念すべきかにつきかね／＼協議し、それには大学としての特色を十分生かして真に自

覚せる有意義な催しならしむべく準備中のところ、さる十日の評議會でいよ／＼最後の決定をみるにいたつたすなはち全学的な催しとして來たる十一月十六日を期し盛大なる記念祝典を催し、教職員も學生も全学こぞつて心からこの佳き歳を寿ぎ、祖先の偉業を偲ぶと、もに皇運の彌栄えまさんことを祈念し、さらに式後記念樹を構内に植ゑて今日の佳き日を永遠に記念すること、なつたが、一方同時に講演会と学内開放の二事業をも催して当日を大学の祝典として真にふさはしく意義あるものたらしめることになつた

祝典式は本部ホールで十六日朝盛大に挙げられるが、他方講演会については十六、七両日にわたり各午後一時から法経第一教室で催されその講師は七学部全部に及び、学内開放また十七日午前九時から四時まで(但し経済学部に限る)十六、七両日にわたるやもしれず全学的に行はれ、真に綜合大学としての実を挙げべく目論まれてゐる、講演会および学内開放の詳細左の通り――

講演会

第一日 開会の辞、羽田総長^(註) 全体的国家観、渡邊宗太郎教授▽(医)小児を結核より守れ、服部峻治郎教授▽(工)全属材料の疲労、西原利夫教授

第二日Ⅱ(文)題未定、西田直二郎教授▽(理)極微の世界、湯川秀樹教授▽(経)未定▽(農)満洲の農業開拓、橋本傳左衛門教授

学内開放

法Ⅱ展覧を行ふ、詳細未定

医Ⅱ衛生学、薬物学、薬学、病理学、生理学微生物学、

法医学の各教室開放

工Ⅱ土木工学、機械工学、電気工学、採鉱冶金学、工業

化学、建築学、燃料化学、化学機械学の全教室並びに中

央実験所開放

文Ⅱ陳列館、史学教室開放

理Ⅱ動物学、植物学教室開放

経Ⅱ日本経済学発達資料展覧(法経第四演習室)

農Ⅱ農学、林学、農林化学、農林生物、農林工学の各教
(マツ)客開放

化学研究所Ⅱ研究業績展覧

〔以下略〕

五 学園の決意強し 十一日詔書捧読式挙行

一九四一(昭和一六)年二月二〇日

学園の決意強し 十一日詔書捧読式挙行

宣戦布告の大詔は渙発せられ、聖戦の大義はこゝに儼として昭示された、驕傲をほこる英米に対し、平和を冀求する皇国は隠忍自重して忍びざるを忍ふこといく歳、つひにこゝとこゝにいたつた、この時にあたり、国民の操志すでに不拔、忠誠勇武の精神は烈々として焼くが如き慨がある、しかして戦端ひとたび開かれるや、迅雷耳を掩ふに暇なく、雄渾壯絶の大絵巻は繰りひろげられて、東はハワイ諸島に、南はシンガポール、フィリッピンに、渺々たる太平洋上、わが正義の刃に抗するものなく、わが聖戦を妨げんとする英米武力の実際は今や世界に暴露さるるの現情にあり、有史未曾有の戦果は人類の幸福、民族解放への黎明をつぐる暁の鐘である、この時、本学においても詔書捧読式が挙行せられ、あつまる者、職員学生六千有余、聖寿万歳の声は紺碧の空高く響き、感奮せる国民的情熱は灼熱せる坩堝と化した

大詔渙発されてより三日、十日午後一時から本学の詔書捧読式が挙行された、前日の雨の後をうけてこの日初冬の空

は紺碧に澄み渡り白雲とくく飛んで陽に映ゆる大文字山を東に望む本部時計台下の広場に、職員学生六千有余が楠の木を中心に集つて来ると、羽田総長は各学部部長を後に、大日章旗かゝやく本部階上の露台に現れ、報国隊長の号令で宮城遙拝の後、謹んで詔書を捧読

つゝいて学生に別項の如き告辞を与へ、英米の東亜民族搾取の暴戾不遜な態度を難じて、皇国の使命と正義を説き、このたびの大戦果を祝福し、終にのぞみ学徒がかゝる事態下にあつて、この光栄に感奮するとともに、沈着、真摯にその職分の一層全きを期すべくますゝ努力することをのぞんで力強く結んだ、最後に総長の発声で一同万歳を三唱しておごそかに式を閉ぢた

大詔を拝し奉りて 羽田総長訓示

亜米利加、英吉利両国に対する宣戦の大詔はつひに渙発せられたのである、しかし、つひに渙発せられたのである、この覺端をひらくにいたつた事情については、大詔の中に昭かに宣はせらるゝ、通り両国が東亜の禍亂を助長し、平和の美名にかくれて東洋制覇の非望を逞しうせむとし、与国を誘うてわれに挑戦し、経済断交を敢てして帝国の生命に脅威を加ふるにいたつたがために、帝国は自存自衛のために斷然として起つの外なきにいたつたのであり、この間両

国に対して東亜の平和、人類の福祉のために、わが国の隱忍と自重のかぎりをつくした交渉の有様は、一昨日わが内閣総理大臣ならびに外務省の発表によりて示された如くである、その暴慢と老獯とはすでにいくたびわが国民の義憤をして迸ばしらしめ、破局を招致せしめようとしたことであらうか、人類の最大不幸といふべき慘憺たる戦を演ずるには当らぬ互の国民をして、つひに戦はざるべからざる運命に導き入れたものは実にかれらのかゝる反省なき専横恣意に帰せなければならぬ、しかもわが隱忍と自重とは、ひとりかゝる最近の事情においてのみ見出されることではない、たとへば今次の局面に直接連関せる満洲事変、少くしかのばれば九国条約の締結、亜米利加における人種差別の移民問題、さらに遠くさかのばれば国交開始を浦賀にせまつた黒船の脅威等、皆その専恣暴慢の發露であつたにかゝらず、百年以来彼我の外交史上においてよく平和の跡を印し得たのは、一にわが国が大局のために、敢て非憤の情を抑へた隱忍自重のつくり出した結果に外ならないのである、既往百年におけるかゝる尊きわが犠牲の態度はつひにかれらをしてこれをわが屈從的習性に見あやましむることとなり、その富厚の威力をもつて臨めば、またこれを屈服し得べしとなして、這回も压迫暴慢を敢てするにいたつ

たといふべきで、わが国に対するその伝統的政策のあらはれたものに外ならぬ、憫むべし、溫柔のみが君子の特性ではなく一たび尊厳なる存在の脅かさるゝに当つては、万邦無比の国体と、父祖伝来の熱血とに生くるわが国民の一人一人が、敢然蹴起して万夫不当の勇を発揮することを料り知ることの出来なかつた懦弱の敵からであつたといはねばならぬ浦賀の脅威以来ほとんど百年、重ね重ねの隠忍も自重もこゝに破れて、今つひに宣戦の大詔は渙発せられたのである、鬱積せる悲憤のほとばしるところを見よ、われらの海陸の将卒われらの親愛なる骨肉子弟は大御稜威のもと勇躍して布哇に香港に比律賓に馬來に、或は山の如き艦船を撃沈し、或は鉄の如き城塞を粉碎し、宣戦初日の序幕においてすでに敵の心胆を寒からしめてゐるではないか、勝利は戦の直接の目的である、われわれは今後勝つて勝つて勝ちぬかねばならぬ、帝国の厳然たる存立のために、また、かつて劣等文化の人類として、かれらの暴虐あくなき爪牙にかけられ、搾取の対象に立たしめられた東洋諸国の民族と国土とのために、あらたなる秩序の建設をさげんで起つたわが帝国は、終局の勝利によつてその理念を実現しなければならず、その遂行こそは、東洋の天地においてたゞひとりわが国民のみが任ずる無類の光榮である、しかしな

がら思へ、敵はその富厚と強大と文化との優位において、古今に絶する世界の双壁と認められてゐる兩國である、万夫不当の勇ありといへども、これを屈すること必ずしも容易ではない最後の勝利をあぐるためにはながい歳月と、不撓の精神と、万全の用意とを要すること言をまたず、一時の興奮にかられた思慮なき行動はもとより功を成す所以ではない、今や戦は單なる戦場の戦ではなく、政府当局も、また諸子に対しては私からもしばゞ説示した如く、わが国民のすべてがおのゝその職域において敢闘、死闘しなければならぬのであり、国民のすべてに更めてこの覚悟が固められることこそ現下の最も重要義といはねばならぬ「朕が陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ朕が百僚有司ハ励精職務ヲ奉行シ朕が衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ億兆一心國家ノ総力ヲ拏ケテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ」

と宣はせられたのは、すなはちこの道を教へさせられたものに外ならぬ、諸子、私不肖なりといへども、わが教官各位、職員各位とともに、この時局に際し誓つておのゝその職務とするところに懸命に邁進し、諸子に対しては諸子がその本分をつくすべき指導に任じて、上聖明に応へ奉る覚悟をあらたにするものである、諸子またよく聖旨を奉体

し、あらためてその本分を自覚し、いたづらに興奮することなく、沈着に、冷静に、しかしてあくまで真面目に、學術の研鑽、精神の修養、体力の養成に功をつむべき諸子の戦線に奮闘しやがて業成りてその修めたる学才と精神と体力とをもつて、或は軍伍に入りて、或は社会に立ちて、国家に奉じ、かしこくもとくに垂示あらせられた聖慮にそひ奉るべきを期せねばならぬ、こゝにこの詔を拝するに当り、とくに訓示して諸子の奮励を希ふ所以である

六 大東亜戦争一周年記念事業

〔三三〕
一九四二昭和一九年二月五日

大東亜戦争一周年記念事業

大東亜戦争勃発してここに一ケ年、再び感激の日はめぐり来つた、御稜威のもと皇軍の武威いやが上にもあがり、いまや戦線実には広袤一万キロ、世紀の大決戦は一億民草の牢固たる決意のうち断乎として戦ひつづけられてゐる、学園もこの間凜然たる決意を以て日に月に統後学生の負荷の大任を完うすべく孜々として戦ひつづけて来たのである、工学部人員の増加、航空工学科の新設をはじめとし、法学部では法学教育再検討の見地から学年制へと制度的改革を断

行、経済学部は外国語に対して自主的批判的態度を確立し以て従来の翻訳的態度から脱却した、さらに文、理、農、工の各学部には相ついで南方研究会が設立され、その科学陣の精銳をあげて南方問題への真摯な研鑽に邁進してゐる、また一方学生にあつても完全に報国隊が組織化され学内のみならず学外へも国土防衛の赤誠に燃えて出動、所期の効果をあげる等過去一ケ年の学園の動きを回顧するとき決戦下生徒の覚悟のほどは各分野を通してうかがはれるのである、今や大詔を拝し奉りて一周年、あの日あの時の感激は再びめぐり来つた、あの日の感激はわれら六千の学徒が終生忘れんとして忘れ得ぬ想ひ出である、悠久二千六百二歳の皇国の使命達成のため、わが歴史と伝統の名譽にかけ一時の偷安もなく一人の懈怠もなく最後の勝利の日まで戦ひ抜かねばならぬ、思へば十二月八日、この日こそ皇国がその運命をかけた日であり、新しい世界史創造の日であつた、われらはこの創造の榮譽をもつ、この創造はわれらの手でなされねばならぬ

再び来たる十二月八日 感激更に新たに詔書捧読式
挙行

大東亜戦争一周年記念日たる十二月八日当日は午前九時か

ら本学運動場において宣戦の詔書捧読式ならびに学生の分列式が挙行される、式は国民儀礼をもつて始められ、まづ宮城遙拝、黙禱についで君が代斉唱の後、羽田^(羽)総長が宣戦の詔書を捧読、終つて学生の分列に移り深紅の学旗を先頭に全学生堂々の行進が行はれ、過ぎし開戦の日の感激を新たにすることになつてゐる、また式後は職員、学生代表が平安神宮に参拝して皇軍の武運長久を祈願し大東亜戦争の完遂を誓ふはづである、なほそのため当日は午前中の授業は休止されるが、雨天の場合は平常の通り授業がある

六日 記念鍛錬強歩大会

十二月六日(日)本学運動場出発、山中越による近江神宮間往復約十八軒によつて行はれる、当日は午前八時十分出発点に集合午前八時卅分出発、神宮拝殿で国威宣揚祈願ののち、往路を引返す、三時間五十分以内に帰着したものには褒賞が授与せられる、一組五名を単位として、いはゆる競走に流れずどこまでも恒久的な鍛錬に終始することを眼目とする、なほ当日神宮で一人に一体ずつ護符が授与せられる、これは鄭重に捧持して前線の慰問にあてられる、全員帰着とともに参加の教官学生打揃つて、運動場で野戦料理の昼食をとり、はるかに前線を偲ぶ

申込を受付けてゐる同学会事務室では、従来の強歩大会

の常連以外の応募が多く文学部田中教授をはじめ、教官の申込も相当に多く、師弟相ともに初冬の山道を行く学徒の意気また昂然たるものがあるであらう

慰問葉書郵送(皇軍将士へ)

学生課では支那事変以来しばしば皇軍将兵へ慰問文の発送を行つて来たが、今回大東亜戦争一週年記念事業の一つとして皇軍慰問葉書の発送を企画してゐる、その方法は慰問用私製葉書(切手代は本学負担)を学部事務室で受取り、慰問文をしたため本日まで学生課又は学部事務室に差出せばよい、本学では十二月八日附の郵便局消印をもつて発送する、受信人は現役応召軍人及び軍属、発信人は本学教職員学生々徒にかぎるが住所姓名を明記されたい、学生課では第一線将兵と銃後を結ぶこの企画に全学生こぞつて参加することをのぞんでゐる

七日 開戦前夜を想ふ会

前夜に偲ぶ押し迫る緊迫感、わかき学徒の胸をうち揺がし決意又自ら新たなものがあらう、同学会では、とくにその前夜をふらんで、記念の講演と映画の集りを開いて学徒の心構へを新たにしようとする、すなはち十二月七日午後五時半法経第一教室で開会、厳肅な国民儀礼ののち、朗読の第一人者金谷熙氏によつて「大詔奉戴」の詩が朗読せら

れ、全員の大合唱「海行かば」がこれに和する、つづいて前紐育支部に在勤して第一回交換船で帰朝された大阪毎日新聞社経済部次長西島捨丸氏が、思ひ出も生々しく「その日の紐育を語る」と題して、開戦前後の感慨を語られる、終つて舞鶴海軍鎮守府から特に派遣せられた映画班によつて、海軍所蔵の映画が公開せられる

そして再び金谷氏の詩の朗読「必死の時」があり、聖寿の万歳を奉唱して意義深い会がとぢられる予定である、一方同学会中央委員において、当夜を期して学徒の日常に一層の意義をもつ計画が企てられ、常務委員会等でも議せられつつある、開戦第一周年を迎へて学徒のよりある遅い意気が今から予想せられてゐる

四 学徒動員

一 春陽あびて勤勞奉仕始まる 先づ運動場の修理から

(三三)

一九三九(昭和十四)年四月一〇日

春陽あびて勤勞奉仕始まる 先づ運動場の修理から
一昨年来大学生自身の生活が社会的批判の俎上に今更なが

らのせられ始めた時に提唱され来つた勤勞奉仕運動は時流にのり、学生の社会的活動の具体的参与として多大の貢献と効果を期待され各学校競つて蒼穹と大地との間に自然を呼吸し学生青年の意気を示したが本学当局はこの運動を学生自身の内部より発生してくる熱意と相俟つて初めて完全なる効果を産むといふ見解からその実施方法を熟慮中であつたが、最近漸くその具体案を得て次の如き発表となつた

作業場所 農学部校内グラウンド修理

同日時 四月十一日、十二日、十三日三日間毎日四時間

集合 午前九時半グラウンド合宿所前

服装 作業に適する軽装

食事 用意あり

講義の始まらない前の学生の余暇を十分に利用しまさに国策的体位向上に必要な運動場の修理と出たあたり学生課も得意であつた、さてフタをあけてみると何分はじめてのこととて参集学生の数はいさ、か少かつたが、日を追ふて増加すること期待されてゐる、この日絶好の晴天にめぐまれ、春の朝陽は意外に強く比叡の山が美しすぎる作業場を視察にきた長崎^大学生課長はまぶしさに

御覧のやうに数はいさ、か少いが、けふはまだ学生が出

揃ふてゐないからでせう
と語つた

二 報国隊規則

〔六〕
達示第二二号
一九四一（昭和一六）年九月一日

京都帝国大学報国隊規則

第一 名称

第一条 本隊ハ京都帝国大学報国隊ト称ス

第二 目的

第二条 本隊ハ今次ノ非常時局ニ際シ学徒ノ本分ヲ自覚シ
テ本学ノ防衛ニ当リ必要アル時ハ国家ノ緊急要務ニ服シ
以テ義勇公ニ奉ズルヲ目的トス

第三 隊員及指導者

第三条 本隊ハ京都帝国大学学生及生徒ヲ以テ隊員トシ教
授、助教授、配属将校、教練教師、学生主事及学生主事
補等之ガ指導ノ任ニ当ル

第四 任務

第四条 本隊ハ第二条ノ目的ヲ達成スル為ニ左ノ任務ニ服
ス

一、非常事変ニ対処スベキ心身ノ訓練ヲナスコト
二、非常事変ニ際シテハ京都帝国大学防衛団ニ配属シテ
学内ノ防衛救護及警備ニ当ルコト

三、事宜ニ依リテハ学外ノ非常警備及救護ニ当ルコト

四、其他緊急ノ事態ニ対スル適宜ナル行動及措置ヲ執ル
コト

第五 編制

第五条 本隊総長ハ京都帝国大学総長之ニ当ル

総長ハ本隊ヲ統率ス

総長事故アルトキハ先任学部長之ヲ代理ス

第六条 本隊ハ隊本部及各学部毎ニ編成スル学部隊ヨリ成
ル学部隊ハソノ隊員ノ数ニ応ジ若干ノ大（中）隊ヲ編成ス
学部隊ノ編成ノ基準ハ別ニ之ヲ定ム

第八 職員

第七条 隊本部ニ委員ヲ置ク

委員ハ京都帝国大学各学部長、配属将校、及学生主事ト
シ総長之ヲ委嘱シ又ハ命ズ

委員ハ総長ニ隸シテソノ命ヲ承ケ本隊ノ企画統制ノ任ニ
当リ且ツ事宜ニ依リテハ隊員ノ指揮ニ任ズ

第八条 学部隊ニ隊附ヲ置ク

隊附ハ京都帝国大学教授、助教授、学生主事補、教練教

師等トシ総長之ヲ委嘱シ又ハ命ズ

隊附ハ各学部隊ニ配属シ隊員ヲ輔導ス

第九条 各隊長ハ隊員中ヨリ総長之ヲ命ズ

隊長ハ各上長ノ命ヲ承ケ隊員ヲ指揮ス

第十条 本隊ノ事務ヲ処理スル為嘱託若干名ヲ置キ京都帝國大學職員中ヨリ総長之ヲ委嘱ス

附 則

本規則ハ昭和十六年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

三 防火に警戒に目覚し報国隊の活躍 学徒の真面目を發揮して

〔三三〕

一九四一（昭和一六）年一〇月一〇日

防火に警戒に目覚し報国隊の活躍 学徒の真面目を發揮して

独蘇戦もいよ／＼終局に近づき緊迫せる世界情勢のもとにおいて東亜新秩序建設に邁進しつゝ、あるわが国の前途は内外ともに多事多難未曾有の国難打開のためには全国民の戦時体制化があらゆる方面において完全に遂行されなければならないがことに近代戦の中心たる防空訓練がまず第一に要請されてゐるこの意味においてさる十二月より全国にわたつて実施された防空訓練は、全国民各自によつて遂行さるべきで、ひとり学園のみが時流をよそに超然たりえないのは当然であるとともにさきにその結成をみた本学報国隊では日頃の訓練を發揮して学徒隊の真価を示すべくさる十二月より各学部別に下消防署管下の各部署に出勤して灯下管制下の闇の街の防火に警戒に活躍し臨戦体制下の学徒らしき真摯な力強きその働きは消防署員始め市民の絶讃を博し学徒としての真面目を發揮した

たつて実施された防空訓練は、全国民各自によつて遂行さるべきで、ひとり学園のみが時流をよそに超然たりえないのは当然であるとともにさきにその結成をみた本学報国隊では日頃の訓練を發揮して学徒隊の真価を示すべくさる十二月より各学部別に下消防署管下の各部署に出勤して灯下管制下の闇の街の防火に警戒に活躍し臨戦体制下の学徒らしき真摯な力強きその働きは消防署員始め市民の絶讃を博し学徒としての真面目を發揮した

まづ十二日勤務部隊のトップを承つて法学部一（マ）回生は午後二時半東本願寺境内に集合し、下消防署管下の各部署に配属され、消防団員に交つて防空下の街に目覚しく活躍した、ポンプを押して消火に従事するもの、防毒に活躍するもの、見廻りにあたるもの、いづれも慣れぬ仕事ながら消防署員の指導に従ひ熱心に働く整然たるその活動は流石最高学府に学ぶ学徒として恥かしからぬものであり夜に入つては灯火管制下の闇の街に、警戒に目覚しき活躍をなし、市民の感謝の瞳に送られて第一日目は予期以上の成果をさめて引上げ、続いて翌十三日は法学部二（マ）回生、十四日は理学部全部、十五日は文学部全部、十六日は経済学部第一回生、十七日、十八日両日にわたつて工学部全部、十九日には経

済学部二回生と、いづれも初日におとらぬ目覚しき活躍をつゞけ、報国隊結成の精神にそむかぬ成果を挙げ、非常時下学徒の真面目を遺憾なく發揮して十日にわたる訓練を終へた、なほ附属医専部隊は十七日から十九日にわたり八坂消防署の管下において訓練を終へた

(長崎太郎)
何もうふことはない 学生課長談

防空演習中の報国隊の活動については私から何も申上げることはない、何となれば私が学徒はかくあれかしと望んでゐた通りを皆やつてくれたからだ、どの学部もおの／＼の部署で署員の指導によく従ひ全く未知な仕事にも拘らず、警防団員以上の成績を挙げ、学徒の真価を發揮し一般の学生に対する認識を改めさせた、とに角實際を見れば一目でわかることだし今さら私が喋々するまでもないことだ

学内防火演習 十六日・法科生を動員して

一方学内においても十六日午校三時(午後)から法学部一、二回生を動員して庶務課に演習本部を置き対空監視および防火訓練を実施した、すなはち午後三時正門内側に集合、人員点呼、服装検査の後団長より全隊員に用務を指示し、第一班は本館建物の監視、防護、第二班は営繕課管理課および学生課建物の監視、防護、第三班は電話室、自動車ガレージ

および倉庫の監視、防護と各班はそれ／＼部署につき後演習を開始、対空監視と消火演習が終始真剣に行はれ、大成功裏に五時過演習を完了、内田中佐(益次郎)の講評あつて訓練を終へた

四 報国隊二度目の出勤

一九四二(昭和一七)年二月五日 [三三]

報国隊二度目の出勤

大東亜戦勃発後の初の防空演習に学生補助隊として、本学報国隊に第二回目の動員令下り、一月二十日から廿六日まで、午前九時三十分以下消防署ならびに八坂消防署に配属され、午後四時すぎまで、消火演習の補助隊としてガソリンポンプの操法や、ホースの取扱ひ等を手伝ひ、二度目のことゝ、めき／＼と腕を上げ、警防団や街の人々から絶讃を博した

なほ連絡班の組織も決定し一月末日までに各学部別の連絡カードの提出も終つて報国隊は文字通り整備され来るべき日に備へて張り切つてゐる

五 報国隊動員態勢全し 連絡班員、集合場所決定す

〔三三〕

一九四二(昭和一七)年四月二〇日

報国隊動員態勢全し 連絡班員、集合場所決定す

昨年十月四日時局の要請に應じて本学報国隊の結成せられてより、すでに半歳、その間二回にわたり防空演習に参加するなど目覚ましい活躍を続けて来たが、十二月八日大東亜戦争の勃発するや、報国隊本部では不時の事変に臨んでさらに報国隊の機能を遺憾なく發揮せしむべく、いち早く全隊員をして連絡カードを提出せしめ地域別連絡班の編成に着手するなど、動員態勢の整備を急いでゐたが、このほど連絡員の決定も終り起り得べきあらゆる事態に應ずる動員態勢がほぼ完成されることとなつた

すなはち本学報国隊の出動は次の三つの場合である

(一) 万一警戒警報又は空襲警報発令せられたる場合

警戒警報発令せられたる場合は空襲警報又は指令に備へて出動の準備をなし置くこと、空襲警報発令せられたる場合は直ちに原則として次の場所に集合すること

法学部隊は本部正面玄関前、医学部隊、医専部隊、文学部隊、経済部隊、農学部隊はそれぞれ各学部事務室前、

理学部隊、工学部隊は各所属教室前(但し指名せられ居るものは工学研究所前)

(二) 非常召集の場合

この場合は警戒又は空襲警報発令せられざる非常の場合に適用せられるもので、さる十一日午後一時から学生集会所で、配属将校佐藤大佐^(奥徳)、長崎学生課長^(大徳)、以下各学生主事、および新たに任命をみた連絡員学生七十三名出席して、その動員組織に関する第一回打合せ会が開催せられ本部側提案の説明後、その組織運用に関して熱心なる打合せが行はれたが、席上発表せられたる地域別連絡班の組織は左のごとく、非常召集の場合、動員されるのは第一連絡班で、命令は報国隊本部、連絡班本部、寄宿舎生、各班責任者、各班連絡員、各班員と順次に伝はり、各自所属学部所定の場所に集合して平常の命令体系に従つて次の行動をおこすこの第一連絡班に所属する地域別班名左の如し

近衛、本町、上中大路、下大路、二本松、神楽岡、吉田、南西部(泉殿、牛宮、上阿達、吉田北西部(関田、下中阿達、橘)の各班(以上吉田町)平井、小倉久保田、追分、上終、西町、葛町、伊織、別当、池田仕伏の各班(以上北白川町)田中北部(樋ノ口、大久保、古川)高原、飛鳥井、春菜、田中南部(大堰、上柳下柳)田中北西部(野神、里ノ前、

里ノ内、門前、玄京の各班(以上田中町)南田、西田、馬場、石橋、真如の各班(以上浄土寺町)銀閣寺班、鹿ヶ谷班、岡崎北部班(黒谷、真如堂前東西福ノ川)聖護院班
(3)通常召集の場合

召集さるべき時があらかじめ判明せる場合で、この場合には第二連絡班が動員せられる、第二連絡班に所属する班名左のごとし

岡崎南部(田勝寺、法勝寺、最勝寺、東天王、南北御所)南禅寺、下鴨高野、一乗寺、修学院山端、上京、中京、下京、右京、東山、伏見、その他各班

六 泥と汗にまみれて 報国隊貯水池工事に出動 〔三三〕
一九四三(昭和一八)年五月五日

泥と汗にまみれて 報国隊貯水池工事に出動

既報のごとく本学報国隊の出動による貯水池工事は四月二十日の工二回生の出動から始つた各学部の出席率は不明であるも敵機撃退一周年記念の緊張も新たな学生は花見時の浮れ心をよそに、持ちなれない歟で手を豆だらけに、泥まみれになつて四月の一日を勤勞の喜びに耽つた、まだ人通りの少ない正門広場に集合した学生は総長の訓示を伝へら

れ、市防衛部の指揮下に配陣、近くは本学の町吉田近郊から遠くは烏丸西大路祇園の方面にまでケートルと教練服に身を固めて出動「諸君は学徒としての最高の任を荷ふとともに他方国民の一員として国土防衛に死力をつくす責を有す」との総長の訓示はこゝに実践せられたのであつた、勿論専門的な工事にはたずさわらなかつた、粘土運搬、粘土粉碎、モツコかつぎ、地かため等々学生の日常生活から推せば無理もある仕事を泥まみれになつて市関係の人や町内会の人々と一体になり午前九時午後四時迄の勤勞に尽したなほ各学部の出勤期日は左の通り

四月二十日(工二) 二十一日(経三) 二十二日(法三) 二十
六日(経二) 二十七日(経二) 二十八日(法二) 五月三日
(理一二三) 四日(農一二) 五日(文一二) 六日(医専二
三)

七 のべ七千名を動員 九月の報国隊勤勞出動 〔三三〕

一九四三(昭和一八)年九月二〇日

のべ七千名を動員 九月の報国隊勤勞出動

本学報国隊は七月中に防空訓練を実施し、学園鉄桶の陣を堅めるとともに、ついで公共待避壕構築のため出動、泥と

熱汗にまみれて予定以上の作業量を示し好成績を収めるところがあつたが、現下の緊迫せる戦局は試験終了後と雖も直ちに報国隊員の出勤を要請しこゝに九月中にのべ約七千名の動員を行ひ、草刈作業と薪運搬作業に出勤することになり薪運搬作業はすでに六日から十二日にわたり実施されるところがあつた

草刈作業 本作業には約五千五百名の動員が行はれる予定で十八日(土)から二十二日まで五日間実施されるが、十八日は法、経の一、二回生、十九日は同じく法経一、二回生、二十日は医学部一、二、三回生及び理学部一、二回生、二十一日は工、理、農学部一、二回生、最終日は医学部一、二、三回生、工、農学部一、二回生となつてをり、各日とも八時三十分新京阪桂駅前広場集合、乗車券は新京阪四条大宮改札口で交付される、雨天の際は順延されるがその旨を本学および新京阪四条大宮駅入口に掲示されることになつてゐる、場所は府下乙訓郡大枝村、事故あるものは前日まで各学部事務室あて届出を要し、病気のものは医師の診断書を添付すること、弱者は免除されるが、ともかく各学部二回づつの出勤となつて次第に強化されて来る状態にあるが経済学部では外国人留学生に対しても特別の場合

を除き参加せしめ、以て同甘共苦を実践することになつた薪運搬 本作業は六日(月)から一週間実施、十二日好成績を以て終了したが場所は三ヶ所に分れ府下船井郡下和知村、南桑田郡保津村、同東別院村、各日共七時四十分二条駅前集合目的地向ひ午後五時過ぎ二条駅着帰学したが学生食堂でもお腹を空らした出動員のため特に営業時間を延長して大いにつくすところがあつた、出勤人員は文学部、医専の約一千三百名

六日は下和知に医専一回生東別院に医専三回生と二手に分れて出勤、七日も同じく二班に分れ文学部史学、文学科一、二回生は下和知、医専二、三回生は保津、八日も同様文学部哲学科一、二回生は下和知、医専一、二回生は保津、九日からは下和知のみで九日文の史、文学科一、二回生、十日文の哲学科一、二回生、十一日文の史、文学科一、二回生、十二日の最終日は文の哲学科一、二回生であつたが未来の文学者、哲学者達は営々として五キロの山道を運搬きびしき残暑のさ中で勤労の深い歓びを体認するところがあつた

八 開墾、草刈に出動 報国隊増産推進に輝く成果 〔三三〕

一九四三(昭和一八)年一〇月五日

開墾、草刈に出動 報国隊増産推進に輝く成果

現下戦局の要請は学徒の勤勞奉仕を益々要請し□さきに夏
休中にもかかわらず薪運搬に出動した本学報国隊はその□
引きつづき十八日から二十二日まで乙訓□みれ毎日郡大枝
村京都農林学校実習林で利鎌を振つて草刈奉仕を行つたが
各日とも午前八時半新京阪桂駅に集合して現地向ひ約五
時間にわたり行学一体の境地に徹して聖汗に約三万貫の大
収穫を得て午後三時半作業を終了した、大枝村当局でも各
部落から責任者を出して指導にあたり且つ一家一人づゝ及
び女子青年、婦人会幹部らも出動協力するところがあつた
ついで報国隊は京都府、京都市の要請に基き二十一日から
三十日まで大徳寺裏の二千七百坪の竹藪開墾に出動したが、
同竹藪は従来から開墾を要望されてゐた土地で本学報国隊
の手で見違へるやうに開墾、増進推進の輝かしい役割を果
たした

(芳之助)

八木学生課長も戦闘帽、巻脚絆の凛々しい姿に例の温顔
をみせて参加、隊員とともに鍬を揮つた尚出動割当は第
一日法一回生、第二日法二回生、第三日経一回生、第四
日経二回生、第五回工一回生、第六日工二回生、最終日

は農、理の一、二回生であり今回も前回同様嚴重な出欠
がとられた

九 勤勞奉仕 寒風の中、土に挑む 十日から湖国へ増産

援兵 一九四四(昭和一九)年一月二〇日 〔三三〕

勤勞奉仕 寒風の中、土に挑む 十日から湖国へ増
産援兵

「残留学生また戦へり」法文系学徒を戦陣におくり既に一
ヶ月をへた本学では学期あけの十日早くも滋賀県の要請に
もとづき増産援兵として報国隊を出動、寒風吹きすさぶさ
中土と闘ふ増産完遂に総進撃の鍬を揮つた今度の奉仕は前
期と後期に分れ、前期は十日から十九日まで後期は本二十
日から二十九日までとなつてをり、前期には文学部各回生
医専一、二回生合計二〇八名が文学部松村助教松本学生
主事に引率され出動後期は法、経各回生が出動するが場所
は何れも滋賀県野洲郡篠原村小南、大篠原、小堤、兵主村、
六条、井口、堤、中州村、吉川、小津村杉江及び野州町竹
生の一町四個村にわたつてゐる、作業は連続十日間の宿泊
によつて行はれ、起床は毎日六時半、点呼宮城遙拝、黙禱、

体操の後七時から食事、八時から十一時半まで作業それから一時間の昼食で此昼食は兵主村を除いては作業現場で行はれ十二時半から四時半まで再び作業、四時半から一時間民家で入浴六時から七時五十分まで休養時間この間に座談会等の催しが行はれ七時五十分から八時までに点呼消灯となつてゐる

宿泊場所は附近の公会堂、寺院が利用され、作業の種類は用水路区画整理、客土、暗渠排水、溜池底堀、^(マ)棄土、

農道改修、開田、排水路修理などの食糧増産のための土地改良作業である

前期出勤報国隊は到着当日それぞれの町村の氏神神前ににおいて厳肅裏に入所式をあげ敢闘を誓ひその翌日から作業に従事したが請入側の地元町村でもこの増産援兵の中にまだつてそれ〳〵活動する^(マ)とも兵站部を受もち両者一個となり多大の成果をあげるところがあつた

なほ後期出勤の法、経各学部は十八日午後三時にそれ〳〵集合学部長より今回の奉仕重要意義を指摘、諸般の注意を与へるところがあつた、とくに今回は欠席は学部長の承認を要することになり、また留学生も共に同甘共苦の敢闘を誓ふところがあつた

一〇 報国隊第二陣出勤 烈々、戦線に続く気魄 〔三三〕

一九四四(昭和一九)年二月五日

報国隊第二陣出勤 烈々、戦線に続く気魄

滋賀県下における食糧増産計画の一部として着手せられた農地改良工事に対し、同県から発せられた在洛各学校学徒三千名動員の要請に応へ本学報国隊の出勤が命ぜられたことは既報の通りであるが、隊員はそれぞれ各隊附教官の指揮の下に文字通り風雪の二十日間の奮闘を了へて元氣一ぱい二十九日全員無事帰学した、今回の出勤は法学部一五二名、文学部四三名、経済学部一二五名、医専一六五名合計四八六名で湖東野洲篠原を中心とする小南、大篠原、小堤、六条、井口、堤、野田、吉川、杉江、竹生の諸字に分属した、宿舎は概して寺院が多く日課は午前六時半の起床に始り朝礼朝食を了へて八時の作業開始とともに伊吹嵐と比叡風の交錯する耕地や溜地の土に挑み、霜融けの泥濘に円匙を振ふもの、泥土をトロツコで運ぶもの、中には水を破つて二尺に達する水中に入つて排水工事に従ふもの等文字通り前線につづく気概のもとに作業が続けられ、四時終業は時として延長せらるるなどあますなき敢闘がつづけられ夕食入浴の後九時点呼消灯といふ日課であつた、机をならべた友を前線に送つた学徒の気魄は、その厳正な規律ある行

動とともにいたく現地の農民の胸を搏ち予定以上の作業の遂行はもとより精神的に現地に与へた刺激の大きさは当局者から心よりの感謝を捧げられたのであつた、一方かうした勤労の間には貰ひ風呂に数名づつ農家に出かけカンテラの火の下の入浴を終へて渋茶をすすりながら心づくしの煎豆に古老の話をたのしみ、産米供出や組合の運営談等戦時下の農村の生きた学問を身につけるなど数々の収穫を齎したのであつた

この出勤の成果について学生課を訪ねると陽灼けた頬を輝かしながら学生主事や主事補の諸氏はこもこも次のやうに語つた

厳寒の只中作業は慣れないものにとつては相当に難渋なものであつたが烈々たる気魄はよくその困難を克服し作業は飽くまで積極的であり行動はどこまでも規律正しく決戦下の学徒の真面目を発揮したのは欣快に堪へぬ、この結果が予定以上の能率を挙げたことは勿論、精神的に地方に与へた影響は大きく、地元の人達の間にあつた感情のもつれを解消させたやうな話まで耳にしたことは何よりのことであつた、殊に、各学部の教官が率先陣頭に立たれて学生とお寺の本堂に起居とともにせられ親しく与へられた指導の成果に対しては感激のほかはない、^(アツ)奨

来この種の出勤に対して現地との間になほ研究を要する点がないでもないが、学徒の気魄が一切を解決して行くほどに昂揚せられてゐることは病氣その他の事故の少かつたとともにこの上ないよろこびである

なほ学生課では今回の出勤の検討と^(アツ)奨来への示唆と用意のために関係教官学生の代表の参集を求めてさる二日西部構内畳室に懇談会を開き種々研究するところがあつた

一一 西に東に適性分散出勤 京大法・弱体学徒を落下傘 的配置 (三四)

一九四五(昭和二〇)年六月二一日

西に東に適性分散出勤 京大法・弱体学徒を落下傘
的配置

先に学徒総躍起大会を開き「我等に最難の部署を与へよ」と未曾有の国難に処する学徒の血の叫びを天下に表明した京大では大会を契機として各学部有志の間に積極的な運動の推進が議せられ活潑な動きを見せてゐるが、中でもその主流をなす法学部ではこの決意を現実の職域、地域に於て実践すべく残留学徒すべてが勤労働員に出勤することになり去る四月の新学期を期して適性分散配置についた

法学部では黒田学部長の下、決戦教育措置要綱によつて

一箇年間の授業停止が決定される以前に従来弱体の故を以て勤労を免除され学園に残つて受講してゐた所謂残留学徒に対しても勤労出勤が議せられ各々その適性に從つて能ふ限り戦力に直接寄与する実践活動に入る方針を決定してゐたが、これと学生側の希望が一致、その結果適性分散動員といふ画期的な動員計画が実行に移されることになつた

四月九日学部の壮行式において純潔の至誠を以て祖国の危難克服に挺身する決意を固めた学徒は抱負と希望に燃えて左の如く東に西に相去り相別れた

(一) 比較的健康に自信のある十名は石川県〇〇工場に挺身、そこに働く学徒の勤勞管理に専念しつ、側ら生産管理、工程管理にその智能と情熱を傾け直接軍需生産増強に邁進

(二) 京都市内に於いては裁判所検事局に八名、市庁に十四名が出勤、官僚主義の宿弊に一脈清新の氣を注入せんと期してゐる

(三) 大学内では教授の研究補助、研究圖書の整理、又勤勞事務の処理に当る者十五名が学内勤勞班として残留

(四) 地方分散―健康に恵まれない者で家郷にあつて療養

しつ、側ら自分に適した職場を得て動員目的達成に邁進する画期的な前人未踏の企てで配置先は実に多種多様で、一例をあげれば運輸省、府庁、県庁、役場、稅務署、警察署、農業會、商工經濟會、各種統制組合、軍需會社、中学校、農學校、新聞社等多岐に亘つてゐる

これらの動員の中核となる本部ではその精神的郷里として各配置先へ絶えず激励と慰藉を与へる仕事を担当、学内班がこれに當り、連絡會を開き、或は連絡雜誌を發行する等の試みによつて通信連絡を頻繁に行ひ、分散動員の意義と成果を高める様努力してゐる

これには更に黒田学部長以下、勤勞委員會を中心とする学部教官が絶えず温い愛と理解、期待と激励の眼を以て支持を与へて居り、とかくの論議や批評に耳を藉さず、ひたすら自らを銃後戦線の兵として、又国内思想戦線に於ける落下傘部隊と自称して黙々自己の信念を貫かうとして居り、京大法学部の動きは單に適性配置といふ学徒動員の重大観点からのみならずあらゆる意味で注目すべきものを投げかけてゐる

五 学徒出陣

一 志気昂揚に邁進 十九日「征途に誓ふ会」挙行 [三三]

一九四三(昭和一八)年一〇月二〇日

志気昂揚に邁進 十九日「征途に誓ふ会」挙行

一方学生課、同学生会主催になる試みは出征する〇千の学生を対象として企画され、総合的にあらゆる角度からみやびやかにして逞ましい武士道精神をより一層鍛ふべく講演会、祈願祭、戦技訓練等の行軍を予定してゐるが、すでに善波氏の講演「征途に誓ふ会」などを以て発足した

◇ ◇

十七日は同学生会主催の桃山石清水八幡における祈願祭が執行されたが、この日午前八時石清水楼門に参加者五百名参集、それより神前にすすみおそかに征途に出で立つ決意を報告、武運長久を祈願して桃山まで約十軒の間を意気揚々として行軍、正午ごろ解散した

◇ ◇

学生課主催のもと、十八日午後三時から法経第四教室で例の「弾巢」で一躍読書界に知られるにいたつた文学部善波

周講師の「征で立つ人に」と題する講演が行はれた、の身体氏は氏の生命の息吹そのものともいふべき深い体験談を今や晴れの入営を待つ満堂の聴衆に向つて諄々として、語るところがあり戦闘精神と深い思索が美事に結合され、後輩への暖い心づかひの言葉を以て五時頃会を閉ぢた

◇ ◇

学生出征を記念すべき同学生会主催「征途に誓ふ会」は十九日午後六時半から法経第四教室で開催

先づ国民儀礼の後羽田会長(亨)の壮行の辞に移り、会長起つて出征学徒の武運長久を祈り米英撃滅に邁進せんことを希望

ついで入営生代表法三回生島田政雄君、征で行くものの牢固たる決意をつけ、これに対し在校生代表として農三回生平泉鎮君からの送別の辞を述べ、終つて「大東亜戦の意義」と題する高田保馬教授の講演に移つた、最後に全員「海ゆかば」を斉唱、解散した

◇ ◇

学生課では川田順氏の来学を乞ひ来る二十一日(木)午後三時から法経第四教室で特別講演会を開く大住友の柱石として縦横の活躍をとげた同氏は又歌人として烈々の気概を詠じ、その作品に対しては昨年帝国芸術院賞が授けられた、

征途に上る学徒のために、今回はとくに「生死と歌心」といふ主題があらばれた、国難に赴く学友への心の糧として多数の参加が予想せられてゐる

又恒例の尊攘堂大祭の記念講演として一方松陰精神の明確な把握を意図して学生課では吉田松陰に深い理解と造詣とを持つ広島高等師範学校の玖村敏雄教授を聘してその蘊蓄をきくこととなつた、この特別講演は二十三(土)午後三時から法経第一教室で行はれ、席に余裕のあるかぎり学外からの傍聴も許されることとなつた、主題は本項締切までには未定であつたが松陰精神の精髓が語られるものと期待せられてゐる

二 本学決戦体制 教練、行軍に重点 出陣に備へる健兵教育

一九四三(昭和一八)年一〇月二〇日

本学決戦体制 教練、行軍に重点 出陣に備へる健兵教育

秋漸く深くして学徒出陣のとき迫る、君国の大事に従容祖国の難に挺身する約〇千の本学学徒の入営を前にして本学当局では来る廿五日から来月五日までの徴兵検査期間をの

ぞく五週間の期間をこの際最も有効適切に活用すべくかねがね羽田^(子)総長を中心に関係各学部長、教授、学生課、同学会など慎重協議中のところ遂に九日結論に到達、この十三日(水)から法経文および農の一部は一斉に午前中を講義によつて、午後は講義を全廃して心身の錬成に邁進、心身両面よりする十全なる入営準備を行ひ緊急事態に即応することとなり、さる十一日(月)には各学部ごとに学部全学生を一堂に会し学部長から今回決定をみた教育体制の戦時切替への真精神及びこれに対する具体的措置を詳細に説明、全学一致学徒に与へられた輝かしい栄光に副ふべく誓ふところがあつた、その要点をあげると左の通り

先づ法、経、文および農の一部は授業は午前中のみ、午後のはこれを錬成にあて、十月一日から開講の午後の講義はさる十二日を以て一応打ち切り、これを適当に按配して午前に切替へを行ひ、学部別、学科別にそれぞれ教授の自由裁量によつて一年ないし三年間に修得せらるべき学科を五週間に圧縮その精髓を把握せしめる、一方錬成は主力を軍事教育にあて、時間割は従来毎週一回二時間のものに毎週一回四時間(連続)を加へ従来の三倍量とし、戦技訓練を加味、同時に学生を健康状態によつて甲乙丙の三段階に分ち、そ

れ、適切な指導を行ひ、行軍錬成については学部別に教官総動員のもとに学生を引率、従来欠けてゐたとみられる行軍力養成のため教官、学生一体となつて戦闘隊形を以て強行訓練を展開することに決定、法学部はさる十二日、経済学部は十三日、文学部は十五日、農学部の一部は十八日からそれぞれ実施、まづ法学部では教授、助教授等指導のもとに午後一時から護国神社、上賀茂神社に参拝、一方一部に体操実施、植物園におけるグライダー練習を大雨にあらざるかぎり実施、雨天の日は教室にて入隊に必要な事項に関する講義を行つた、経済学部でも十三日午後一時から谷口部長統轄のもとにまづ行軍要領を与へ終つて上賀茂、護国の両社に参拝行軍を行つたが、はじめは緩慢に、後は次第に強行軍といふ趣旨で行はれ、到着地において出席をとり、不参加者はあらかじめ正規の届出を要するなど厳重な行軍錬成を秋晴れの空のもとにくりひろげ、雨天の日は法学部同様教室で教練の講義を行ふところがあつた

三 学園残留者は二割強 本学文科系学生の調査なる

〔三三〕

一九四三(昭和十八)年一月五日

学園残留者は二割強 本学文科系学生の調査なる

臨時措置にもとづき本学においても法文系学生の殆んど全部の入営入団をみるはずであるが、一方適齢前の学生、帰還、検査済みの者はあと一ケ年もしくは当分の間御召のある日を待ちつゝ、学園にあつて学業を継続するはずで、このほど学生課において留学生を含めての残留者の調査が出来上つた

これによれば法学部においては一回生、三回生、二回生の順序で待機者(もしくは留学生)があり、全体で約一割九分強、文学部では三回生、一回生、二回生の順序で約三割強、経済学部においては一回生、三回生、二回生の順序で三割強、法・文・経の三学部全体では二割強の比率を示してゐる、もつとも農学部では停止学科不明のため調査未了だったのでこの比率は□動あるものとみななければならぬ

四 出陣の日愈よ迫る 今日送る精鋭学徒 午前八時から

本学壮行式

〔三三〕

一九四三(昭和一八)年一月二〇日

出陣の日愈よ迫る 今日送る精鋭学徒 午前八時から

ら本学壮行式

時は秋、うまし国麗はしく山紅ゐに空すみわたり、われら男の子、廿歳の命を君国に捧ぐ日今まさに迫る、われらうまし国を守らん、われら祖国の難に生還を期せず、学徒の決意は弥が上にも堅く、敵撃滅の一念に燃ゆるのみ——さて今や旬日後に迫つた光栄の日を指をり数へて待つ出陣学徒の首途を飾る数々の催しは臨時徴兵検査以前を第一期とし検査期間中止されたるが八日の同学会出征記念旗掲揚式を以て第二期の幕をあけた、五日から廿日にわたるこの期間は徴兵検査の結果もわかり従つて学徒の決意も一入堅く今や生死に徹した心情にとつてはこの種の催しは殊更に感銘深きものがあつた

八 日

出征学徒が学園と前線を結ぶ楔にもと残して征く出征記念旗の掲揚式はさる八日大詔奉戴のよき日、同学会主催のもと午後一時から西部構内池畔の掲揚台下に挙行、定刻原隨園、牧健二、並河功、池田榮、井島勉、汐見三郎、谷口吉

彦らの教官、同学会職員をはじめとして法経学部の出征学徒中約五百名参集国民儀礼ののち出陣学徒を代表して経三回生永見定三君「今後いかなる前線にあつてもこの吉田山麓にはためく日章旗に思ひをはせん」と力強く決意を披瀝、ついで待機学徒を代表して医三回生今泉博夫君挨拶をのべ、音楽部の伴奏で全員国歌斉唱裏に記念旗は中央委員の手によつてする／＼と晩秋のうすら寒い風にあふられて竿頭にかかげられ、はた／＼と高鳴るのであつた、最後に聖寿の万歳を三唱、一時十五分散会したが征くものも留るものもこの大国旗を通じて脈々と高打つ学徒赤誠の心を新たにするところがあつた

十 日

午後三時から法経第六演習室で学生課主催「南方を語る座談会」を開催、先頃ニューギニア視察を了へて帰学した農学部梶田茂教授および南方戦線から帰還した三谷軍医少佐を中心として南方の氣候、風土のみならず南方に関する重要事項について活発な論議がすすめられ、五時すぎ貴重な収獲をえて散会した

夜は六時三十分から文化部主催で「能楽鑑賞会」が金剛能楽堂で開かれた、征途を前にして今一度わが古典の真髓にふれておかんとする学徒の望みはこゝに達せられ、

堂をうずめる立錐の地なき盛況のうちに能楽中の絶品「松風」が金剛巖氏一門によつて上演されたがこれには既報のごとく金剛氏が最近入手された由緒ある古面を用ひられ、見ものも演ずるものも国を思ふ至情の美しい糸に結ばれてまれにみる盛会であつた

十一日

同学会音楽部、映画部共同主催になる「学徒出陣壮行の夕」は午後六時から朝日会館で開催、堀場信吉教授(音楽部長)の送別の辞にはじまり、ついで朝比奈隆氏の指揮になる管絃楽を演奏

▽「プロメトイースの創造物」序曲(ベートーヴェン作曲)▽フルート協奏曲ニ長調(モツァルト作品)フルート独奏山田忠雄氏▽交響曲「第二番」(ベートーヴェン)

と曲目はすゝみ、終つて映画に入り「空の神兵」ニユース映画「南太平洋海戦」「東都学徒壮行式」に征途への一層の熱情をわき立たせるところがあつた、最後に映画部長木村素衛教授の挨拶があり閉会

十四日

この期間中の日曜にあたる十四日は秋空のもと各種の行事が絢爛と展開された

まづ法学部ではこの日をきして鍊成大行軍を実施、午前八

時法学部玄関前に全員集合、部長引率のもとに山中越で紅葉色づく志賀の里に出て近江神宮に参拝、出陣学徒連長久祈願祭を執行、終つて晴れわたる近江路を宇佐山から眺望秋くれゆく琵琶湖をめぐる風光の中で昼食をした、め正午頃解散した、一方学生課では十三日から十四日にかけて法隆寺鑑賞会を举行、十三日には午後一時から文学部八番教室で源豐宗氏が講師となり幻灯を使用し絵画、彫刻の説明あり、十四日には午前九時半法隆寺南大門前に集合元教授天沼俊一博士が講師となり法隆寺の「建築」について蘊奥を語り、更に夢殿、中宮寺にいたり秋色濃き斑鳩の里のあたり今なほ漂ひ残る飛鳥人の昔を偲び国土への愛を今更のごとく新たににしてこの有意義な会を閉じた

なほ航空部では午前八時四条大宮に集合大阪第二飛行場にいたり見学、一部は同乗飛行を行ひ、射撃部では学内壮行射撃大会を大谷射撃場で午前八時から举行、各部とも秋の一日をみのり多く送つた

西谷、木村、高山の三氏をかこむ座談会は午後一時から法第六演習室で開かれた、参会者約百名、定刻まづ井上学生主事からこの座談会の意義について説明あり決戦下における諸般の問題を中心にして話し合つてゆきたに旨をのべ、なごやかな雰囲気のうちい高山助教は決戦の意義につい

て学生側からの質問に応じながら懇切に応答、時をうることの重要性を指摘、木村教授は学徒出陣のもつ意義の闡明を行ひ、学徒の誇りをもつて征くべきことを強調、ついで決戦下における学問の使命について学生側から質問が出たのに対し教官側からは平時と決戦下における学問のあり方について説明、学問の秩序が平時と戦時において変化していること、勝たんがためにはすべてを戦争に捧ぐべきであることを縷説、このまれにみる示唆に富んだ座談会は約三時間にわたつてつゞけられ四時十五分閉会した

十七日

特別講演「禅に就て」は鈴木大拙博士を招いて午後三時から法経第四教室で開催、まづ高山助教授の紹介の辞あり、ついで鈴木博士登壇、禅の歴史についての説明からはじめ如何なる過程を通じて禅が印度から支那を経てわが国に入つて来たかを闡明し、禅の本質について明快なる解答を与へ、禅が深く生活の実相と結びついた所以からわが国における生活との結びつきに深い造詣を示し、五時頃散会した

十八日

文学部学友会主催の壮行会は決戦下にふさはしく新入生歓迎会をかねて午後零時二十分文学部玄関前に集合、直ちに記念撮影にうつりついで学生集会所で昼食をしたため茂山

社中の狂言を鑑賞三時ごろ散会した

二十日

法学部壮行大講演会 法学部では午後一時から法経第四教室で壮行学術大講演会を開催、牧、中田両教授の左の如き講演を行ふ

訴訟における真実 中田淳一

日本世界観の立脚地 牧 健二

なほ有信会では午後五時から本部階上大ホール(仮閲覧室)で有信会壮行会をひらき晚餐をともにして文字通り学園最後の日を送る

五 壮行式告辞

一九四三(昭和一八)年一月二〇日 [七三]

壮行式告辞

総長 羽田 亨

大東亜戦争の開かれてより将に二年に垂んとする。緒戦以来皇軍の赫々たる戦果についてはここに改めてのべるを要しない。而して戦局の現階段は卒然として諸子の出陣を促して、一挙敵勢を撃破するの要を見るにいたつた。諸子は今や徴集の天命を畏み、勇躍軍伍に加はつて、敢然祖国

のために戦はうとするのである。師弟としての情誼、国民としての感謝は、一言この華々しき諸子の門出を送るべき言葉なくしてやむ能はざるものがある。

親愛なるわが出陣学生諸子。諸子は本来學術をもつて國家に奉ずることを志し、孜々として勉めて今日にいたつたのである。修むるところは國家須要の學であり、養ふところは國民指導階級の識見徳性であつた。國家は実に諸子がこれをもつて君國につくし、その隆昌に寄与するところあらんことを期待したのである。豈はからんや、米英豺狼の飽くなき慾念と、増長せる暴慢とが、東亜の安定を紊し、皇國の存立を脅かし、つひに宣戰の詔の發せらるるのやむなきにいたらしめ、今日諸子をして業半にして奮然軍に赴くにいたらしめようとは。さりながら國民皆兵はわが國是である。事なきに當つて文事に携はるものも一旦緩急あれば義勇公に奉じ、決然筆を投じて戎軒を事とするは、もとより國民當然の覺悟であり、今や實にその時に際会したのである。身をもつて君國の安護に任じ、雄々しくも劍とり佩き今ぞ立ちいづる諸子の勇姿を前にしては、嬉しくも頼もしくも、また有りがたくも感ずるのである。日ごろ積み來つた修養により、諸子の覺悟は夙くすでに定まり、胸中おのづから成算あることはもとより信じて疑はないのであ

るが、それにしても、この際せめて一語をよせて固き覺悟の更にも固かれと祈ることは、余の當然の務めでありまた衷心よりの願ひでもある。

諸子、およそことに従ふものはその意義に徹することをも最も肝要とする。今諸子が學園より召されて軍に赴くのは、國家がこの際單に一般兵員の充足を企図するがためのみではなく、實にこの征戰の現情勢下において別に学徒なる諸子の出陣を要する特種の事情の存するものがあるによることを、ふかく諒得しなければならぬ。諸子は今や學すでに成るに近く、識すでに高く、加ふるに訓練の効をつんで體と神とともに旺盛であり、今の極めて緊迫せる戰局において皇軍の最も充足を要する諸種大小の幹部として、諸子を措いて他に適者をもとむべからざることが、その最も大なる理由である。さればこそ國家は諸子が成業の後において軍務に服することを今日にいたるまで認めて來たにか、はらず、今はその時をまつ能はずして、今次の措置にいづるのやむなきにいたつたのである。此のごとく、諸子の召されるのは、目下、一日も忽にすべからざる局面において、國家が諸子の上に重く寄託し、深く信倚するが故であつて、平時に當つて、世の指導者として諸子の力に俟つところが、國民の總力をあげて軍國のことにつくすべき時局下におい

て、更に強く戦陣の裏にもとめらるるのに外ならぬのである。この重大の時に當つて、かゝる重望を一身に負う諸子の榮譽や大なりといふべく、その責や又重しといはなければならぬ。諸子が今学徒出陣のこの意義に徹し、その榮譽と責任とを自覺して、各自奉公の上に励むならば、諸子の今日にいたるまでの心身の教養と鍛錬とは、おもふに見事にその効果を發揮し、必ず国家の期待にそふを得るであらう。敵米英にありては、いち早く多くの学徒を動員して軍に従はしめてゐる事は、諸子の聞知するところである。あはれ名もなき戦に、ただ物力に自負して暴慢跳梁する驕児の群に外ならぬ。崇高なる皇国の精神を体した諸子が、一撃かれらの心胆をうばひ、その暴慢を挫き、その自負を失はしめ、忠義に凝りしわが学徒の面目を發揮するであらう事はわれらの諸子に対して切に祈念しかつ信じて疑はないところである。

刃かざして陣頭に立つからはもとより生死を超脱して、必ず敵に勝つことを期せねばならぬ。さりながら、くれぐれも戒むべきは、血氣の勇に逸つて、無益にとりかへし難い運命を招致してはならぬことである。君国のため、壮き尊き命の今日ほど軽んずべき時はないとともに、また今日ほど重んずべき時もない。敵たる軍規のもと、只管に上長

の命を奉じて、如何なる難事にも敢然として当る間にも、常に慎重と沈勇とを發揮して、挙措進退度に當ることこそ教養ある学徒の出陣に、ふかく望みをかけられる所以である。真に国家興廢のわかるる重大時の今皇国の運命を自から双肩に荷へることをふかく覚悟して、進止いやくも輕挙盲動することを慎しむならば、おそらくは諸子の負へる使命を達成する上において、過なきを得るであらう。

嗚呼、悠久の二千六百余年、今にして肇国の精神をさながらに發揮して、独り皇国の存立の爲にはかりかは、広々く八紘を以て宇と爲し、人類をして各々その処を得しめ、棄されたる世界の秩序を正しきに反さうとするのである。皇謨真に正大、まことに人類の史上絶倫の聖業である。この一戦を外にして何を以てか米英積年の罪惡を膺懲し、皇国の安泰をはかり、東亞の妖雲を排するを得ようか。而して諸子今や大命を畏み、勇躍してこの聖業に馳せ参ずるのである。諸子の一人は来りて余に告げて「げにもよき時に生れあはせられ」とその感激を披瀝したのである、思ふにこの感激こそは必ず諸子の通有するところたるを疑はない。余をして再び諸子に対する嬉しさと頼もしきと有り難さとをくり返さしめよ。諸子の清く尊きこの心境の上にこそ皇国の永遠の隆昌と、世界新秩序建設の聖業は期し得られる

のである。こゝに区々たる私情を去つて、喜び祝して諸子の首途を送らねばならぬ。

さらば征き給へ、親愛なるわが出陣学生諸子。後にのこる諸子の同学も、はやる心を押ししづめて、諸子と相携へて前線に立てる気構へのもとに、各々所要の学業を修め、やがて諸子の後につづくであらう。なほ要するならば、老も若きも、男も女も、およそ生を皇国に享けるもの、すべてが起つてさらに後につづかねばならぬ。一たび蹶然として立てる上からは、無道の敵にいやしくも屈服して、おめおめ辿るべき途の、わが国民の前には残されぬからである。白亜館裏城下のちかひを見るまでは、鞘に返らぬ剣である。さらば、顧みなくて雄々しく征き給へ。神かけて諸子の武運長久を禱るのである。

六 答 辞

〔七四〕

一九四三(昭和一八)年十一月二〇日

答 辞

本日茲ニ我等出陣学生ノ為ニ全学ヲ挙ゲテ蔽爾ナル壮行ノ式ヲ举行セラレ総長閣下ヨリ御懇篤ナル御訓示ヲ賜リ残留学生代表ヨリ切々タル壮行ノ辞ヲ贈ラル生等ノ感激正ニ

茲ニ極ル

想フニ米英破砕ノ大詔渙発セラレテ二ケ年赫々タル戦果随処ニ挙レルアリト雖モ有史以来ノ広大ナル戦域ニ彼我ノ戦闘ハ日ヲ逐ウテ苛烈ノ度ヲ加ヘ皇国興廢ノ決セラレムトスル重大時局ニ当面スルニ至ル

生等「とこしへに民安かれと祈」リ給フ大御心ニ浴スルコト二十幾星霜聖師ノ発進ト共ニ外敵撃滅ノ一念鬱勃トシテ脾肉ノ嘆ヲカコチ来レリ今ニシテ畏クモ学徒出陣ノ大命ヲ拝ス即チ茲ニ勇躍銃ヲ執テ第一線ニ赴カムトス男子ノ本懷実ニ之ニ過グルモノナシ

大御稜威ノ下大東亜共栄ノ基礎漸ク定リ大東亜會議ノ結集ニ依リテ世界史ハ燦タル不滅ノ一齣ヲ刻ミ相次グ南海ノ大戦果ニ皇軍ノ威武弥々昂ラムトスルノ秋我等今挙ツテ征途ニ就ク欣ビ実ニ筆舌ニ絶セリ

正ニ人力ノ限リヲ尽シ「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」ト宣ウセシ大御心ニ生キム我等モトヨリ生還ラ期セズ草莽ノ一死以テ皇国万代ノ安キニ任ズルヲ得バ我等ノ幸夫レ極レリト云ハムカ

秋天広闊比叡ノ秀峰ヲ仰ギツ、生等今学園ヨリ征途ニ上ル身ハヤガテ辺境絶域將又蒼溟ノ只中ニアラムモ学園ニ翻ル契リノ記念旗ヲ我等其ノ眼裏ニ仰カム限リ無キ慈父ノ師

恩ト尽クルナキ友愛トハ幾多感激ノ追懷ト共ニ脈々トシテ
常ニ無言ノ激励タルベク我等亦学恩ノ報謝ノ中ニ敵タル学
府ノ隆昌ヲ寿ガム

希クハ諸先生弥御健勝ニ在シテ国家ノ柱石ニ任シ給ハム
コトヲ学友諸兄益々健在ニシテ永カラザル残留ノ期ニ淬礪
以テ精進ノ結実ヲ遂ゲ我等ノ後ヲ承ケラレムコトヲ祈ル
我等今や大日本帝国軍人トシテ起ツ誓テ 聖慮ヲ安ジ奉
ラム即チ生死ヲ絶シテ身心一切ノ力ヲ戮シ従容トシテ悠久
ノ大義ニ生キム右答辞トス

昭和十八年十一月二十日

京都帝国大学出陣学生代表

法学部三回生 吉村敏夫

七 目指す全員志願 「半島学徒出陣の夕」開催 [三三]

一九四三(昭和一八年)年十一月二〇日

目指す全員志願 「半島学徒出陣の夕」開催

先般、内地学徒同様志願兵として出陣の道が開かれ醜の御
楯として今や勇躍戦線に赴かんとする朝鮮台湾の同胞学徒
はこの廿日の締切を前にして一斉志願の態勢を整へて来た
が、朝鮮当局においても志願せざるものに対しては休学の

措置をとり、徴用の挙に出づることを発表するところがあ
つたが、過般来同胞学徒の出陣を意義づけるため朝鮮奨学
会の学徒激励隊が大挙入洛、さる十一日午後六時半から樂
友会館で「半島同胞出陣の夕」を開催、朝鮮奨学会側から
理事長川岸文三郎中将、理事香山光郎氏、一方学徒側は本
学、立命館、同志社に在学の半島学徒百余名が出席、川岸
中将、香山理事はこもごも起つて激励、決議を行ふところ
があつたが、当日出席の半島学徒のうち本学生十五名はた
だちに特別志願をなし他にも多数の志願者を出だし盛会裏
に閉会

ついで十二日には奨学会総裁南次郎大将、川岸理事長を
はじめ前建国大学教授崔南善、香山光郎、金季沫の三氏
を迎へ午後六時からミヤコホテルで懇談会を開催、本学
羽田^(孝)総長をはじめ府下大学、高専側からも責任者多数出
席、南総裁、川岸理事長から今回の特別志願兵制実施に
関し一人残らず志願するやう協力方を依頼、羽田総長は
出席者を代表して協力を誓ひ八時閉会した

一方台湾同胞学徒にたいしても総督府の意向を体し関西台
湾協会が積極的に働きかけてをり締切りまでには全員志願
をみるものとみられる

なほ本学朝鮮、台湾同胞学徒にして該当者は約〇〇名位

とみられてゐるが学生課の手を経たものは○名、この外直接中軍司令部へ志願したのもあり本稿締切りまでには大体○○名とみられてゐる

八 学徒壮行の模様を百号の大作に 同学会

一九四三(昭和一八)年二月五日

学徒壮行の模様を百号の大作に 同学会

別項莊嚴極りなき中に学園を感激に包んだ出陣学徒壮行式の模様は絵画として永久に記録して、永く此の日を偲ぶこととなり、同学会では前本学講師で独立美術協会の重鎮須田國太郎画伯にその製作を依頼したところ、深い感動の中に進んでその任に当るべきを約せられ近く百号の大作となつて壁間を飾ることとなつた、画伯は度々運動場に立つて周到な用意の下に南禅寺畔に画筆を執られつつあるがその参考写真の製作は鈴鹿幸保氏が担当せられた、同氏は最近刊行せられた「能面」の撮影者として令名を謳はれた人であるが、壮行式の写真撮影為にはその前数日間同時刻に運動場に立ち光線の研究をせられる等渾身の力を振はれた、この写真は記念画の参考のみでなくやがて絵葉書にして頒布する案が立てられてゐる

なほ此の事業の成立については同学会美術部長の文学部井島助教授が入院中の愛児の看護を忘れて奔走せられた^(勉)隠れた美談が秘められてをり当事者をいたく感激せしめてゐる、かうした幾多の熱情に彩られた大作を壁間に仰ぐ日も程近いことと思はれる

六 戦時下の大学生活

一 明春から指導教官制 全国帝大に魁けて

一九三四(昭和九)年九月二日

明春から指導教官制 全国帝大に魁けて
本学学生課では全国帝大に魁けて来春の新学期より有志者を限り指導教官制の実施を見んとしてゐる

大学当局がこの案をもたらしした根拠は近來の大学教育大衆化に伴ふ形式化と、時代の趨勢による功利思想から来る悪い意味の大学型に流れんとする大多数の学生大衆中有志者若干を限る事による大学との個人的な接触が^つ深から情に導くといふにある、即ち大きな希望と光明を索めて毎年押寄せる純真な学生が当初適当な機縁のない為に真の大学機構をきはめ得ず、稍もすれば流れる無意味な

三年を更に充実せしむるにある

之は従来高校に行はれて来た指導教官制の如き単なる監督取締といふ消極的な目的から来るのではなく、高校出身者別のグルツベが学生主事の幹旋によつて学内諸教授学外の有識者経験家とも接触して個人的な親睦の実をあげようとするのである、願はくばこの挙、真に学生自体の発展充実のために資すべく実現されんことを

二 この数字を見よ 蝕む青春を如何に防護するか 結核

予防会の発表

一九三五(昭和一〇)年二月二日

〔三三〕

この数字を見よ 蝕む青春を如何に防護するか 結

核子防会の発表

われ等の学園は今全く健康であらうか、目に見えぬ結核菌を予防せよ!、そしてそこに心身共に健やかな学園を作れ!と医学部内に誕生した「京大学生結核子防会」の人達が警鐘を乱打する

同協会の調査に基づく本学学生健康状態と結核疾患の状態についてその発表に基き記載すれば

休学届による罹病学生数は昭和七年度に△法二十六名△経八名△文十八名△理八名△工九名△農七名△医十二名、○昭和八年度では△法二十九名△経十四名△文二十五名△理十一名△工十六名△農四名△医十七名と(農を除いて)年々増加の傾向を示してをり、昭和四年以降の平均数は△法二十八名△経十一名△文二十名△理八名△工十三名△農六名△医十六名、計百二名の多数に及び、全病気休学者に対する率は、昭和七年度六十パーセント七、昭和八年度六十七パーセントとなり

即ち約半数以上は結核に倒れてゐるのだ、そしてこの平均は休学届に基いてゐる以上これより多くとも少くはあり得ないと言ふことになる、これが結核死亡率の多い年齢にある大学生であることを考へると慄然たらざるを得ない、そこで同協会ではこれの防備にはまづ予防、次で解放性結核患者の隔離、或は早期診断、之にはレントゲン写真が最適である、とし(これは学生健康相談所にある)協会はその医学的立場から

(一)入学当初に於ける一回生全部の肺部のレントゲン写真の必要(二)その早期治療、尚これが基礎として、結核に対する予防思想の普及、とを主張してゐるが、健かな学園建設のために、これは全

く全学をあげて支持さるべき運動であらう、東大では来る四月からは今までの任意的身体検査を改めて、全学学生に対し強制的に行ふらしく、その際にはレントゲン診断による結核の早期発見に努める由である、本学に於ても協会の具体策が明年度からは、現実に実行されるであらうことを期待する

三 日本文化講義実施ニ関スル件

一九三六(昭和十一)年七月二二日

発思八七号

昭和十一年七月二十二日

(松井元典)
京都帝国大学総長殿

日本文化講義実施ニ関スル件

(伊東延吉)
文部省思想局長

今般教学刷新ノ見地ヨリ別記目的ノ下ニ学生ニ対シ日本文化講義ヲ実施致ス事ト相成タルニ付テハ別記要綱ニ準拠シ夫々御計画相成様致度依命此段及通牒

追テ所期ノ目的ヲ達成シ実効ヲ挙クル為ニ講師ノ適否ハ最も肝要ノ事ナルヲ以テ其ノ選定ニ付テハ特ニ御配意相煩度尚本年度ハ来ル九月ヨリ実施致ス事ト相成ニ付為念申添フ

日本文化講義要綱

一、目的

大学並直轄諸学校ノ学生生徒ニ対シ広ク人文ノ各方面ヨリ日本文化ニ関スル講義ヲ課シ以テ国民的性格ノ涵養及ヒ日本精神ノ発揚ニ資スルト共ニ日本独自ノ学問、文化ニ関スル十分ナル理解体認ヲ得シムルタメ權威アル学者等ニ委嘱シテ日本文化講義ヲ実施セントス

二、講師

人物、学問本位ニ詮衡シ国体、日本精神ノ真義ヲ明ニシ教学刷新ノ目的ヲ達スルニ適當ナル人ヲ選フコト原則トシテ当該大学ノ教授職員中ヨリ主トシテ人文諸学ノ講師ヲ選定シ本省ニ合議シテ決定スルコト人文ノ学部無キ帝大及ヒ官大(医、工)ハ他ヨリ講師ヲ選定スルモ差支ナキコト講師ハ各大学ニ於テ委嘱スルコト便宜本省ニ幹旋方ヲ依頼スル場合ハ計画書提出ニ際シ其ノ旨明記スル事

三、講義

(一)回数及ヒ時間数

一学部年三回、毎回二時間 計六時間
但シ昭和十一年度ハ九月ヨリ実施ニ付適宜裁量スル

コト

(二)右一般ノ標準ナルモ大学ハ其ノ特殊事情ニ従ヒ最

モ有効ナル実施計画ヲ樹ツルコト

(三)本講義ハ心修科目ニ準シテ行ヒ学生ヲ必ス出席セシムル様適宜方法ヲ講スルコト

(四) 右正規ノ回数ノ外ニ広ク大学ニ於ケル学生ノ思想上ノ指導施設、事業或ハ日本精神、日本文化ニ関スル研究施設等ニ於テ研究会、講演会等ヲ行フ場合総長(學長)ノ裁量ニ依リ適宜本講義ヲ実施スルモ差支ナキコト

四、速記

本講義ハ速記ニ付シ速記録ヲ本省思想局長宛提出スル
コト又大学ニ於テモ本省ノ承認ヲ得テ適宜之ヲ利用ス
ルハ差支ナシ

五、实施方法

(一) 講義ノ計画書及ヒ予算書

各部ノ具体的実施計画ヲ(大学一
体タルノ見地ヨリ調整シ)予算書ト共ニ予メ本省
思想局長宛提出スルコト

(イ) 日本文化講義計画書

大学及工学部名、講義日時及時間数、講師ノ職
氏名

(口) 同 予算書

講師謝礼、
一人講義手当、
時間分、
旅費、日当、宿泊料、

速記料、一時間、
円、円、時間分

備考 講義手当等計算方二付テハ別途通牒ス

(二) 實施狀況報告及收支決算書

講義終了後遅滞ナク実施状況ヲ左ノ各項ニ從ヒ報告スルコト

講師名及演題

講義日時及時間数

講義要旨

聴講学生数並出席率

學生二与へタル講義ノ影響

其ノ他参考トナルヘキ事項

右報告ト共ニ收支決算書ヲ本省思想局長宛提出スル
コト

六、經費

本講義ニ対シ本省ヨリ支出スル予定金額ハ一学部ヲ一

施設トシ三五〇円七学部二、四五〇円ノ程度トシ講義計
画書並予算書ニ依リ実施方ヲ指令スル際別途支払委任
ス

四 諸權威を動員して日本文化講義 三回六時間にわたり

一九三六(昭和十一)年一〇月五日
〔三三〕

諸權威を動員して日本文化講義 三回六時間にわたり

文部省では教学刷新の見地から大学並に直轄諸学校の学生
生徒に国民的性格の涵養および日本精神の發揚に資すると
共に日本独自の学問、文化に関する十分なる理解体認を得
しむる目的で、權威ある学者に委嘱して日本文化講義を各
学校に於いて開講せしむることとなり本学に於いても十月
から各学部で開講する、講義日割講師等大体の決定を見る
に至つた回数、時間は一学部年三回毎回二時間計六時間の
講義で日割時間は左の通り

△法学部 十月下旬、十一月上旬、一月下旬 講師作田教
授(経)題未定

△医学部 十月上旬、十一月上旬、一月下旬 野上俊夫教

授(文)題未定

△工学部 十一月上旬、十二月上旬、一月中旬 牧健二教

授(法)題未定

△文学部 十月下旬、十一月上旬、一月中旬 神戸正雄教

授(経)題未定

△理学部 十月上旬、十一月下旬、一月中旬 本庄榮治郎

教授(経)題未定

△経済学部 十月十日、十一月七日、十二月五日 田邊元

教授(文)題国民的と科学的

△農学部 十月下旬、十一月上旬、一月上旬 西田直二郎

教授(文)題未定

なほ本講義の出席者に対しては希望に応じ聴講証明書を交
附すべく目下学生課でその具体的方法を考究中

講義開設と同時に 日本文化研究会成立 会長その

他の顔ふれきまる

ちなみに本講義開設と同時に本学内に日本文化研究会が組
織されることになつたが、今までに決定した会員左の如し

(順序不同)

会長松井元興、法学部教授牧健二、経済学部教授神戸正

雄、同本庄榮治郎、同作田莊一、同石川興二、文学部教

授野上俊夫、同西田直二郎、同九鬼周造、工学部教授瀧

山與、同鳥養利三郎、同松田長三郎、理学部教授松山基範、同川村多實二、同佐々木申二、農学部教授橋本傳左衛門、同黒正巖、学生課長阿部三四の諸氏

五 特輯 戦事下の学生 学生生活調査 (三三)

一九三八(昭和一二)年五月五日

特輯 戦事下の学生 学生生活調査

昨年十一月学生課の手によつて行はれた学生々活調査の結果は戦時下に生きる現代学生大衆の生活の秘められた窓を展くものとしてあらゆる方面からその結果の発表を待たれてゐたのであるがこのたび調査総計が内閣統計局より送附されて来いよこ、に発表の運びに至つた

若き世代の進展を背負つて立つべき学生大衆の生活の相貌は複雑多岐に亘り、そこにはあらゆる階層の縮小された学園風景を形作つてゐる、生きてゐる学生には享樂も必要であり、知性の鏡を持つ学生は、その鏡を磨き、曇りなき知性の光を輝かさねばならない

特に荒々しい政治的情勢の音を立て、ゆく変化、基礎地盤の変動にもとづく生活の重苦しさ、享樂的機関への制約、何時の時代にも存在するが、社会の揺り動く転形期にはあ

らには纏ひつく性關係への深刻なる社会事情は学生と雖もその埒外に置かれるものではなく、ある一面では却てその相剋が著しく強められることは正にこの時代が最も雄弁に物語つてゐる

事変はこの調査が行はれたときよりは深化し、従つて学生大衆の生活もそこに変移の道を歩んだであらうが、ともかく現代学生の基礎地盤、その風俗、その觀念形態等々のものを汲みとることが出来るであらう

窮迫する学生群 学資は平均月五十円

一般学生にとつて最大の經濟的地盤たるその父兄の職業は一体どんなものであらうか？

調査学生二千六百廿一名に就いて見ると無業五百八十二人が最高を占めてゐる。次いで銀行会社員の三百八十九、官公吏三百三十四、商業三百三十一、農業二百九十九、医療に従事する者百七十六、教育に従事する者百二十七、工業九十一といふ様な順序であり宗教家、法務に従事する者共に四十一、現役軍人廿八となり以下細い所を省いて最低をとつて見ると政治家一となつてゐる。次に学資の源泉たる給与先と一ヶ月平均受給額との關係を調べて見よう。間代を記入せる調査人員一千九百八十六名の中、最大は家庭が給与先なる者一千七百五十二名で五十二円

五十六銭、育英会僅に十名で四十一円五十銭、他人が三十九名で四十四円八十八銭、内職が九名で四十七円七十二銭、家庭及び育英会が八十名で四十八円六銭、家庭と他人が三十三名で五十四円七十一銭、家庭と内職が三十名で四十七円六十二銭といふ様な順序で家庭から全然給与を受けてゐない者は総計七十二名となつてゐる

育英会が給与先なる者僅かに十名といふのは何を物語るか？育英会事業の未発達、不徹底を物語る以外の何ものでもない、そして貧困学生にとつては大学の門は固く閉され、又、大学進入後も苦しい生活にとりつかれてゐることは疑ひない

次に学部と一ヶ月平均学資金との関係を見よう、法は五十一円九十五銭、医は五十二円四十銭、工は五十一円八十六銭、文四十九円六十三銭、理五十二円六十二銭、経五十五円三十九銭、農四十九円七十九銭となつてゐるでは一般的に見て間代も入れて最低どの位から最高どの位まで一ヶ月平均の学資を使ふだらうか？

調査人員一千九百八十六名の中最低は二十円から二十五円迄が八名、最高は百円以上の者十五名である、その中間をとつて見ると四十円乃至四十五円が二百二十七名、四十五円乃至五十円が二百四十七名、五十円乃至五十五

円が最大多数で六百二十四名、五十五円乃至六十円百四十七名、六十円乃至六十五円が少し増して三百十名となつてゐる

では以上の如き種々の等級を持つ一ヶ月平均学資金を学生はどの様に使つてゐるであらうか？これこそ最も注目にする問題であらう

総額廿一元八十八銭の例をとると、大略食費十円三十八銭、間代及電灯代六円二十五銭、書籍文具代一元八十一銭、娯樂社交費一元十九銭、通学費七十五銭といふ様な割合である、最大多数六百二十四人の五十円乃至五十五円の中の五十円十九銭といふのを例にとつて見ると食費十七円六十五銭、間代及電灯代九円二十八銭、書籍文具代九円七銭、娯樂社交費五円九十三銭、研究会費五十七銭、運動会費五十一銭、諸雜費五円三十四銭となつてゐる。総額九十六円の例をとると食費二十八円五十銭、間代及電灯代廿三元、書籍文具代九円、娯樂社交費十五円、研究会費僅に三十銭、運動会費何と八円五十銭、雜費十二円二十銭といふのである

統計によれば毎月七十円以上使ふ人は書籍文具代よりも娯樂社交費に多く費してゐる、そして雜費の飛躍的增加、之等は統計上に反映された現代大学生活の不健康性と言ふも

過言でなからう。

学生享楽面の諸相 映画館 喫茶店 おでんや

府令によりかつて学生享楽機関が極めて局限されたことはもう大分以前になつた、その際喫茶店等はその制限範囲から免れてともかく学生はうるほひのない下宿から抜け出てレコードの音に耳を傾けながら想ひを求め得る唯一つの場所として残存したと云へよう

然るに先般帝都に行はれた学生検挙事件はこの残された安息所にも伸びて学生のオアシスは失はれた、一杯のコーヒ、一碗の紅茶を以て窮迫した学生生活にひと時のうるほひを与へる所は消え去つた、時変下の政策に基調を持つ帝都学生検挙事件は相次いで各地に行はれ京都も去る三月十九日、四月と続行されたことは周知のことだ。そこでこの際学生の娯楽、社交機関を一瞥することは極めて意義あることと云はねばならぬ

調査総数二、六二一、喫茶店出入数一、四六六、非出入者一、一三〇、映画館は出入者一九〇一、非出入者六九五、玉突屋出入数四四〇、非出入数二二五六、安直なあのおでんやも出入しない数が多くて二、〇四四、その他基所将棋も出入者は一〇〇人足らず、コリントは更に少く出入者四二、バーは一寸多くて七八を示し満ち足りた

生活か、古ぼけた青春の夢を求める人達の生活を暗示してゐる

今、自宅と下宿(アパート借間等を含めて)から通学する者^(マツ)とのについてみるに、喫茶店については両者の殆んど大半が出入しており調査人員二千余名と云ふこの統計の欠点にも拘らず喫茶店が正に学生の社交機関になつてゐることを示してゐる

映画館については云はずもが自宅、下宿を問はず殆んど全部が出入しており、映画の持つ現代学生生活への深き交錯、影響を如実にあらはしてゐる、バーについては前述の如く出入者は極く小数であり、それは自宅から下宿からと区別するよりはバー出入の経済的地盤を考察することが必要であらう、おでんやには自宅よりも下宿人が多く遊ぶことは云ふ迄もない

囲碁、将棋屋も些か凝つた烏天狗連の道場とみてよく、玉突所も自宅、下宿の区別はない

『内面への道』修養形態の動向

戦時下の学生生活はもはや甘きアルト・ハイデルベルクの夢を許さない、学生時代は人格陶冶の苦難に満ちた時代であると云はれ、大学は既に人格陶冶の道場へと現実的にその機能を転化した、萌え出た芝生の上に横になつて大空を

眺めても翻る五月の鯉幟りは風を食つて生きてゐるらしい頃である。学生時代は若くて楽しい歎び、甘美にして清純な物心、哀愁に富める青春時代ではない、未来を背おつて立つ若きチエネレーシヨンは背負ひ立つ時代への準備、順応に種々の意義に於て心を砕かねばならぬ。

だが修養とは我々の常識を以てすれば「修身」を思はず何かたくなものを思はず、修養は同時に墮落をも意味したことがあつた、修養の積んだ人間程、鼻持ちならぬお茶坊主が多かつたのだが修養は墮落であつてもとかく立身出世の手段であつたし、現にさうである、かゝる観点の下に立つてみると

調査総人員二七九二名の中修養方法なしと記入したものが八二六名、記入なきもの五四三名、合計一三六九名、パーセンテージは四〇パーセントに達し殆んど調査人員の大半を占める、学生はともかく修養がお嫌ひらしいと云へるだらう、だが修養に励む、真面目な？学生もある、その修養方法は学生修養形態とも云ふべき修養書閲読が最も多い、だが、僅かに二〇パーセントである、修養書と云つても所謂修養以外の修養書があるから修養書閲読とは云つても数多の色どりを持つものであらう
修養書閲読に次ぐものは瞑想及び思索である、之は全体

の六パーセント、瞑想と云ひ思索と云ひ何かしらペダグチツクな高踏さを匂はすものがあるが、然し之にもピンからキリまであることは世間周知のことと云つてよい、それから殆んど同じパーセンテージを占めるものに反省がある、次には忘却とも云ふべき信仰生活、座禪、静座、克己、参拝及礼拝がある、之等を一括すれば全体の一パーセント、瞑想、思索、反省を合すれば十三パーセント近く占めることになり、このところ読書と対立した修養形態を型どつてゐる

その他映画の題名を思はず人生勉強が二一人、日記七人、講話聴講三六人、人格者との接触三六人であり、この日本の国には三六人もの人格者が少くとも存在することとなり全くお目出度いことである

次に運動六七人、労働が二人ある、明日のパンを、汗と埃を思はず労働が何かの逸話にでも出てきさうな修養方法にまで押し高められて神聖な光をさへ発してゐるやうだ、故に概括すれば調査学生の四〇パーセントは修養のない学生とみてよく二〇パーセントは読書、十三パーセントが宗教的な色彩を帯びてゐる

此等の諸傾向は現代学生の動向を語るに見逃し得ないことであらう、その他に興味による修養と云ふ一石二鳥の名案

が三六人あるのも注目すべきだらう。

悩みの転換時代 学生の崇拜人物？

昏迷の今日の時代にあつて、他からはかく蒼白きインテリと悪口をたゝかれ、自らはその大多数がニヒルの深淵に底深く沈んでゐるといはれてゐる大学生、その一部たる京大の学生の崇拜してゐる人は一体どんな人物であらうか？興味深い問題でなければならぬ、人の思想はその崇拜する所の人物によつて判るといふ人もある位だ、まづ統計に現れた注目すべき現象は調査総数二千七百十三人中、かういふ時代にはその崇拜する人物をはつきりいひかねるのか記入なきものが、五百五十九人の多数にのほつてゐることである、その次に自己の無思想を表明するのかどうかはわからないが、崇拜する人物ナシといふのが五百九十四人となつてゐる。次に崇拜人物を日本及び外国にわけて見て行かう。

日本では最高が西郷隆盛の二百六十一人といふ圧倒的レコードを示して力強い限りである。西郷隆盛を崇拜するのはさまゝな角度からさまゝな人が崇拜してゐるのであらう、次は乃木希典の百九人といふ力強い非常時型レコードを示してゐる。その次は楠正成の八十五人、その親を崇拜してもその子を崇拜しないのか正行は一人も

なく、吉田松蔭^(陸)が案外少くて七十四人、世界的医学者、

人類のための犠牲者ともいはれてゐる野口英世の五十六人、東郷平八郎の四十三人、親鸞上人二十人で昏迷期に於ける宗教の復興を見せ、各人の実父が意外に少く僅かに十六人、超非常時の日本を背負つて政界の一線に乗り出した近衛文麿の十四人、豊臣秀吉と同じく十四人、日蓮上人十三人、濱口雄幸は例の緊縮政策と金解禁で学生の親達の人気をわるくしたせいか十一人、だが犬養毅が一人もないのは一寸淋しい、寺田寅彦九人、両親九人、新渡戸稻造、森鷗外、徳川家康、道元、坂本龍馬、伊藤博文、大石良雄がそれゝ八人、聖徳太子、福澤諭吉、良寛、佐々木惣一、橋本左内が各七人、高橋是清、勝海舟、河上肇、自己がそれゝ六人である、外国ではゲーテが三十四人で最高、ベートベン二十七人、キリスト二十五人、トルストイ二十一人で之が一時に比べると非常に少く、ヒットラーが二十一人、だがムツソリ^(マ)ニーはどうしたわけか一人もなく、マルクス十八人、映画の力で増加したのかパストゥール十七人、釋迦十六人、リンカーン、レーニン、カント、孔子それゝ十一人、ナポレオンはやはり少くて十人、ヒスマルク九人、ソクラテス八人、エチソン、アインシュタイン、ニーチエが各々六

人である

消化不良の蒼白きインテリ 宿痾調査

調査人員二、六二一名、宿痾なきもの一五二八名、記入なきもの五六三名、だから学生諸君は大体健康とみてよい

最も多いのは消化器病で、蒼白きインテリは実は消化器不良が多大の原因をなすことになるらしい、法学部が最も多く、法学部調査人員総数に対するパーセンテージも大きく、次が文学部、経、医、理、農、工の順序之によればお医者さんの卵は案外食ひ過ぎが多いことになるが、医学部を除いた自然科学系統は概して文科系統より少ないことになる、次は肺結核、肋膜炎である

青春をむしばむこの疾病は医学部が此処でも罹病者も多ければ、学部調査人員に対するパーセンテージも大きく、医者の不養生を実証してゐるかの様な状態が注目をひく、医学部に次ぐのは法学部を始めとした文科系統、医学部を除いた自然科学系統は案外少い、結核肋膜炎に次ぐものが痔、法科が最も多く、他の諸学部は大体同等である、第四番目は神経衰弱で、文学部が最も多くて群を抜いてゐる、五番目は呼吸器の疾患、次ぎが脚氣等々である、その他には喘息六名の中法科が五名を占め、残りの一名は経済学部、花柳病は文科、経済に各一名となつてゐるがこれは嘘だらう

とみるが妥当であり、調査には必ずしも真実が書かれてゐないともてよい、最後に眼鏡使用者は六三、一二パーセントをしめる

学生とスポーツ

一般体位向上が喧伝される折柄学生はどんなスポーツをしてゐるか？調査人員三、六四九名の中あつさり「なし」と答へたものが六八七名、記入なきもの二八五名である、残りの二千五百名弱の中最も多いのは庭球であり、野球が之に次ぐ、散歩やハイキングが果してスポーツか否かに疑問であるが両者合すれば大体庭球に匹敵する数字を示してゐる、卓球もありふれた学生スポーツ形態であり、剣道柔道が案外少く、ゴルフと洒落たるのが九名、捕球がスポーツだと宣言する者が三名、釣魚一名、拳闘が一名、国技と謳はれる相撲がやはり一名、自動車、自転車操縦と云ふ厚かましいのが五名ある、スポーツ時間については「なし」記入なきもの、不定で大半を占める、その外大体が一時間以下なのは当然のことであらう、では勉強時間とスポーツ時間の割合はと云へば運動時間は勉強時間の三分の一が一般的であるが文学部は四分の一であるのが特に目につく、睡眠時間は大体八時間近くであるが、これは些か怪しいと云へるだらう

趣味娯楽 映画が圧倒的多数 日本趣味の勃興も顕著

趣味娯楽の対象は芸術、室内娯楽、戸外運動、読書(?)学術研究(?)園芸養畜に分れる

調査総人員四、四四六名の中、芸術を愛する者は調査人員の半数以上を占める二八〇五名、内訳としては何と云つても近代学生生活の一半を形作る映画が最も多く一、四七四音楽五五四写真三一四等の順序であり、その他には謡曲、書道、茶ノ湯、生花と云つたものがある

こゝに枯淡―静寂、即ち「腹」を作るといはれるものへの傾向が看取されることは学生の逃避的傾向或は知性への蔑視をあらはす現象として注目すべきものであらう

室内娯楽は総数五八七、囲碁が圧倒的多数の二九〇、将棋九九、撞球九五、その他談話、舞踏、詩吟がある

戸外運動は総数四九七、旅行、ハイキング、散歩、スポーツ等

読書が趣味娯楽とはまるで楽隠居のお爺さんが古い講談本を読むような感じを与へるが、ともかく読書には修養方法としての機能の外にかうした機能があることを物語つてゐる、数総は二九五名である学術―これが娯楽、趣味だとは(笑)学生は全く結構な身分である―は二九名、その内学術研究

が一七、植物ソノ他の採集が五、機械工作等であるこの調査にはナシ、記入ナシは極めて少い

完全なる趣味娯楽は人間生活にとつて欠くべからざるものであり、人間成熟の胚種であるが、こゝにも建設的な、人生へと同時に社会への糧へとなり得るものと三猿主義を思はず転落の袋小路をさ迷ふものがあることは明白に示されてゐるようである

廿二歳が断然トップ 結婚学生七十七人

京大学生の年齢はどんな状態にあるのか、今、調査人員二千六百廿一人について見よう、十九歳以下の者が四十二人、二十歳が二百一人、その中有配者二人、廿一歳が四百四十六人その中有配者六人、廿二歳が最多数で六百廿四人その中有配者七人、廿三歳が五百五十八人その中有配者が十五人、廿四歳が四百三人、その中有配者十五人、廿五歳がぐうつと減つて百八十八人、その中有配者九人、廿六歳が更に減つて八十五人その中有配者九人、廿七歳が廿九人、その中有配者七人、廿八歳が十二人中有配者二人、廿九歳が十人その中有配者二人、卅歳以上十一人その中有配者三人となつてゐて、記入なき者又は不詳が十二名とある、配偶者ある者は調査人員の三%弱でその数七十七人である、学部と年齢との関係を見ると法は調査人員九百十四人の中廿

二歳が二百卅一人で最多数、医は廿三歳が最多数で調査人員三百七十五人の中八十六人、工は調査人員三百十八人の中廿二歳が九十人で最高、文も二百卅七人中五十一人で廿二歳が最も多く、理は百六十五人中廿三歳が卅四人で最多数、経は法工文と同じく四百五十五人中廿二歳百十人が最多、農は百五十七人中卅六人で廿三歳が最も多いことになつてゐる

六 法学部経済学部学生指導制度ノ件

〔一六〕

一九四〇(昭和一九)年三月二八日

一、法学部経済学部学生指導制度ノ件

予テ第三委員会ニテ提案アリシ訓育ノ目的ヲ以テ教官ト学生トノ接触ノ機会ヲ多クスルコトニ付テハ前年度ヨリ医学部ニテ実施セル指導制度ヲ昭和十五年度ヨリ法学部、経済学部ニテモ先ツ一回生ニ対シ実施スルコトトナリ両学部委員ヨリ大要左ノ如ク報告アリ

法学部

一回生約三百五十人ニ対シテ実施ス
十五人ノ教授ガ各々学生二十二、三人宛ヲ分担ス
大体少クトモ年五回会合ス

経済学部

一回生二百六十九人ヲ二十班ニ分ツ

教授助教授ハ専門ノ研究ヲ妨ゲラレサル範圍ニ於テ各一班ヲ受持つ

毎学年五回以上(大体一学期二回、二学期二回、三

学期一回)ノ会合ヲナス

教授助教授講師ハ学生面接ノ曜日ヲ定メ之ヲ学生

ニ公示ス

七 学生課ヨリ協議ノ件

〔一五〕

一九四〇(昭和一九)年九月一二日

一、学生課ヨリ協議ノ件

先ツ^(羽田亨)総長ヨリ目下組織進行中ノ我が国新体制ノ目的ト

スル点ハ全国民ノ同心協力シテ実現ヲ期セザル可ラザル所ニシテ本学々生ノ指導モ固ヨリ此ノ線ニ沿フベキナルガ唯現下ノ情勢ニ於テハ学外団体ヨリ本学々生ニ呼びカクルコトノ増加スベキ形勢ノ認メラルルニヨリ常ニ注意シテ学生ノ本分ヲ誤ラシメザル様指導スルノ要アリト述ベ^(長崎太郎)学生課長ヨリモ現在ノ実状ヲ述ベテ此ノ際左ノ方法ヲ取ルコトニ決ス

(イ) 学生ノ進ムベキ方向ヲ学生課長談トシテ大学新聞ニ掲載スルコト

(ロ) 左ノ告示ヲナスコト

本学々生及生徒ハ本学ノ認可又ハ指示アル場合ノ外学外ニ於ケル団体的実践運動ニ参加スベカラズ右念ノ為告示ス

八 京大満洲国留学生クラブ 宿願かなつて愈よ創設

(三三)

一九四一(昭和一九)年五月二〇日

京大満洲国留学生クラブ 宿願かなつて愈よ創設

友邦満洲国の本学留学生は現在五十名をかぞへ、今後ふえることがあつても減ずることなき有様で、かねてから相互の親睦と教養を高めるクラブの出現を熱望してゐたが今度満洲国大使館の尽力で資金をえたので、故西園寺公の別荘として知られた田中関田町にある清風荘の向ひ側に適當の家を物色して、墨痕あざやかに「京大満洲国留学生クラブ」の看板を掲げた、クラブは本造二階建本館その他延八十余坪で、図書室、娛樂室、談話室などを設け、学生課で十年間留学生關係事務をとつてきた佐々木主事補がクラブ内に

起居して万般の世話をやくことになつてゐる、何分多年の念願がようやく実現したので留学生諸君も非常によろこび、同国出身の憲谷講師(客)のごときは維持費を寄附して賛意を表した、大学当局も各方面の援助を得て健全なるクラブを完成すべく意気込んでゐる、ちかく開所式をあげ、本年新入学生の歓迎会等が催されるであらう

九 学生生徒国民貯蓄組合同約

(一六)
告示第二三号

一九四二(昭和一九)年二月一日

京都帝国大学学生々徒国民貯蓄組合同約

第一条 本組合ハ国民貯蓄ノ重要性ニ顧ミ全学一致シテ戦時貯蓄ノ励行ヲ為スヲ以テ目的トス

第二条 本組合ハ京都帝国大学学生々徒国民貯蓄組合ト称ス

第三条 本組合ハ京都帝国大学ニ在学スル学生生徒ヲ以テ組織ス

前項ノ学生生徒ハ本規約ニ遵ヒ本組合ニ加入スルモノトス

但シ特別ノ事情ニ依リ免除ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限

リニ非ズ

第四条 本組合事務所ハ之ヲ京都帝国大学本部ニ置ク

第五条 本組合ハ第一条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ

一、組合員ノ郵便貯金

二、貯蓄計画ヲ樹立シ之ヲ遂行スルコト

三、貯蓄心ノ涵養ヲ図ルコト

四、其ノ他目的達成上必要ナル事項

第六条 本組合ニ左ノ役員ヲ置ク

組合長 一名

理事 若干名

監事 若干名

第七条 本組合ノ役員ハ無報酬トス

第八条 組合長ハ京都帝国大学総長ヲ以テ之ニ充ツ

理事及監事ハ京都帝国大学職員中ヨリ組合長之ヲ委嘱ス

第九条 組合長ハ組合ヲ管理シ之ヲ代表ス

理事ハ組合長ノ旨ヲ承ケ組合ノ事務ヲ処理ス

監事ハ組合ノ事務ヲ監査シ役員總會ニ於テ之ヲ報告スル

モノトス

第十条 役員總會ハ必要ニ応ジ組合長之ヲ開ク

第十一条 役員總會ニ付議スベキ事項左ノ如シ

一、組合規約ノ變更ニ関スルコト

二、組合ノ解散ニ関スルコト

三、各年度貯蓄計画ニ関スルコト

四、其ノ他重要ト認ムル事項

第十二条 役員總會ハ組合長ヲ座長トシ總會ノ決議ハ総役員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

可否同数ナルトキハ組合長之ヲ決ス

第十三条 本組合ハ毎年度初ニ其ノ年度ノ貯蓄増加目標額

ヲ設定シ之ニ基キ組合員ノ貯蓄増加目標額、貯蓄標準及

貯蓄ノ方法等ヲ定メタル貯蓄計画ヲ樹立スルモノトス

組合員ハ前項ノ貯蓄計画ニ拠リ貯蓄ヲ実行スルモノトス

第十四条 組合員ハ前条ノ規定ニ依ル貯蓄額ノ二分ノ一額

ヲ四月及十月ノ授業料納付期日ニ授業料ト同時ニ會計

課ヘ納付スルモノトス

本組合ハ組合員ノ名ニ於テ京都帝国大学病院内郵便局ヘ

郵便貯金ヲ為スモノトス

第十五条 本規約ニ基ク組合員ノ郵便貯金通帳ハ本組合ニ

於テ保管スルモノトス但シ組合員ハ組合ニ請求シ自己ノ

貯金通帳ヲ閲覧スルコトヲ得

第十六条 組合員不慮ノ災害其ノ他特別ノ事由アル場合ニ

於テ組合長ノ承認ヲ得タルトキハ第十四条ノ規定ニ依ル

貯蓄ヲ一時中止スルコトヲ得

第十七条 第十四条ノ規定ニ依ル郵便貯金ハ左ノ場合ノ外

払戻サザルモノトス

一、組合ヲ脱退シタルトキ

二、特別ノ事由ニ因リ組合長ノ承認ヲ得タルトキ

第十八条 組合員ノ脱退ハ卒業、退学等学籍ヲ離レタ場合

ニ限ルモノトス

第十九条 本組合ハ組合事務所ニ左ノ帳簿ヲ備フルモノト

ス

一、組合員名簿

二、組合貯蓄台帳

三、組合貯金整理簿

四、組合収支簿

第二十条 郵便貯金ノ払戻ノ承認、組合員ノ組合脱退ノ承

認ニ関スル証明ハ組合長印ヲ以テ之ヲ為スモノトス

第二十一条 本組合ノ経費ハ組合費ノ中ヨリ之ヲ支弁ス

附則

本規約ハ昭和十七年十月一日ヨリ之ヲ実施ス

備考

第十三条ニ依ル昭和十七年度貯蓄額ハ金九円トス(年額拾

八円ノ半額)

第十四条ノ納付期日ハ昭和十七年度ニ限り左記期間トス

自 昭和十八年一月 十日

至 同 年一月三十一日

一〇 全国の学徒に飛檄 京大・尊皇攘夷学徒蹶起大会を

開催

一九四五(昭和二〇)年四月一日

三四

全国の学徒に飛檄 京大・尊皇攘夷学徒蹶起大会を

開催

重大時局に直面「一箇年授業停止」の緊急措置がとられた折から京大では学生有志の発起により去月二十四日午後一時から法経第一教室で尊皇攘夷学徒蹶起大会を開催、学生代表こもく立つて三時間にわたつて赤心を吐露し、左の決議を行ひ、実行委員をあげて全国各帝大および日本全学園に檄をとばして「われら学徒に最難の部署を与へよ」の主旨を徹底すべく挺身することになった

決 議

今般政府は国民学校初等科を除く学園に対して向ふ一箇年間を限り学業停止を決定し学徒をして国土防衛と生産増強に挺身せしめんとする施策の発表を為したり是正に我等京都帝国大学全学生の鶴首待望したる処にして何ぞ

嘗に一箇年の時期を画さんや十年可なり、百年亦宜し、勝利を収むるの日まで我等全力を奮ひて醜敵撃滅に邁進せんのみ、先に「サイパン」「テニヤン」の失陥あり、今又硫黄島將兵の壮烈鬼神を哭かしむる最後の総攻撃の報に接す、驕敵は更に勢に乗じ飛機を發して我が清澄の天空を擾亂し砲列を連ねて我が秋津洲を侵寇せんとす、而も内にありては聖戦完遂の体制未だ必ずしも十全なりといふべからず、嗚呼、我等此の秋にして尊皇殉国の大義に徹し蹶然起つて攘夷の戈を振はずして何時の日か君国に報ずるの機あらんや、政府は宜しく我等京都帝国大学全学生をして即刻最難の部署に就かしめよ、我等必ずや我等が若き力を凝結し心身の一切を捧げ以て皇恩に報い奉り神州護持の礎石たらん

右決議す

京都帝国大学学生一同

兒玉文相(秀雄)(當時)は伊勢神宮参拝桃山御陵参拝等をすませて

一日午前十一時四十分京大をおとづれ、過般上京の寺尾学

生主事から提出された学生大会の決議にもとづき学生代表

を総長室に招致

君らの決議文を感激をもつて拝読した、そして君たちに遇ふのを楽しみにやつてきた、最高学府に学ぶ諸君が率

先蹶起したことはまことにたのもし、このうへは範を天下に示し、全学徒一体となつて国難打開に努められた

い

と激励、各代表は燃える決意を逞しい眉宇にひらめかし、学徒としての矜持(プライド)を忘れず、必ずやりぬきます」と固い決意をのべて会見を終つた

一一 留学生輔導に万全

一九四五(昭和二〇)年五月二日

留学生輔導に万全

「京大」集合教育を施行されることになつた中華民国および南方諸地域留学生は、それぞれ所属各学部長に引見された上、新しい心構へとともに熱心に聴講を始めたが、総長の積極的な教育方針のもとに屢次の学部長会議でその教育の具体的内容を決定、さらに留学生教育協議会を組織して指導に任ずることとなつた

すなはち各学部長に加ふるに牧・舟岡・倉石・近藤・並河(健二)(省五)(武四郎)(金助)(功)

の諸教授と東方文化研究所の吉川・藪内・平岡の諸研究

員が協議員を委嘱せられ五月十二日第一回の会合が開か

れた、その結果として留学生のみを対象とする特別講座、

座談会特別演習等が早急に開かれる運びとなつた

一方中華民国学生の補導については全寮制度を採ることとなり、北白川の洛東アパートがこれに充てられ羽田^(五)総長より「光華寮」と命名、五層の鉄筋コンクリートに万全の設備が加へられ、天長節を卜して総長臨席のもとに開寮式が挙げられた、かくて寮長に新村^(秀二)学生主事が専任され、寮主事に西川主事補とそれ／＼支那文学専攻の士が当り、他に輔導委員として東方文化研究所の前記諸氏に光田^(作也)学生課長が加はり、さらに起居を共にする数名の嘱託が予定されてゐる、一方南方留学生に対しては国際学友会の寮舎が北白川に開設され、山口寮長、大澤副寮長以下によつて輔導されてゐる

なほこれら留学生に対する入学式は十五日午前十時法経第十教室で厳肅に挙行され、羽田総長から委曲をつくした懇篤な訓示につゞいて各学生代表の宣誓があり、一同新しい感激に大東亜建設の熱意に燃えて新生活の第一歩をふみ出した